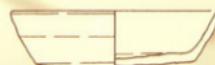
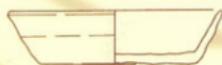


上石遺跡

2000.3

猪主

猪主



兵庫県教育委員会

上石遺跡

2000年3月

兵庫県教育委員会



円山川上空から見た上石遺跡と但馬国府（第2次）



調査区全景（南から）



S K01 出土土師器



包含層 出土遺物

例　　言

1. 本書は、兵庫県教育委員会が実施した城崎郡日高町上石に所在する上石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 日高国府住宅建設に伴う発掘調査で、平成7年度は震災復興事業として調査を実施した。
3. 調査は第1期分については平成6年度に確認調査を、平成7年度に全面調査を実施した。第2期分についての確認調査・全面調査は平成9年度に、すべて兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
4. 平成6年度は西口圭介が、平成7年度は渡辺 昇・鐵 英記が、平成9年度は篠宮 正・鐵 英記・矢野治巳が調査を担当した。
5. 本書で示す標高値は兵庫県都市住宅部のB. M. を使用した。方位は磁北である。
6. 整理作業は、平成11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。
7. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）ならびに兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。
8. 発掘調査・整理調査にあたって下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。
水野正好・寒川 旭・小林基伸・加賀見省一・小寺 誠・兵庫県立歴史博物館・日高町教育委員会
(敬称略)



図1　日高町の位置

本文目次

I.はじめに	
1 調査に至る経緯	(渡辺) 1
2 確認調査の経過と結果	(西口) 1
3 平成7年度全面調査の経過	(渡辺) 3
4 平成9年度の調査経過と結果	(篠宮) 5
5 整理作業の経過	(渡辺) 8
II.位置と環境	(鐵) 9
III.遺構	12
1 掘立柱建物跡	15
S B01・02・04・05・06・11・12・13	(渡辺)
S B03・05・07・08・09・10	(鐵)
2 溝	27
S D01・06・07	(渡辺)
S D03・04・08	(鐵)
3 土坑	(渡辺) 28
4 井戸	(鐵) 31
5 噴砂跡	(鐵) 38
IV.遺物	(渡辺・鐵) 35
1 遺構出土遺物	35
2 整地層出土遺物	43
3 包含層出土遺物	52
V.上石遺跡出土の漆付着土器について	(遠藤・元吉) 66
1 はじめに	66
2 資料と調査方法	66
3 断面の観察結果	67
4 考察	67
VI.おわりに	(渡辺・鐵) 70

挿 図 目 次

図 1	日高町の位置	
図 2	調査区 平面図・断面図	6
図 3	出土遺物実測図	7
図 4	上石遺跡の位置と周辺の遺跡	10
図 5	調査区平面図	12
図 6	土層断面図	13
図 7	S B01 実測図	14
図 8	S B02 実測図	15
図 9	S B03 実測図	16
図10	S B04 実測図	17
図11	S B05 実測図	18
図12	S B06 実測図	19
図13	S B07 実測図	20
図14	S B08 実測図	21
図15	S B09 実測図	22
図16	S B10 実測図	23
図17	S B11 実測図	24
図18	S B12 実測図	25
図19	S B14 実測図	25
図20	S B13 実測図	26
図21	S K01 実測図	29
図22	S K02 実測図	30
図23	S K07 実測図	31
図24	S E01 実測図	32
図25	S E02 実測図	33
図26	掘立柱建物跡 出土遺物実測図(1)	36
図27	掘立柱建物跡 出土遺物実測図(2)	37
図28	土坑 出土遺物実測図(1) (S K01)	38
図28	土坑 出土遺物実測図(2)	39
図30	井戸 出土遺物 実測図	40
図31	遺構 出土遺物 実測図	41
図32	整地層 出土遺物 実測図(1)	42
図33	整地層 出土遺物 実測図(2)	43
図34	包含層 出土遺物 実測図(1)	44
図35	包含層 出土遺物 実測図(2)	45
図36	包含層 出土遺物 実測図(3)	46
図37	包含層 出土遺物 実測図(4)	47
図38	包含層 出土遺物 実測図(5)	48
図39	包含層 出土遺物 実測図(6)	49
図40	包含層 出土遺物 実測図(7)	50
図41	包含層 出土遺物 実測図(8)	51
図42	包含層 出土遺物 実測図(9)	53
図43	包含層 出土遺物 実測図(10)	54
図44	包含層 出土遺物 実測図(11)	55
図45	包含層 出土遺物 実測図(12)	56
図46	包含層 出土遺物 実測図(13)	57
図47	包含層 出土遺物 実測図(14)	58
図48	包含層 出土遺物 実測図(15)	59
図49	包含層 出土遺物 実測図(16)	60
図50	包含層 出土遺物 実測図(17)	61
図51	包含層 出土遺物 実測図(18)	63
図52	包含層 出土遺物 実測図(19)	64
図53	包含層 出土遺物 実測図(20)	65

写 真 目 次

写真 1	確認調査風景	2
写真 2	確認調査の状況(左1トレチ、右2トレチ)	2
写真 3	全面調査調査風景	3
写真 4	全面調査調査風景	4
写真 5	西壁土層堆積状況	5
写真 6	平成9年度調査区と平成7年度調査地点(建物)	7
写真 7	水田(東から)	7
写真 8	整理作業風景	8
写真 9	周辺の遺跡(左)橋塙古墳(右)但馬国分僧寺跡	11

表 目 次

表 1	上石遺跡出土漆付着土器一覧	66
表 2	遺物観察表	74~89
表 3	土製品計測表	90
表 4	鉄器計測表	90

図版目次

- 卷頭図版 1 (上) 円山川上空から見た上石遺跡と但馬國府(第2次)
 (下) 調査区全景(南から)
- 卷頭図版 2 (上) S K01 出土土師器
 (下) 包含層 出土遺物
- 図版 1 空中写真(国土地理院撮影)
- 図版 2 (上) 但馬國府上空から見た上石遺跡と円山川方面
 (下) 円山川上空から見た上石遺跡と但馬國府・但馬國分寺方面
- 図版 3 (上) 調査区空中写真(南西上空から)
 (中) 空中写真(北西上空から)
 (下) 空中写真(南東上空から)
- 図版 4 (上) 調査区空中写真(北東上空から)
 (下) 調査区空中写真
- 図版 5 (上) 調査区南半全景(南から)
 (下) 調査区北半全景(東から)
- 図版 6 (上) 調査区全景(南から)
 (下) 調査区全景(北東から)
- 図版 7 (上) S B01(北から)
 (下) S B02(北西から)
- 図版 8 (上) S D03~S D05とS B03(北から)
 (下) S B03(北東から)
- 図版 9 (上) 北東部建物群(S B04他 南から)
 (下) S B04(東から)
- 図版 10 (上) 北側建物群(S B07~S B14 東から)
 (下) S B07(南東から)
- 図版 11 (上) 南側建物群(S B04~S B06 南から)
 (下) S B13(北から)
- 図版 12 (上) S B11(南から)
 (下) S B11・S B12(東から)
- 図版 13 (上) 調査区北半全景(東北東から)
 (中左) S B11 P 290・P 291
 (中右) S B12 P 301
 (下右) S B11 P 293
 (下右) S P14
- 図版 14 (左) S K01
 (右) S K01 裸除去後
- 図版 15 (上) S K02(東から)
 (中) S K02(南から)
 (下) S K02 炉壁(東から)
- 図版 16 (上) S K07(南から)
 (中) S K04
 (下) S K05
- 図版 17 (上) S E01(西から)
 (下) S E01遺物出土状態(南から)
- 図版 18 (上) S E02・S E04・S K03(南東から)
 (下) S E03(北から)
- 図版 19 遺物出土状態
- 図版 20 噴砂
- 図版 21 挖立柱建物跡出土遺物(1)
- 図版 22 挖立柱建物跡出土遺物(2)
- 図版 23 挖立柱建物跡出土遺物(3)
- 図版 24 挖立柱建物跡出土遺物(4)
- 土坑出土遺物(1)
- 図版 25 土坑出土遺物(2)
- 図版 26 土坑出土遺物(3)
- 図版 27 土坑出土遺物(4)
- 図版 28 土坑出土遺物(5)
- 図版 29 土坑出土遺物(6)
- 井戸出土遺物・建物外ピット出土遺物(1)
- 図版 31 建物外ピット出土遺物(2)
- 整地層出土遺物(1)
- 図版 32 整地層出土遺物(2)
- 整地層出土遺物(3)
- 図版 33 包含層出土遺物(1)
- 図版 34 包含層出土遺物(2)
- 図版 35 包含層出土遺物(3)
- 図版 36 包含層出土遺物(4)
- 図版 37 包含層出土遺物(5)
- 図版 38 包含層出土遺物(6)
- 図版 39 包含層出土遺物(7)
- 図版 40 包含層出土遺物(8)
- 図版 41 包含層出土遺物(9)
- 図版 42 包含層出土遺物(10)
- 図版 43 包含層出土遺物(11)
- 図版 44 包含層出土遺物(12)
- 図版 45 包含層出土遺物(13)
- 図版 46 包含層出土遺物(14)
- 図版 47 包含層出土遺物(15)
- 図版 48 包含層出土遺物(16)
- 図版 49 包含層出土遺物(17)
- 図版 50 包含層出土遺物(18)
- 図版 51 包含層出土遺物(19)
- 図版 52 包含層出土遺物(20)
- 図版 53 包含層出土遺物(21)
- 図版 54 包含層出土遺物(22)
- 図版 55 包含層出土遺物(鉄器)
- 図版 56 包含層出土遺物(石器)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

日高国府住宅は、JR山陰本線国府駅の南東に位置する県営住宅である。建物の老朽化に伴い建て替え工事が計画され、それに合わせて周辺の環境整備などを含めて新しい住宅建物が策定された。ただ、駅名が示しているように当地周辺は古代但馬国の国府推定地であり、遺跡の存在する可能性が高いものと思われた。そのため、工事に先立ち確認調査をする必要性があり、工事前から兵庫県都市住宅部住宅建設課と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の間で協議がなされていた。平成7年2月13日付けの住宅建設課からの調査依頼により、調査は積雪のある2月14日に実施した。調査に際しては、日高町教育委員会 加賀見省一氏の教示・協力を戴いた。

調査対象地は約50m×約55mの長方形を呈し、現状の地目は水田である。このため、試掘坑の設定地点を四隅寄りに4ヶ所設定し、下層の状況に従い試掘坑を追加した。各々、試掘坑の規模は1.5×4.0mの規模で設定し、必要に応じて拡張を行った。

また、最終的には遺構の密度・遺構面の範囲を明確にするため、TP2とTP3の間にTP5を設定している。

いずれの試掘坑も堀削はパワーショベルによって層位を観察しつつ掘り下げ、人力による精査を加えている。

2. 確認調査の経過と結果

確認調査は震災後の慌ただしい中、当初の予定より遅れて平成7年2月14日に行った。大雪の翌日で相当量の積雪の状態で確認調査を実施した。調査は機械堀削を中心とし、断面観察などを平行しつつ人力堀削を加味しつつ調査を行った。県営住宅建設地の敷地の4隅に近い4ヶ所と中央にトレンチを5ヶ所設定した。

調査の結果、中世の包含層・柱穴、8～9世紀の遺物包含層、7世紀代の遺物を含む谷部の堆積層及び古代末前後の地震に起因すると考えられる噴砂を検出した。

中世の土壤層（遺物包含層）は各試掘坑において現地表下0.6～0.8mで検出されている。土壤層の厚さは約15cmを測る。また、柱穴は5ヶ所の試掘坑のうち2ヶ所の試掘坑（TP2・4）で土壤層の下より検出している。

TP2では4個の柱穴を検出し、うち3個は列として捉えられる。柱穴からは白磁碗片・須恵器碗片が出土しており、時期は12世紀代と考えられる。いずれも径40cmを測る。

TP2では全体に中世面は南側に向かって出現深度が深くなっている、中央では現地表下約0.8mで出現し、柱穴検出可能な面は地表下約1.0mである。

TP4では現地表下約0.9mで土壤層が出現し、柱穴検出可能な面は現地表下約1.1mである。検出された柱穴は炭・焼土を含んでいる。径約40cmを測る。

TP1においては遺構は検出されなかったが、同一の層位が現地表下0.6mで認められており、TP2・4と同じく中世の遺構面が展開しているものと考えられる。

また、TP3では中世面は下層の8～9世紀の遺物包含層と不明確な状態で出現しており、その状態

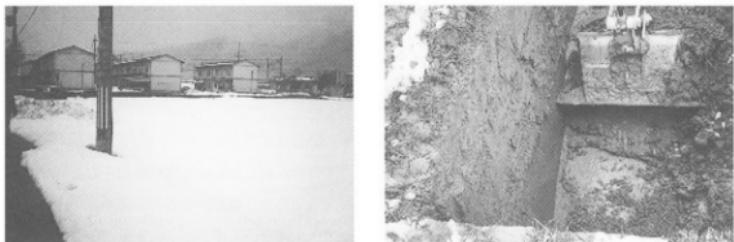


写真1. 確認調査風景

はTP2・3間に設定したTP5の中央付近まで続いている。

TP3・4では中世面下約15cmより8～9世紀の遺物・炭化物を含む層位が検出されている。TP1・2・5においては対応する層位は存在するが、遺物は見受けられない。

TP1～TP4の状況からみて、調査対象範囲は谷部もしくは旧河道上に存在すると考えられ、谷部の中央に近いTP3・4では8～9世紀の遺物の堆積が顕著に見られたものと考えられる。また、TP3で中世の遺構が見られなかった点については、逆に中世に至っても地面が安定しなかったためと考えられる。

谷部(旧河道)では8～9世紀の遺物堆積層よりも下層の青灰色シルト中にも若干の遺物を含んでおり注意が必要である。

谷部は地表下約2.5mで礫層に到達するが、湧水を伴い詳細な調査は出来なかった。ただし、この礫層を供給源とすると考えられる噴砂(走行-N20°E)をTP4で検出している。時期は8～9世紀よりも新しく、12世紀よりも古い時期の地震に伴うものと考えられる。

調査の結果、調査区のはば全域に中世の遺構面が展開することが判明した。また、南東半を中心にして8～9世紀の遺物堆積層を検出した。当該地周辺では、遺跡の存在は確認されておらず今回の調査ではじめて遺跡の存在が明らかになった。また、噴砂の検出例は但馬では乏しく、詳細な調査を実施すれば、古記録との照合によって地震の発生年代等を特定できる可能性は非常に高く、注目される資料・検出例であろうと思われる。



写真2. 確認調査の状況(左1トレンチ、右2トレンチ)

3. 平成7年度 全面調査の経過

1995年1月17日午前5時46分に起こった未曾有の大震災である兵庫南部地震によって兵庫県の状況は一変した。埋蔵文化財の調査も当然その1つである。多くの関係者・担当者もあの状況のなかで発掘調査をはじめとして文化的なことは当分出来ないと放棄し締めざるを得ないと思った。しかし、被災者からそのような声はほとんど聞こえず、不思議なほど清々肅々と調査ができた。埋蔵文化財の調査も早い段階から文化庁をはじめとする行政機関と各地の支援団体の協力・支援によって、震災後の遺跡の取り扱い方針が成立し、発掘調査が行われるようになった。

全国から埋蔵文化財専門職員が応援に駆けつけて戴いた。その嚆矢となった兵庫県教育委員会主体の調査がこの上石遺跡である。知事会の依頼のなかにも遺跡名（事業の代表例として）上げられていた。但馬であることが考慮されて、兵庫県の職員2名が担当者として調査を実施したが、調査の間には各府県の支援の方々や兵庫県埋蔵文化財調査事務所復興調査班のデスク担当の方にも協力・参加戴いて調査を行った。はじめて多くの専門職員を迎えての調査であり、楽しく意義深い調査となり、印象の強い遺跡となつた。この上石遺跡の調査経緯が県営住宅建設ということで、震災復興事業として採択されたことによって復興調査班が担当することになったものである。次年度からは激震地周辺しか復興調査の対象にならなかったこともあって、復興調査の中では特殊な遺跡の位置付けとなつた。他府県からの支援職員や兵庫県のデスク担当の職員の応援を得て、調査を進行したという特殊な遺跡である。通常数名の関係者で実施される遺跡の調査を担当者だけでも十数人になると状況であった。今は各府県に戻って活躍されている支援職員の方々や報告書整理前に急逝した兵庫県の水口富夫氏による遺構図も残されている。

調査は平成7年6月12日に調査設定の杭打ちを行ってから、最後の断ち割りを行い、事務所を引き上げる8月25日までの実働45日間を調査に費やした。この年は夏期の降雨日が多く、調査に支障をきたしたが、何とか調査を終了することができた。当初予想していた以上に遺構の密度が高く、また包含層の密度も高かった。但馬国府の一角として恥じない遺跡であることが調査過程で明らかになりつつあった。しかし、調査途中での遺跡の内容変更ということや震災関連事業の最初の調査であるという意識の高揚もあって、発掘調査の変更にまでは到底至らなかった。その分調査においては過重な分が多くあった。それらは調査関係者・参加者の協力の元、無事消化することができ、さらに報告書とまでなつたことを喜んでいる。

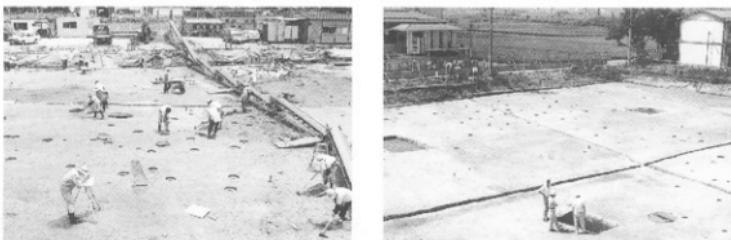


写真3. 全面調査調査風景

調査の組織

調査主体

兵庫県教育委員会

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査班

総務課

調査専門員 山本三郎

課長 石井 守

主査 水口富夫

事務職員 飯尾彦人

主査 村上泰樹

調査担当

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 復興調査班

主査 渡辺界

技術職員 鐘 英記

調査参加支援職員

(大阪府) 桑本 哲・福宜田佳男・横田 明 (京都府) 藤井 整

(和歌山県) 黒石哲夫 (岡山県) 岡本泰典 (岐阜県) 長屋幸二

調査参加者

前田陽子・山本陽子・戸田悦子・橋本まり子・吉井由美子

調査受託

大山土建株式会社 現場代理人 仲治彰二



写真4. 全面調査調査風景

4. 平成9年度の調査経過と結果

(1) 調査の経緯

兵庫県都市住宅部が県営住宅整備（日高国府団地1期）事業の西隣に県営住宅整備（旧国府団地2期）事業を計画した。当該地は平成7年度に調査を実施した上石遺跡の西側にあたるため、事業予定地内の遺跡の有無を確認し、その結果を受けて全面調査を実施した。

(2) 確認調査

①第1次

平成9年9月19日に確認調査を実施した。事業予定地内に9ヶ所のグリッドの約62m²を設定し、機械および人力により掘削した。調査地点は旧国府テラス住宅が残っており、その間に調査区を設定した。

調査は、企画調整班矢野治巳が担当した。

調査の結果、平成7年度の調査区に接する4ヶ所の地点で、疎らであるが、遺構面および遺物を検出した。これにより、遺跡の広がりは前回調査地に接する部分のみであるが明らかになったが、旧住宅などの構造物などのため、詳細なデータを得られなかつた。

②第2次

平成9年12月10日・11日に第2次確認調査を実施した。第1次確認調査で分布範囲は明らかにできたが、詳細なデータが得られなかつたため、分布範囲内に3ヶ所のトレンチの約132m²を設定し、機械および人力により掘削した。調査地点は旧国府テラス住宅が残っており、その間に調査区を設定した。

調査は、調査第3班鐵英記と企画調整班矢野治巳が担当した。

調査の結果、事業予定地内の東南隅部分で、前回調査した溝の一部が延びている可能性が確認でき、この部分の全面調査が必要であると判断した。

(3) 全面調査

①調査経過

調査は、平成10年2月16日から3月10日にかけて実施した。範囲は2回の確認調査の結果を受け、第1期工事の西側に接して建築される予定の建物の約半分の414m²を対象とした。

調査方法は、旧国府テラス住宅建設時の盛土および旧耕作土を機械により除去した後、人力によって慎重に掘削し、遺構や遺物の発見に努めた。遺構検出・堀削終了後、平面図や断面図の作成を行い、全景の写真撮影を行い埋め戻し、調査を終了した。

調査は、調査第3班鐵英記と企画調整班矢野治巳が担当した。



写真5. 西壁土層堆積状況

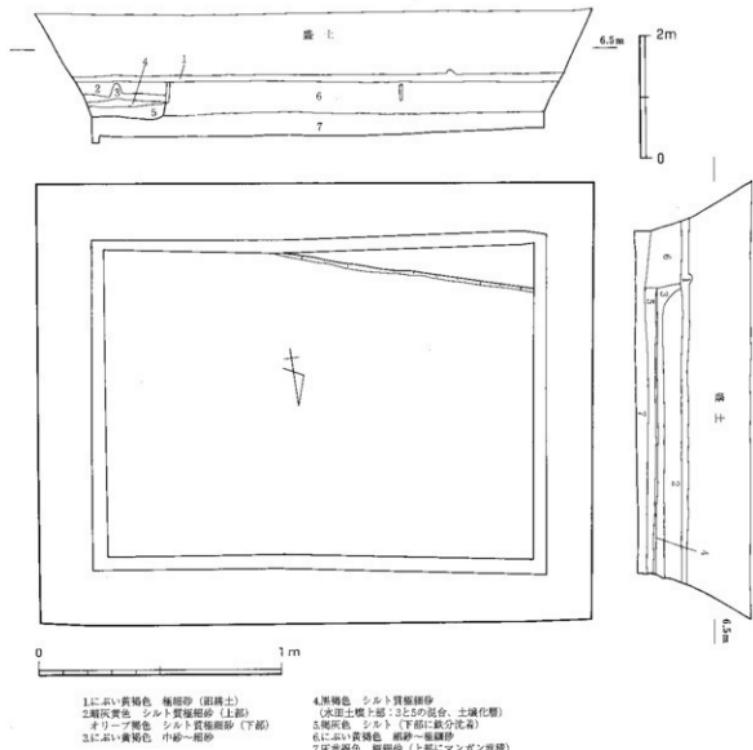


図2 調査区 平面図・断面図

が担当した。

②検出遺構（図2、写真5、7）

調査の結果、現地表面から約1.5m下げた標高5.55mで黒褐色シルト質極細砂からなる水田土壤層を検出した。この土壤層は調査区のはば全面に広がるが、南西隅では検出できなかった。これは土層観察の結果、調査地点の南西隅は地形的に高く、水田面が高くなっているため、0.4mの段を形成している。この段は畦畔の一部で、水田面を形成していたと思われるが、畦畔および水田面は削平されている可能性が高い。段の方向は北から西に79°振っている。水田面は15cm程度、にぶい黄褐色の中砂から細砂（3層）で覆われており、洪水に遭ったと考えられる。水田土壤は2層存在し、上層（4層）は5cm～10cm程度の黒褐色のシルト質極細砂であり、下層（5層）は15cm程度の褐灰色のシルトで下部に鉄分が沈着している。

なお、水田面の下層は灰黃褐色の極細砂層が堆積しており、遺構面は検出できなかった。



写真6. 平成9年度調査区と平成7年度調査地点（建物）

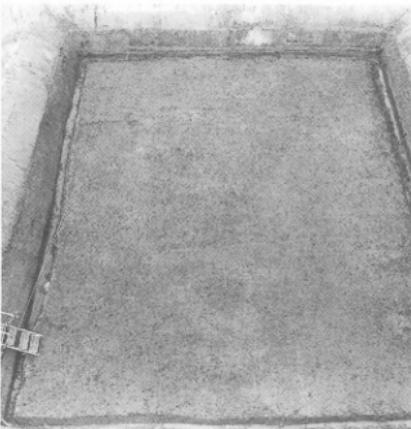


写真7. 水田（東から）

③出土遺物（図3）

遺物には、遺物整理箱1箱が出土した。土器と鉄器が存在する。

土器

土器は須恵器と土師器と青磁がある。

1～3は須恵器鉢の口縁部の小破片で、片口が付くと思われるが、残っていない。

口径は25cm～29cm程度あり、口縁端部は1は上方に、2・3は上下に拡張し、面を作り出している。

4は青磁碗の体部破片である。内面に片影りによる蓮華文を施し、外面は無文である。

鉄器

1点出土した。5は遺存状態が悪く、錆で覆われている。長さ5.6cm以上、幅最大2.4cm、厚さ0.8cmで刀子の柄などが考えられる。

④小結

今回の調査では、出土遺物から12世紀から13世紀にかけての水田を検出したのみである。出土遺物数は生産域であるため非常に少ない。東隣の平成7年度に検出した古代に属する遺構は、今回の調査地点には延びず、他の3方向に続くものと考えられる。

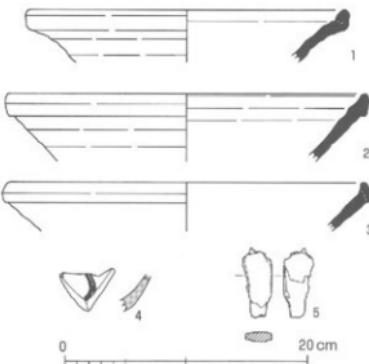


図3 出土遺物実測図

5. 整理作業の経過

整理作業は平成11年度の単年度で実施した。兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で整理調査を実施した。単年度の作業であることから、嘱託員の方々には懐ただしい思いをさせたものと思う。年度当初近くから接合作業をはじめ報告書刊行まで無事終了した。

整理作業は平成7年度・9年度の2期の全面調査成果を報告している。両者を合わせて整理作業を実施した。包含層出土遺物の保存状態が良好で、図化可能な土器も多数あった。可能な限り図化に努めた。墨書き土器や漆が塗布された碗もあり、保存処理担当職員の協力を得て、作業を実施していった。

調査の組織

調査主体

兵庫県教育委員会

調査事務

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

総務課 課長 岩澤重則 整理普及班 調査専門員 岡崎正雄

事務職員 平井敏之 主査 森内秀造

主査 姫田淳子

調査担当

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

復興調査班 主査 渡辺昇 調査第1班 主任 鐘英記

(保存処理)

整理普及班 主査 加古千恵子 主任 中村弘

技術職員 岡本一秀

調査参加者

八木和子・平松ゆり・尾鷲都美子・高田健一・吉田優子・木村淑子・竹内泰子

前田千栄子・鈴木まさ子・小寺恵美子・横山キエ・芦田英美・柏原美音

岡崎輝子・松本嘉子・奥野政子・佐々木誓子・三好綾子・遠藤利恵



写真8. 整理作業風景

II. 位置と環境

日高町は但馬地方のほぼ中央に位置する。町域の大部分を占める山地は、中国山地の東端部で、漸次東に向かって低平化していく部分に当たる。上石遺跡は円山川と八代川の間に形成された沖積低地に立地している。現地表面の標高は約6mである。

旧石器時代

但馬地方では関宮町で旧石器時代終末のナイフ形石器が出土しており、旧石器時代終末から縄文時代初頭に属する尖頭器が義父町で発見されている。他にも若干の最終資料は報告されているが、調査例がなく、今後の発見が期待される。

縄文時代

縄文時代になると発見された遺跡の数が増大してくる。町内においても、神鍋高原の周辺で神鍋山遺跡・山宮遺跡といった早期から前期の遺跡が知られている。山宮遺跡では押型文土器の良好な資料が出土し、配石遺構も認められる。神鍋山遺跡でも早期に属する住居跡・配石遺構の他、前期の遺物も多く見つかっている。中期の遺物に関しては、神鍋山周辺では環境の変化のためか、ほとんど発見されていない。後期になると神鍋山でも遺物の出土が認められる他、福布ヶ森西遺跡・福布ヶ森東遺跡といった低地部でも遺物が出土するようになる。奈佐谷の最奥部に位置する辻遺跡では後期を中心とした遺物が発見されている。

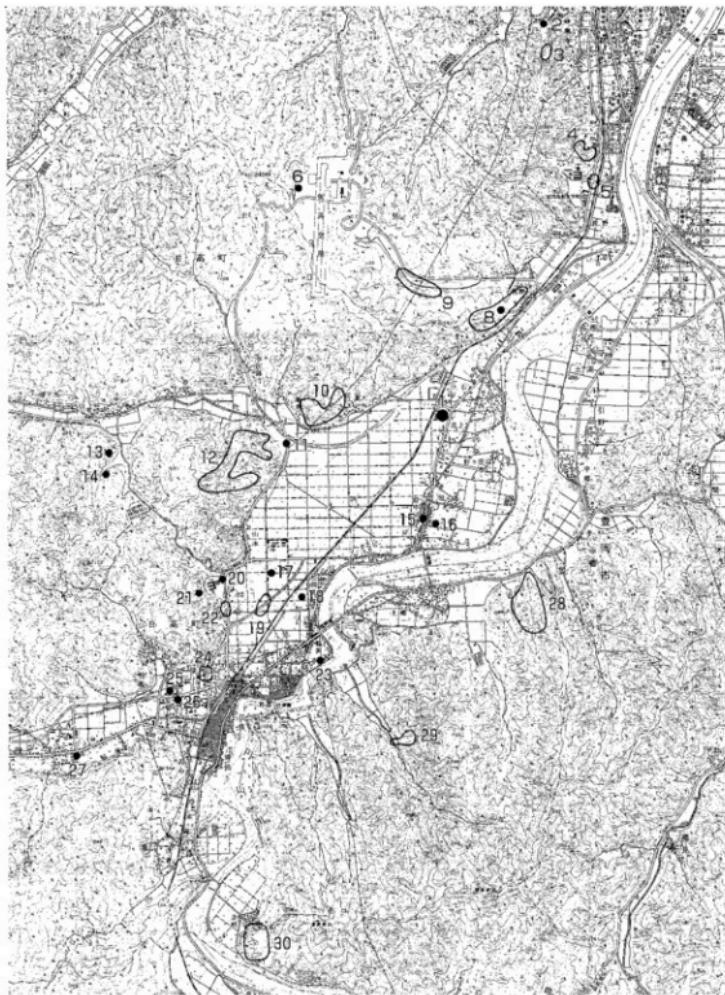
弥生時代

円山川下流の低地では前期の遺物はあまり出土せず、中期以降に遺跡が増大してくる。数少ない前期の遺跡には出石町宮内黒田遺跡があり、前期後半の土器が出土している。また、古くから多くの弥生土器が出土したことで知られる豊岡市女代神社遺跡でも、前期・中期に通るものも若干含まれている。日高町内では福布ヶ森西遺跡で中期から後期の土器が、福布ヶ森東遺跡で後期の土器が多く出土しているほか、南八代田遺跡でも後期の土器が出土している。しかし、遺構が確認されている例が少なく、集落の様相には不明な点が多い。また、久田谷遺跡からは破碎された突線紐V型式の銅鐸が出土している。

古墳時代

日高町から豊岡市にかけての尾根筋には、多くの古墳群が形成されている。また、小型の前方後円墳であるホーキ谷古墳・見手山古墳も、単独で存在するのではなく、古墳群に含まれるあり方を示す。

妙楽寺遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓群で構成される。盛り土ではなく、尾根を削り出す形で墳丘を持つものがほとんどである。ホーキ谷古墳は後世の削平により破壊されているが、全長56mを測る。北但馬では最大の前方後円墳である。前方部の主体部は不明だが、後円部に2基の箱式石棺があったと思われる。須恵器が認められないことから5世紀前半に位置づけられる。このほかに5世紀代に属する古墳には馬場ヶ先古墳がある。この古墳は平野部に立地した数少ない古墳の一つで、主体部は川原石積の堅穴式石室である。刀劍類・馬具・玉類の出土が伝えられている。また、副葬品がないため時期の決定が難しいが、羽根山古墳で見つかった箱式石棺はこの時期のものである可能性が高



- | | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|--------------|------------|-------------|
| 1. 上石遺跡 | 2. 見手山古墳 | 3. 紗秦寺遺跡 | 4. 西光寺古墳群 | 5. 女代神社遺跡 | 6. 岩木城跡 |
| 7. ホーキ古墳群 | 8. ホーキ古墳 | 9. 上佐野古墳群 | 10. 竹原・森井古墳群 | 11. 南八代古道跡 | 12. 大木谷古墳群 |
| 13. 宮ノ谷遺跡 | 14. イチゴ谷遺跡 | 15. 薩島神社境内礎石 | 16. 横瀬遺跡 | 17. カナケダ遺跡 | 18. 田原遺跡 |
| 19. 深田遺跡 | 20. 但馬国分尼寺跡 | 21. 羽根山古墳 | 22. 水上遺跡 | 23. 馬場・先古墳 | 24. 但馬国分寺跡 |
| 25. 撫布ヶ森西遺跡 | 26. 撫布ヶ森東遺跡 | 27. 南構遺跡 | 28. 滝伸谷古墳群 | 29. 衛藏古墳群 | 30. シケリ谷古墳群 |

図4 上石遺跡の位置と周辺の遺跡 ($S = 1/50,000$)

い。見手山古墳は妙楽寺遺跡から続く尾根上にあり、全長34mを測る。後円部には礫敷きの横穴式石室が設けられ、盗掘を受けていたものの、須恵器の壺に貝が供献された状態で発見された。

群集墳には木棺墓を主体部とするものと横穴式石室を主体部とするものに大別される。楯縫古墳群は大型の円墳である楯縫古墳を含む古墳群で、一部堅穴式石室を持つものも含むが、横穴式石室を主体部とする。なかでも、直径約30mの円墳である楯縫古墳は、片袖の横穴式石室を主体部とし、武器・馬具・須恵器などが出土し、6世紀代に営まれた古墳を代表するものである。シゲリ谷古墳群も横穴式石室を主体部とし、鏡・玉韁・須恵器が出土している。

生産遺跡としては、須恵器の窯跡が数基確認されている。宮ノ谷窯跡は調査が実施された唯一の例で、詳細は不明ながら、7世紀初頭の遣存状況のよい登り窯である。イチゴ谷窯跡は窯体の状況は不明であるが、採集資料から見て7世紀半ばに位置づけられる。

歴史時代

律令期の地方統治機関である但馬国府の比定地が日高町国府周辺であることもあり、これまでにも官衙的性格を持つ遺跡が確認されている。福布ヶ森西遺跡では掘立柱建物群・井戸・溝などの遺構とともに、奈良時代から平安時代にかけての遺物が見つかっている。小型の建物が多く、雜舎のなものと考えられている。国府推定地に含まれる水上遺跡・深田遺跡では井戸・柱穴といった遺構の他、官衙的な性格を持つ遺物が出土している。特に深田遺跡からは迦葉軸・木簡・帶金具・墨書き器が出土している。この他では出土の経緯は不明であるが、鹿島神社境内に礎石が遺されているほか、隣接する權現遺跡でも奈良時代の須恵器などが出土している。

また、寺院では、但馬國分寺で金堂跡・塔跡が確認され、瓦・須恵器・風鐸の他木簡が出土している。伽藍配置は塔跡と金堂跡がほぼ東西に並ぶ型式である。金堂跡は回廊によって中門跡と結ばれている可能性が高い。なお、出土木簡には但馬國分寺の建物名称・寺院組織を窺わせるものが多く、营造当時の姿を知る上で貴重な資料である、但馬國分尼寺は礎石・瓦が見つかっているものの、伽藍配置など不明な点が多い。

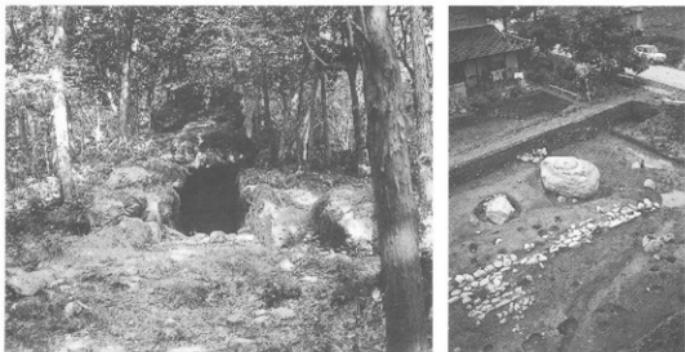


写真9. 周辺の遺跡 (左) 段縫古墳 (右) 但馬国分寺塔跡

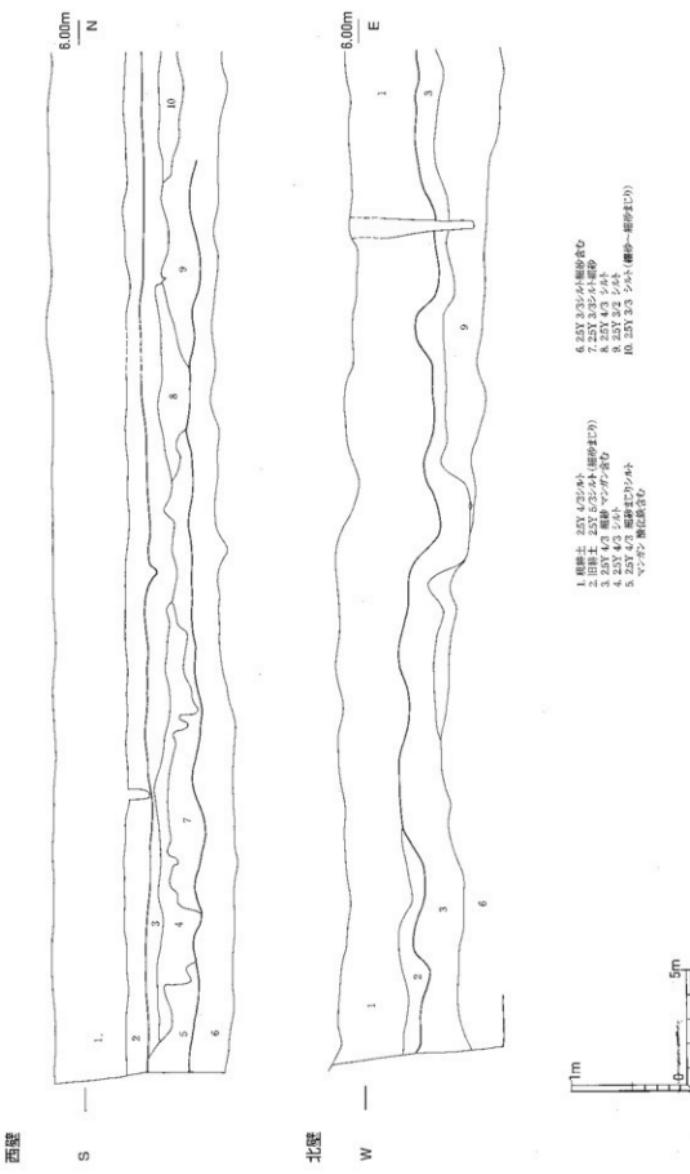
III. 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物跡14棟、井戸4基、土坑6基とピット10数基である。他に遺構ではないが、地盤の痕跡である噴砂も検出している。レベル的には2面の検出面（標高）の差は大きくはないが、上下2面で遺構を確認している。上面は平安時代から鎌倉時代（この面で一部それよりも新しい中世末



図5 調査区 平面図

図 6 土層断面図



～近世の遺構も確認している)で、下面是奈良時代後半から平安時代はじめの時期である。

基本層序は、第1層—耕作土、第2層—床土、第3層—黄灰色シルト、第4層—黄褐色中砂、第5層—灰色シルト、第6層—灰黑色シルトである。部分的に変化しているものの、大きな層序の差もなく、特に下層の旧河道以外では水平堆積部分が多い。洪水の被害は受けているものの、大きな地形の変化のない安定した地域だったようである。遺構面は第5層上面が上層遺構面で、第6層上面が下層遺構面である。

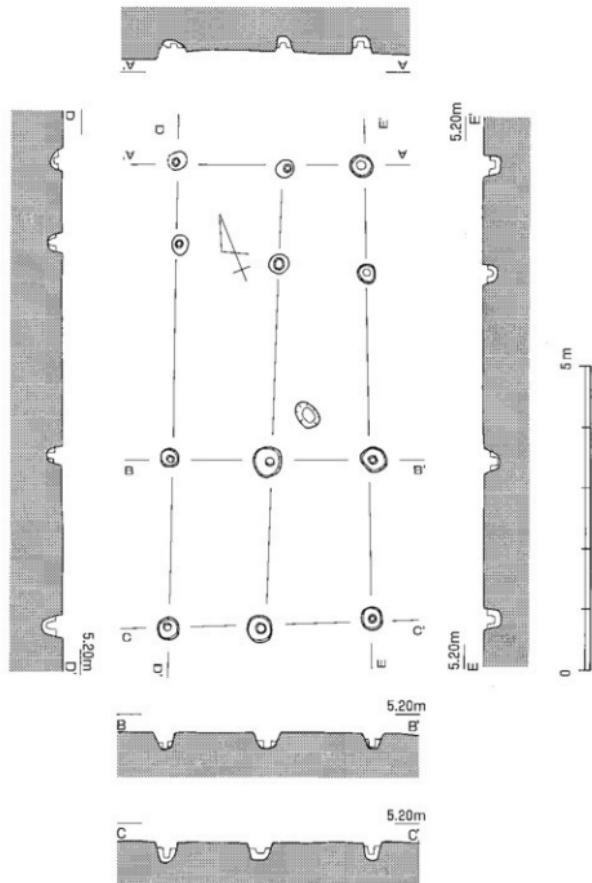


図7 SB01 実測図

1. 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は14棟検出している。建物の主軸方向が3種類あり、各々時期を示しているものと思われる。主軸方向が南北に近い建物が古く、角度を振っている建物が新しいと思われる。南北に近いSB12などが上石遺跡で最初に築かれた建物であろう。次にSB01など大半の遺構の時期である。東にやや振った主軸を持つもので、N24°~27°Eに主軸を持つ。この時期は掘立柱建物跡でも切り合い関係があり、長期間遺構が存続した時期である。上石遺跡の盛期である。溝もこの建物に伴うものが多く、溝で囲まれた集落である。新しい時期の掘立柱建物跡がSB07のようにより東に主軸を振った遺構で、N45°Eの主軸を持つ。

①SB01

2×3間の小型の建物である。中央に土坑(SK01)を有していることが特徴である。普通の土坑ではなく、祭祀的な性格を持つ土坑である。祭祀的な土坑を伴うことから、SB01自体も同様な性格を持つ建物かもしれない。主軸は南北方向から東に降ったN24°Eである。平面規模は、東西が3.2m、南北

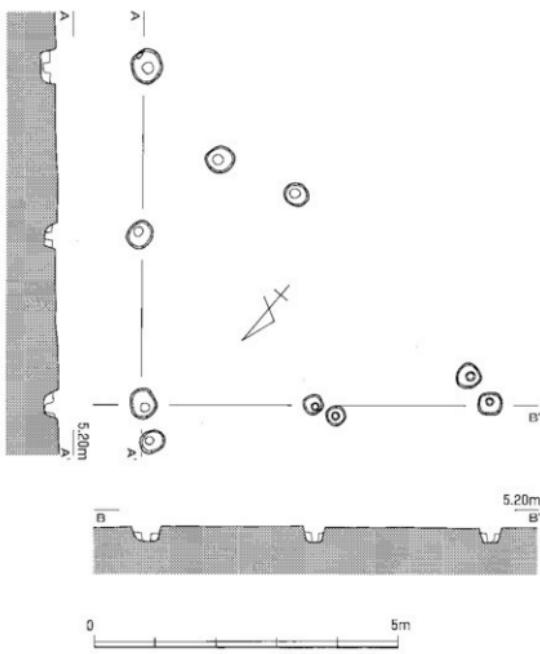


図8 SB02 実測図

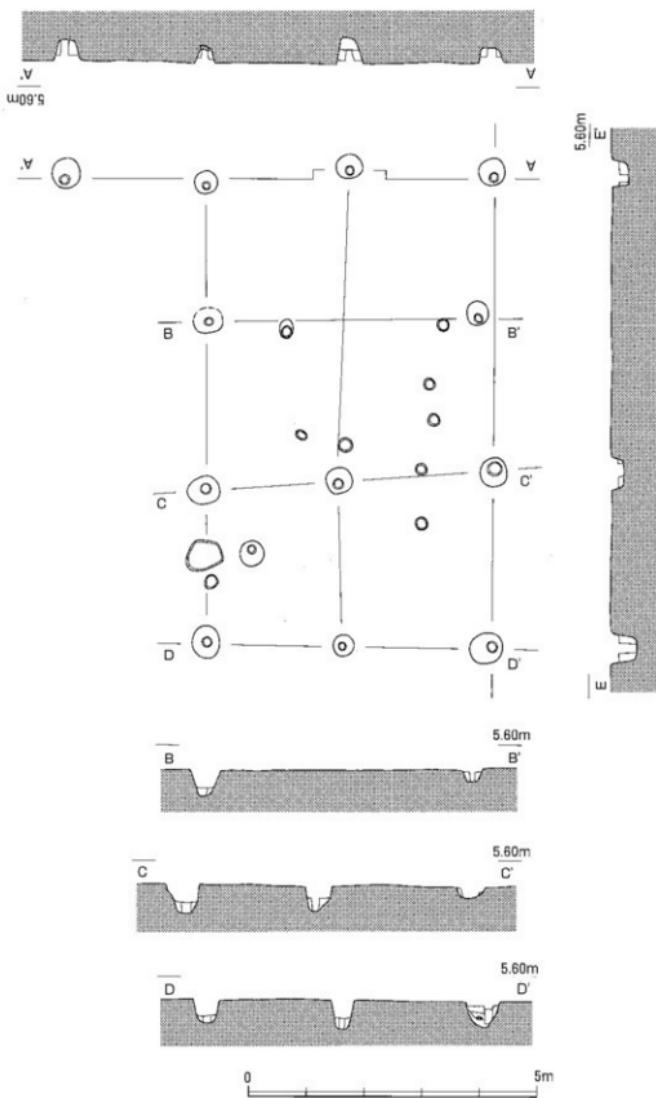


図9 SB 03 実測図

が7.6mを測る。柱間は、東西が東から1.4m、1.8m、南北が北から1.9m、3.1m、2.6mを測る。

出土遺物は中央のSK01周辺から出土しているが、すべてSK01に伴うものと思われる。それ以外は柱穴から僅かに小片が出土しているにすぎない。須恵器・土師器の小片で時期を確定できる資料はない。ただ、SK01を伴うことから、上石遺跡では古い時期の遺構である。柱穴から出土した土器も奈良時代の土師器・須恵器に限られている。

②SB02

調査区南端で検出した遺構で、南側の調査区外に延びている。調査した範囲では、 2×2 間を検出している。N38°Eと大きく主軸方向が大半の建物とされている。SB07と同じく新しい時期の遺構と考えている。 2×2 間で、検出した柱間の距離がほぼ等しいことから、どちらが桁方向かは判然としない。現状で調査した数値は柱間がすべて2.8mである。すなわち、北東辺も北西辺も5.6mを測る。柱穴の径は北東辺の方がやや大きくなっている。平面規模からだと南西側が桁方向になろうか。深さはほとんど変化なく、ともに40cmである。

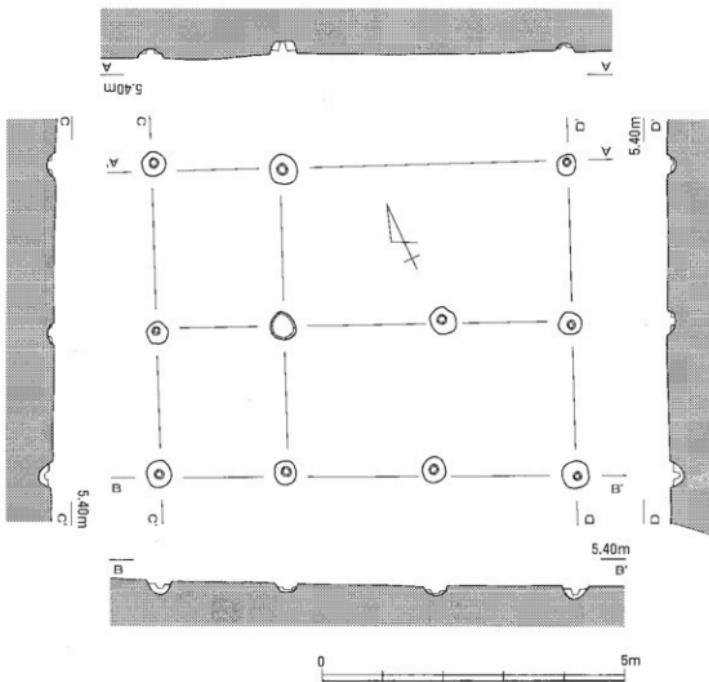


図10 SB04 実測図

出土遺物の量はやや多く、掘立柱建物跡のなかでは多い方である。図化した遺物は須恵器 6 点、土師器 1 点の 7 点である。柱穴出土の土器も同時期の須恵器・土師器である。

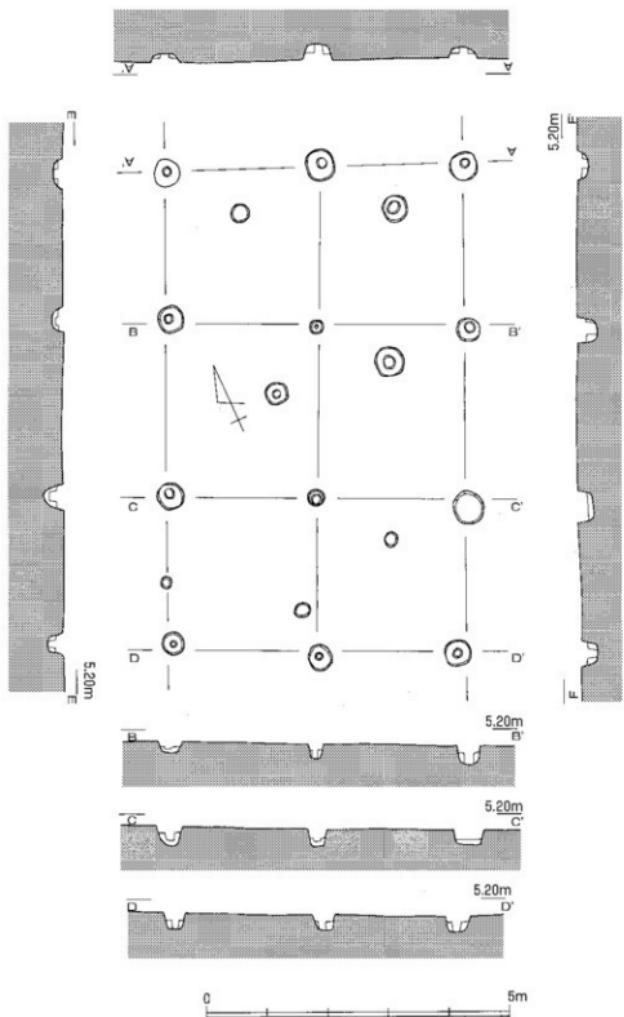


図11 SB 05 実測図

③SB03

N24°Eに棟軸方向をとり、桁行3間以上、梁行3間からなる掘立柱建物である。北側桁行方向で7.44m、東側梁行方向で8.10mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で2.48m、梁方向で2.70mである。柱

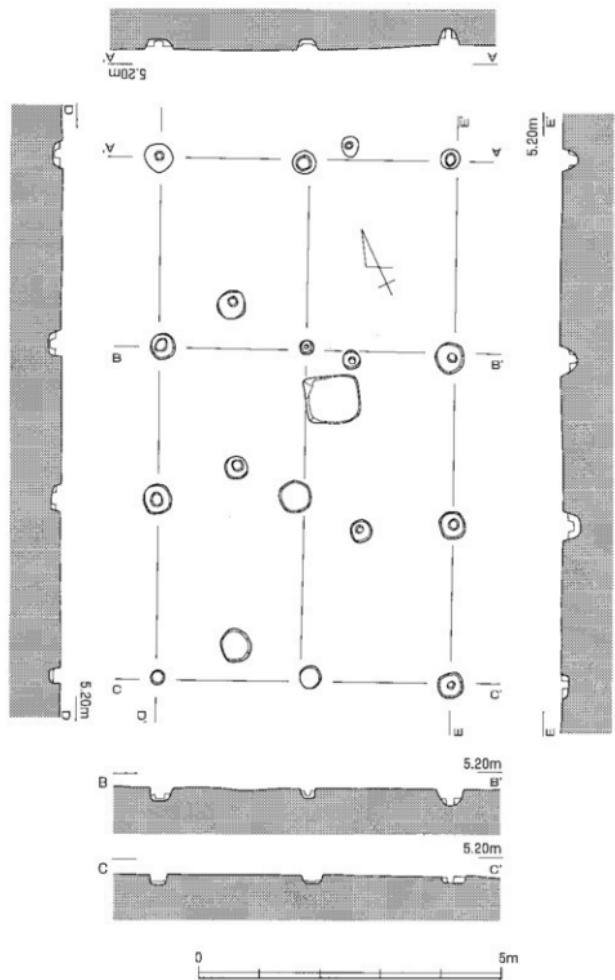


図12 SB06 実測図

穴の掘方は円形のものがほとんどで、隅丸方形に近いものも認められ、径36~60cm、深さ20~44cm、柱痕の径20~25cmを測る。

土師器・須恵器以外に黒色土器が出土している。

④SB04

調査区はほぼ中央で検出した掘立柱建物跡である。2×3間の東西棟である。主軸方向は最も多いN26°Eである。北辺の東から2基目の柱穴は確認されていないが、他の柱穴はすべて検出されている。南側に位置する南北棟であるSB05と東辺が直線になっており、同時共存した建物と思われる。東西7.1m、南北5.0mを測る。心々間の距離は東西方向で西から2.1・2.5・2.5m、南北方向で北から2.7・2.3mを測る。柱の痕跡は径20~25cmと普通の大きさである。柱穴からは土師器・須恵器が出土している。

建物空間内を地震痕跡が見られる。特に南辺の1基の柱穴は噴砂が南北方向に貫いている。掘立柱建物跡発絶後の地震痕跡である。

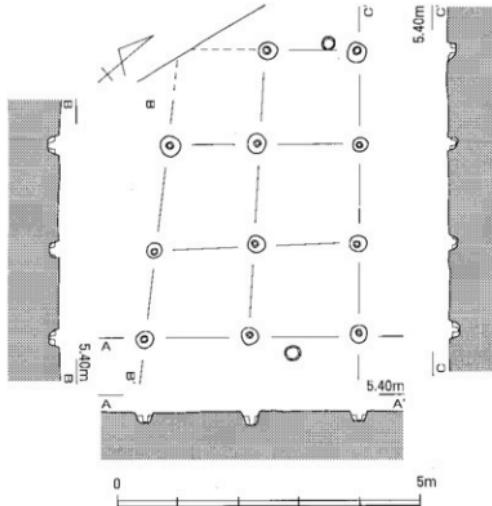
⑤SB05

N26°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる縦柱の掘立柱建物である。SB06と切り合った関係を持つ。西側桁行方向で7.72m、南側梁行方向で4.64mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で2.57m、梁方向で2.32mである。柱穴の掘方は円形を呈し、径22~50cm、深さ20~40cm、柱痕の径16cm前後を測る。SB04と有機的な関係にあるものと思われる。同様に地震の痕跡である噴砂が柱穴を通っている。

西辺の南から2基目の柱穴は噴砂が明瞭である。

⑥SB06

SB01とSB05と切り合い関係にある掘立柱建物跡である。主軸方向はほぼ同じであるが、N28°Eと僅かに東に振っている。空間は共にしているが、明確な前後関係は不明である。が、主軸方向からはSB06が新しいと思われる。SK02も古い時期の遺構と思われる。縦柱かとも思われるが、南から2列目が他辺と比べるとずれている。東西4.8m、南北8.4mで、柱間は南北方向で北から3.0・2.4・3.0mで、東西は均一で2.4mを測る。



⑦SB07

N45°Wに棟軸方向をとり、

図13 SB07 実測図

桁行3間、梁行2間からなる総柱掘立柱建物であると思われる。北側桁行方向で4.62m、東側梁行方向で3.56mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で1.54m、梁方向で1.78mである。柱穴の掘方は円形を呈し、径24~30cm、深さ16~20cm、柱底の径12cm前後を測る。

⑧SB08

N32°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる総柱の掘立柱建物である。S B09・S B10と切り合い関係を持つ。東側桁行方向で5.80m、南側梁行方向で4.64mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で2.90m、梁方向で2.32mである。柱穴の掘方は円形を呈し、径40~44cm、深さ50~64cm、柱底の径12~15cmを測る。

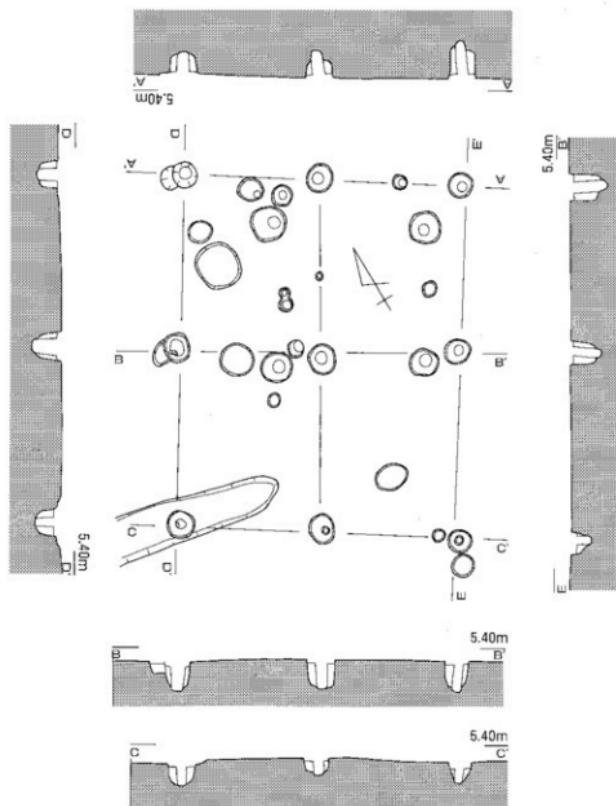


図14 SB08 実測図

⑨SB09

N29°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる総柱の掘立柱建物である。S B08・S B10と切り合い関係を持つ。東側桁行方向で6.42m、南側梁行方向で4.96mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で3.21m、梁方向で2.48mである。柱穴の掘方は円形を呈し、径38~50cm、深さ22~60cm、柱痕の径12~18cmを測る。

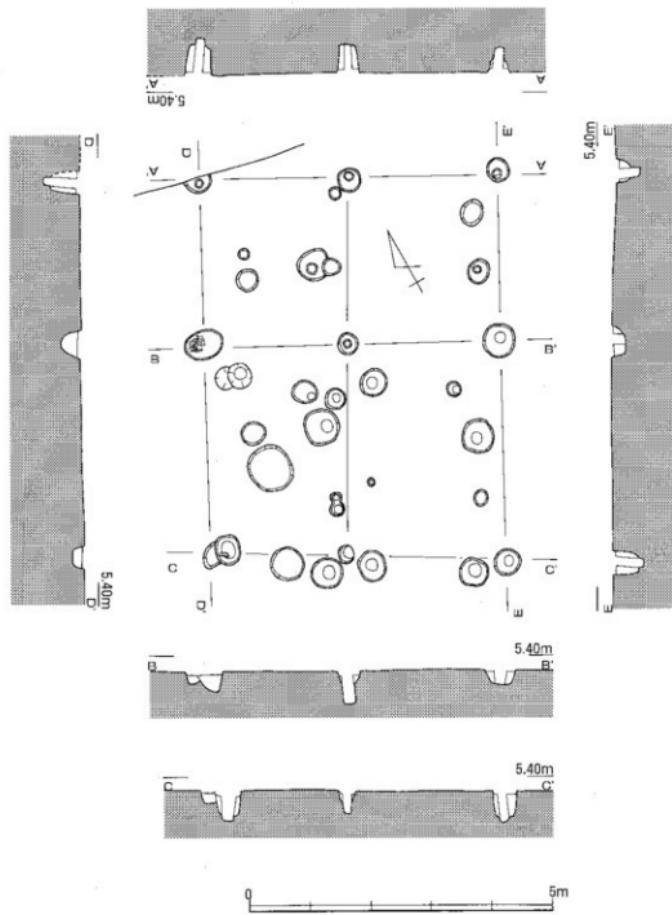


図15 S B09 実測図

SB10

N30°Eに棟軸方向をとり、桁行3間以上、梁行2間からなる純柱の独立柱建物である。SB08・SB09と切り合い関係を持つ。東側桁行方向で7.50m、南側梁行方向で4.80mを測る。平均柱穴間距離は桁方向で2.50m、梁方向で2.40mである。柱穴の掘方は円形を呈し、径38~58cm、深さ30~84cm、柱底の径18~20cmを測る。

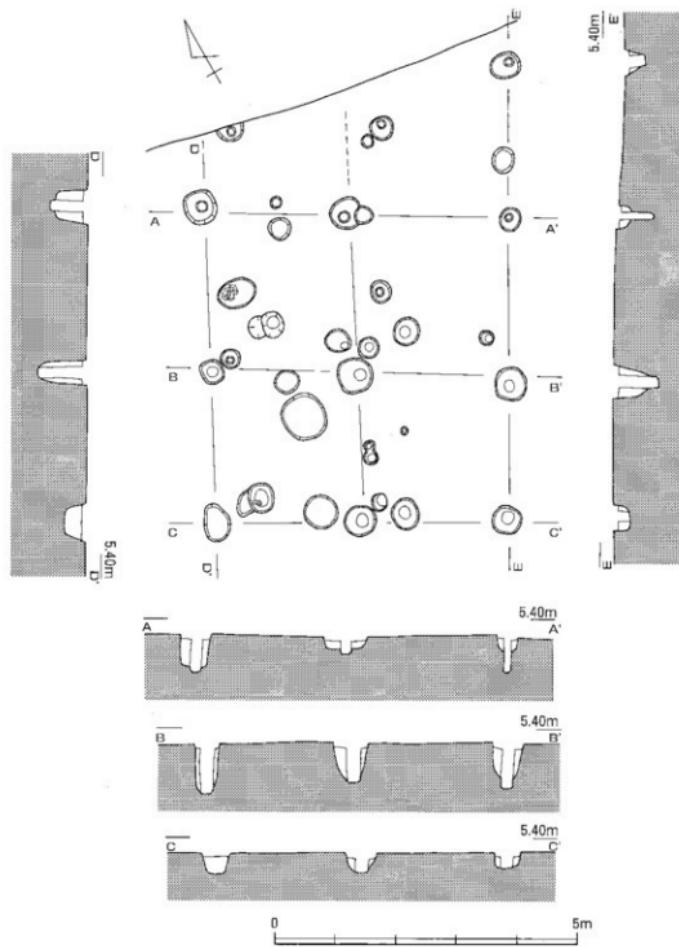


図16 SB10 実測図

①SB11

調査区北東部に位置している掘立柱建物跡である。主軸方向は大半の建物と同じN27°Eである。同一空間での建物の切り合いはない。北西コーナーに隣接してSK07がある。2×3間の総柱建物で、規模は南北7.2m、東西4.8mを測る。柱間は均一で2.4mである。他の建物と比べて0.5mと柱穴の深さもあり、整然とした建物である。柱穴や柱痕跡の大きさは他建物と余り変わらない。柱穴からは須恵器・土師器が出土している。土師器の大型壺の破片が入っていることが特徴である。

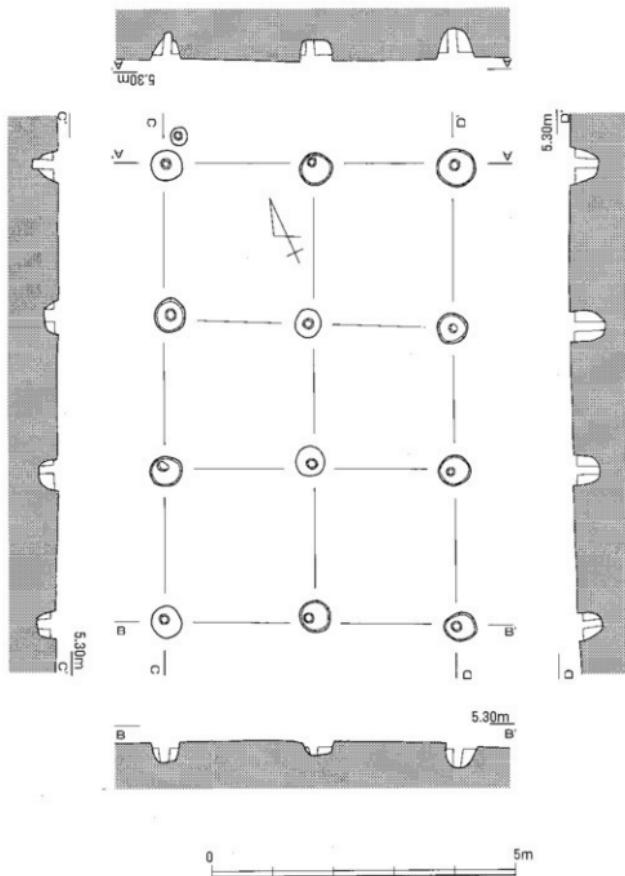


図17 SB11 実測図

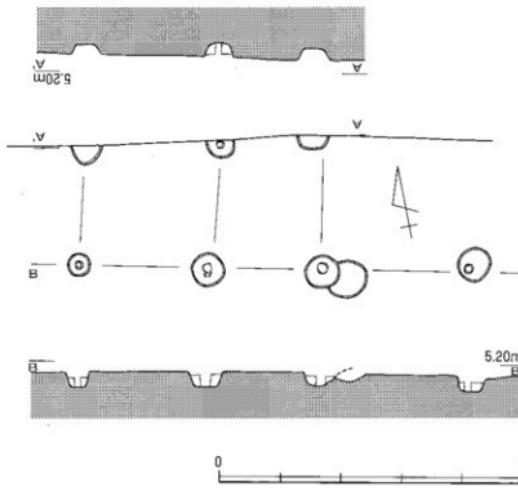


図18 S B12 実測図

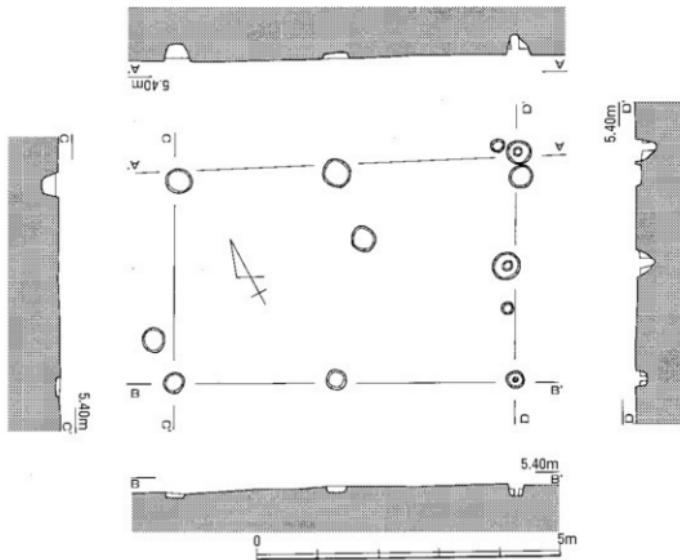


図19 S B14 実測図

⑩SB12

調査区北東隅で検出した掘立柱建物跡で北側調査区外へ延びている。南辺は3間分確認しているが、その北辺は2間しか検出していない。確実なのは2×何間の南北棟と思われる。南辺ではピットに切り合があり、東も調査区外へ延びていることから、SB12より古い建物が存在するかもしれない。調査した長さは東西4.1m、南北2.0mである。南辺の切られた1間分の柱間も2.0mと同じである。建物の主軸は最も南北方向に近いN 6° Eである。柱間も多くの掘立柱建物跡よりも狭い。柱穴からは須恵器・土師器・黒色土器が出土している。

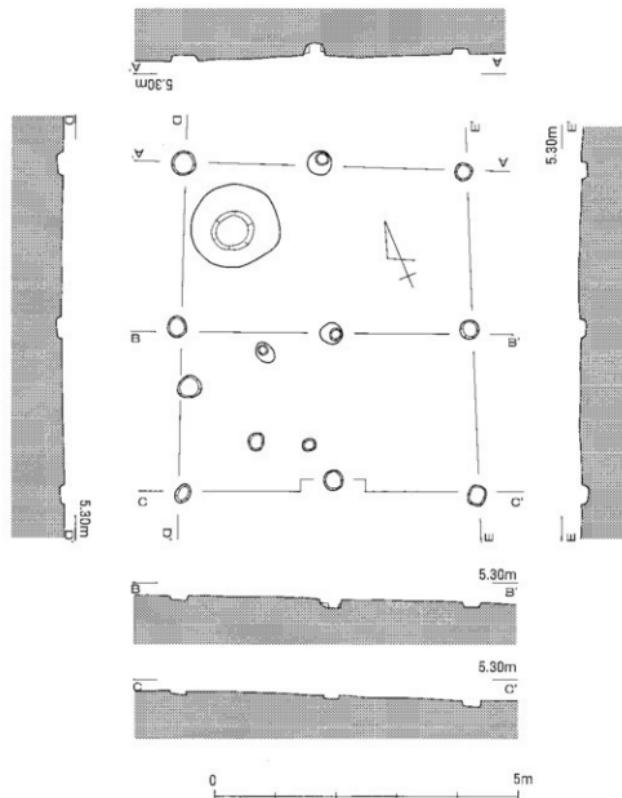


図20 SB13 実測図

⑩SB13

調査区中央北東寄りで検出された小型の掘立柱建物跡である。保存状態も悪く柱穴も浅い。 2×2 間の柱立の建物である。南北5.4m、東西5.0mと柱間は広い。他の遺構と比較すると1間の距離が広い。たてもの北西部に井戸（S E03）が築かれている。主軸方向は大半の建物と同じN27°Eである。SB01の北側に位置している。東辺とSB01のセンターが一致している。建物の端部同士で16m離れている。周囲に井戸が集中している部分である。

⑪SB14

調査区中央北側にあり、SB08の南側に存在する。建物の主軸方向はN45°Eとやや異なっている。SB07と同じ方位を探っている。検出した限りでは 1×2 間であるが、周囲に幾つかのピットがあることから、南北方向に延びている可能性は十分に考えられる。東西5.8m、南北3.7mを測る。東辺には柱列の通りにもう1基の柱穴が検出されている。

2. 溝

溝跡は耕作痕である鎌溝を除くと8本調査している。そのうち、SD01・SD02は上面で検出した遺構である。当初2面の遺構の存在を考えていた。北西部から機械堀削を行い面精査を実施していった。遺構の検出される量が少なく、時期も新しい可能性が高くなつたことから、下面1面の調査に切り変えた。SD01・SD02はその際に確認した溝である。平行した2条の溝で、調査区西側に続いている。主軸方位はN75°Eである。幅0.7~0.9mで、深さは0.2~0.3mを測る。時期は確定できないが、近世になるかもしれない。

①SD03

調査区の東南隅から直角に折れて北にのび、SD04と一部並行する。調査区外に延びるが第2次調査ではその続きを検出できなかった。幅は約1~1.4mで、検出できた延長は約15mである。断面は浅い皿状を呈する。

②SD04

SD03と一部並行して、北にのびる。北端は浅くなり消滅する。幅は約1~2mで、検出できた延長は約25mである。断面は浅い皿状を呈する。第2次調査の成果から見るとSD03・04は溝ではなく、水田面に伴う畦畔であった可能性もある。

③SD06

調査区南西部で調査したほぼ南北方向の溝である。南側に延びている。調査区内で5m確認している。幅は北側が細く0.4mで最大幅は0.8mを測る。深さは0.2~0.5mである。主軸方向は古い時期と同じである。

④SD07

調査区南東部で検出した溝である。N44° Eに主軸を持つ溝で、調査区内で終結している。長さ4.6mで、幅0.4~0.8mを測る。深さは0.2~0.3mと浅い。出土遺物は須恵器・土師器である。

⑤SD08

S B08と切り合い関係を持つ。幅0.7m、長さ約5.5mを測る。

3. 土坑

土坑は7基検出しており、性格の判明する遺構が多く、種別が異なっている点が興味深い。当初土坑として調査したが、後に井戸を検出するに至って井側や井筒の井戸構造物は持たないものの、井戸と考えられた遺構もある。SK03・SK04がこれに相当し、井側などが抜き去られた遺構と考えられる。井戸として報告し、結果的に土坑は2基が欠番（SK05・06）となっている。その結果、5基の土坑を調査したことになる。

①SK01

2×3間の小型の掘立柱建物跡であるSB01の中央に位置している土坑である。調査区内では中央南側に位置している。SB01に伴う遺構と考えている。検出時は円礫が積まれた状態で検出されたことから、一字一石絆の経塙かと想定して調査を行った遺構である。調査段階から注意し、取り上げ中も改めて確認したが、円礫には1点も墨書きは認められず、下に重なって出土した土師器群を覆っていたものであることが判明した。礫は指頭大からやや大きめのものが主体で、拳大のものは周囲に数石認められただけである。

土坑は小規模なものである。調査終了時の土坑の規模は長径0.95m、短径0.65m、深さ0.25mを測る。東西方向に長径を持つ西側が幅の広い楕円形をしている。長径の方向とSB01の方向は一致している。深さは平面の狭い方の東側中央が最も深くなっている。底は急激に上がりらず、緩やかになって肩部に続いている。東側および南北部分の肩は急である。西側の幅の広いところだけが肩部が緩やかになっている。下部の掘り下げられた部分は楕円形であるが、上部の土師器・礫を配した状況のプランは方形である。ほぼ0.9mの正方形で、主軸方向は同じである。

土坑では調査段階において使用されているものは、土師器と礫だけである。隣接したSK02は焼土坑であるが、SK01では火を使った痕跡はない。炭・焼土やその他関連遺物もない。また、礫上面で土師器杯以外の土器が出土しているが、SK01に伴う土器と断定できない。土師器甕がふくまれているが、この土器も精製土器である。土坑内では土師器杯に限られている。土師器だけを意図的に使った遺構である。本来はこれに残存していない液体や五穀が伴っていたことは十分に予測される。土坑下部では礫は検出しており、土師器を配置した後に使用されたものである。ただ、底面に他の精製された砂などを敷いた痕跡もない。土師器はすべてが同じではないが、原則的に2個セットのものが多い。土師器に2種あり、その2種がセットになっているのが通例である。1つはハラ切りで底部に墨書きがあり、他の1種は糸切りで墨書きはない。ともに赤色顔料を染布している。埋葬時の原位置を残したところの出土状況は、糸切りの上器を伏せてその上にハラ切りの杯を上向きに置いている。底部同士を重ね合わせてい

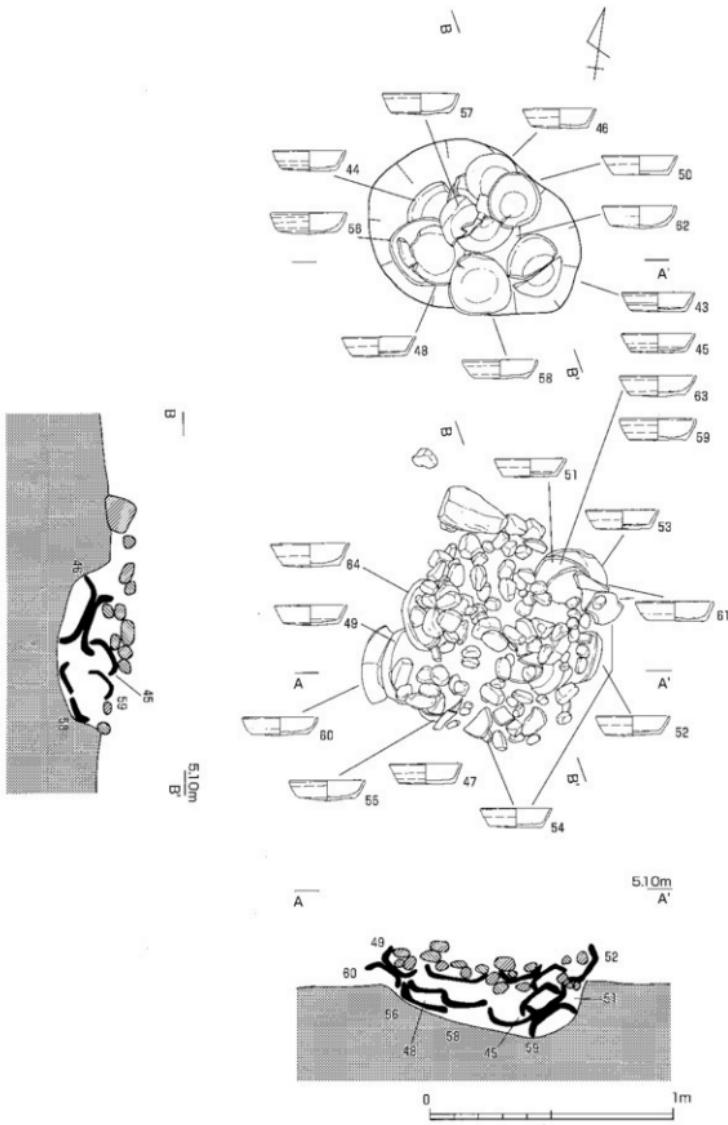


図21 SK01 実測図

る。墨書は「猪主」と記されており、12個すべて同じ文字である。人名かと思われる。ただ、墨書の大きさや位置などは同じでなく、字体も異なっている。

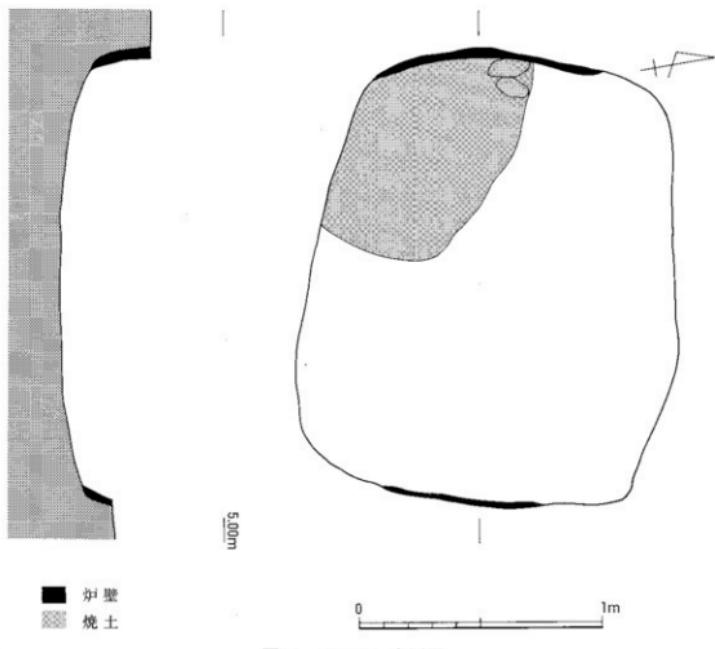


図22 SK02 実測図

②SK02

調査区南側中央部で確認された土坑で、S B06と同じ空間に位置する。東北東に2m離れてSK01が位置している。東西方向に長軸を持つ隅円長方形の土坑である。焼土坑で、集落内の小鍛冶跡と思われる。全体に炉壁が見られるが、特に東西の短辺には炉壁が厚く残っていた。幅5cmの炉壁で強く被覆している。底面は緩やかな搗鉢状で中央部分が最も深い。深いところで40cmを測る。西側の方がよく焼けており、焼土も厚く堆積している。南北方向の断面も同じようであるが、肩部は低くなっている。

③SK03

調査区北東部で検出した長径1.1m、短径0.9mの不定円形の土坑である。深さ0.6mの断面邊台形をしている。遺物はほとんど出土していないが、縁釉陶器の合子が出土していることが注目される。体部の小片ではあるが、興味深い。土坑は普通の形状で特殊性はなく、他に出土遺物もない。性格は不明である。SB13の北側に位置している。

④SK04・SK05

明確な土坑を掘りこんだ遺構ではないが、意図的に土器を重ね合わせて遺構面に配置している。土器周辺を精査して遺構の検出に努めたが、明確な落ち込みを確認することはできなかった。遺構面に土器器杯を4個体重ね合わせたものと確認を詰めた土器器杯で、地鎮の遺構と考えている。一応、SKとして報告する。

2個所の地鎮遺構があるが、隣接して出土しており、同じ遺構面で行われた祭祀と考えられる。SK04は4個体の土器(69~72)を重ねて置いているもので、SK05は(73)の杯に円碟を詰めて置いている。前者は糸切りで後者はヘラ切りという技法の差がある。SK01の二者があるとの同様な意味があるのだろうか。同時に行われた地鎮遺構と考え、合わせて報告した。有機的関係があるものと思われる。2個所は約2.5m離れている。

⑤SK07

調査区北端の中央やや東寄りで確認した遺構で下層の遺構として検出している。奈良時代の範疇には入るが、検出した遺構の中では確實に古い時期の遺構である。SB11の北西隅の横に位置している。

浅い土坑であるが、全体に被熱している。南北に主牆を持つ長方形で、長辺である東西壁がより強く焼けている。地山も亦変している。中央に径5cmと7cmの小型のピットが2基存在する。大きさから杭と考えるのが妥当かと思われる。焼土は混じっているものの強くは焼けていない。大きさは南北1.05m、東西0.65mを測る。深さは上坑底まで0.05mと非常に浅く、ピットがさらに0.1m下がっている。

4. 井戸

①SE01

掘方は検出面で直径約1.40mを測る円形を呈する。検出できた深さは約1.35m、底面の径は0.86mを測る。井戸側は長辺が0.95m、短辺が0.80mの長方形で、その構造は縦板組棟どめである。縦板には幅15cm、厚さ3cmの板材を用い、棟は1辺7×5cm程度の角材を用いている。

②SE02

掘方は検出面で長辺約1.68m、短辺1.50mを測る梢円形を呈する。検出できた深さは約1.34m、底面の径は0.93mを測る。井戸側は1辺が0.78mの正方形で、その構造は縦板組棟どめである。縦板には幅20cm、厚さ3cmの板材を用い、棟は1辺5cm程度の角材を用いている。

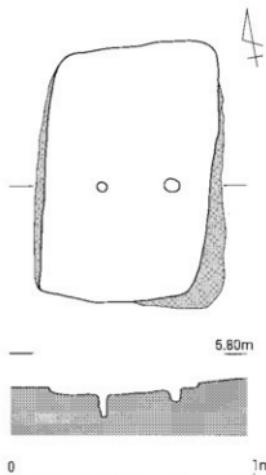


図23 SK07 実測図

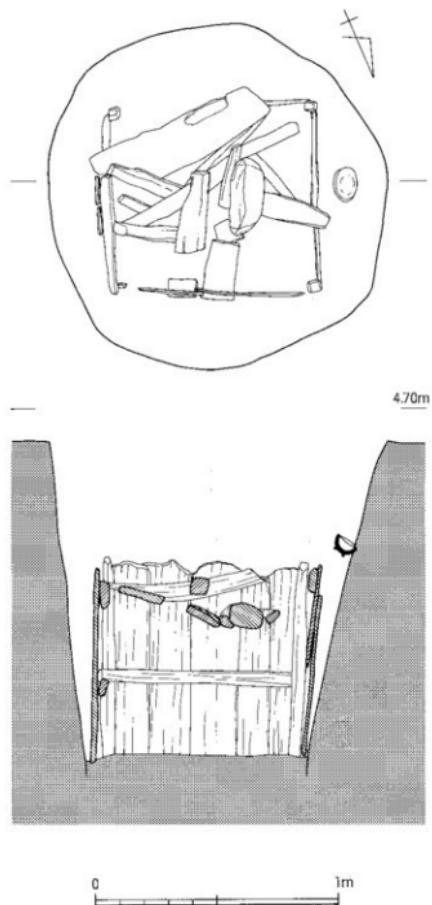


図24 S E 01 実測図

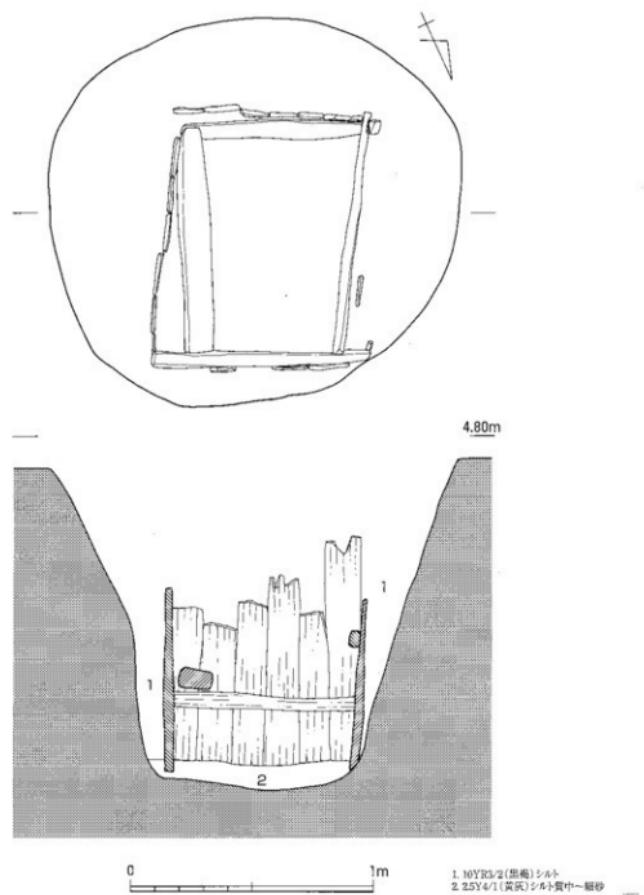


図25 SE 02 実測図

③SE03

掘方は検出面で直径1.38mを測る円形を呈する。検出できた深さは約1.1m、底面の径は0.90mを測る。井戸側は検出されなかつたが、他の井戸の掘方と同様の形態を示すことから、本来、井戸側を持つ井戸であったと考えられる。

④SE04

S E 03の南側にある井側の抜き取られた井戸と考えられるものである。

5. 噴砂跡

調査区の南側に偏り、奈良時代の遺構面上で検出した。大きく6条あり、長さは約3~10mを測る。奈良時代の遺物包含層である青灰色シルト層の下にある砂層が液状化現象に伴って噴出したものである。原因となった地震の時期については、近年豊岡市などで平安時代のものと考えられる地震の痕跡が見つかっていることから、当遺跡の噴砂跡も同様の時期を考えていいと思われる。

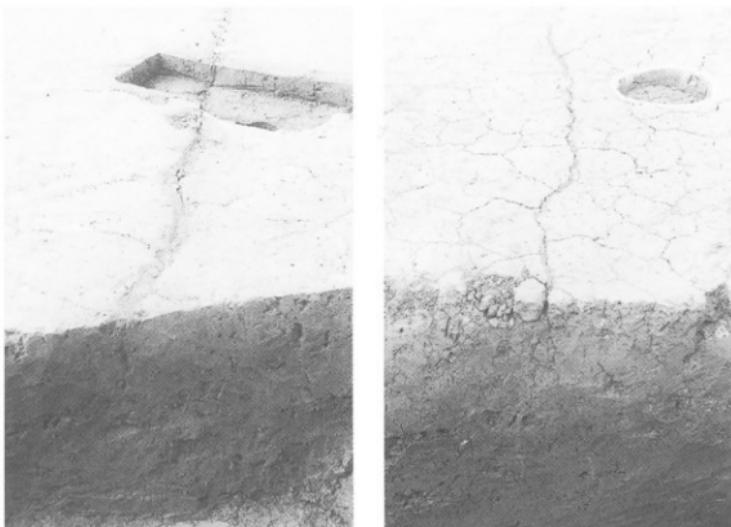


写真10 噴砂の状況

IV. 遺 物

出土遺物の量は当初予想した量をはるかに上回る膨大なものとなった。出土した器種は、須恵器・土師器・黒色土器・縁釉陶器・灰釉陶器・白磁・青磁・土製品・土鍾・羽口・鉄器・石器と井戸棒・鉄滓である。量的には土師器が最も多く、須恵器が次いでいる。他の種類のものは多くはなく、同じ程度の出土量である。

主な遺物の多くは包含層出土のものである。包含層は遺構面上層と遺構面下層がある。遺構面上層は調査区西半の第1面上層と調査区東半の第2面上層に分けられる。第1面上層からは少量の遺物が出土している。新しい磁器の陶磁器・土師器を含んでいるが小片で図化していない。第2面上層の遺物は上石遺跡の時期の包含層である。奈良時代から平安時代の遺物を包含している。黒色土器の時代まで、瓦器は含んでいない。上層の土器片は少なく、量的にも下層より少量である。遺構面下層の量は多い。そのうち、東側の意図的に置かれたと考えられる層は整地層として捉え、別に抽出してある。

検出した遺構の中ではSK01のように遺構としてまとめて出土したものもあるが、数少ない。掘立柱建物跡としたものは、確実に柱列として認識した柱穴出土の遺物のみを対象としている。床面という確実な判定ができなかったためである。空間的に掘立柱建物跡に含まれる遺物は対象としていない。同様に柱として使っていない柱穴も遺構出土遺物として別に扱っている。土坑・井戸出土の遺物は遺構ごとに報告する。ただ、調査時に確実に土坑として検出できなかったが、壊を重ね合わせた状態で出土したものを遺構（SK04）として認定している。検出した遺構の中でも性格不明な遺構も多数ある。最も多いのはビットである。掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いが確実に柱穴（建物）として並ばなかった遺構である。遺構出土遺物で図化したのはこのようなビット出土遺物である。それ以外の遺構として、ここでは図28に報告する。

その他が包含層出土遺物であるが、調査区東側に広がっていた整地層は別に取り上げていることから、2種に分けている。包含層出土遺物が出土量は多く、種類も多岐にわたる。確認調査で出土した遺物などもここで取り扱う。

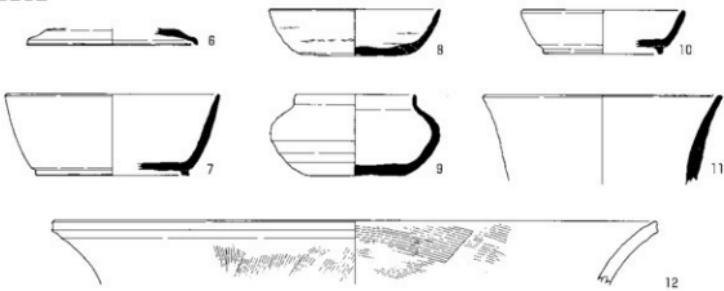
1. 遺構出土遺物

①掘立柱建物跡出土遺物

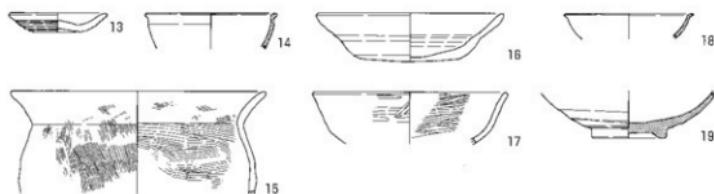
出土量は掘立柱建物跡という性格上多いとは言えない。破片も大きいものは少ないが、SB02・SB03は完形品に近い土器が出土している。地鎮などの可能性が考えられる遺物である。壊・皿が出土している。図化可能な遺物が出土しているのは、SB02~05・08~12の掘立柱建物跡からである。また、大型の土器片が出土しているのも特徴である。SB02・09で土師器鍋が出土しているのは注目される。

SB03出土遺物には須恵器・土師器以外に灰釉陶器・黒色土器・白磁も出土しており、時期が新しくなることが明らかである。建物の主軸方位が異なっていることからも時期差が十分に想定される。白磁が出土しているのはSB03だけであるが、黒色土器は他にSB08・09・11から出土している。土師器で新しい時期に下るものはSB07から出土している。

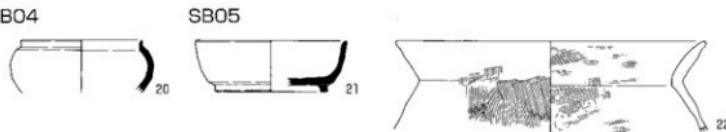
SB02



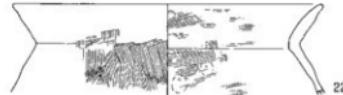
SB03



SB04



SB05



SB08

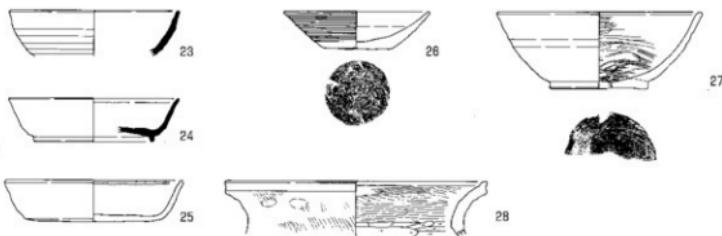
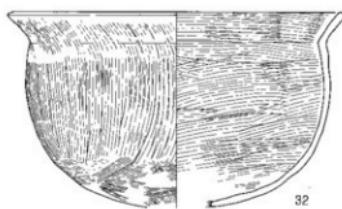
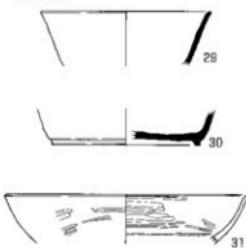
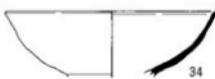


図26 据立柱建物跡 出土遺物(1)

SB09



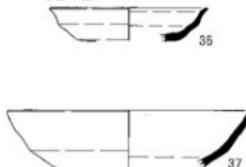
SB10



SB11



SB12



SB14



図27 挖立柱建物跡 出土遺物(2)

SK01

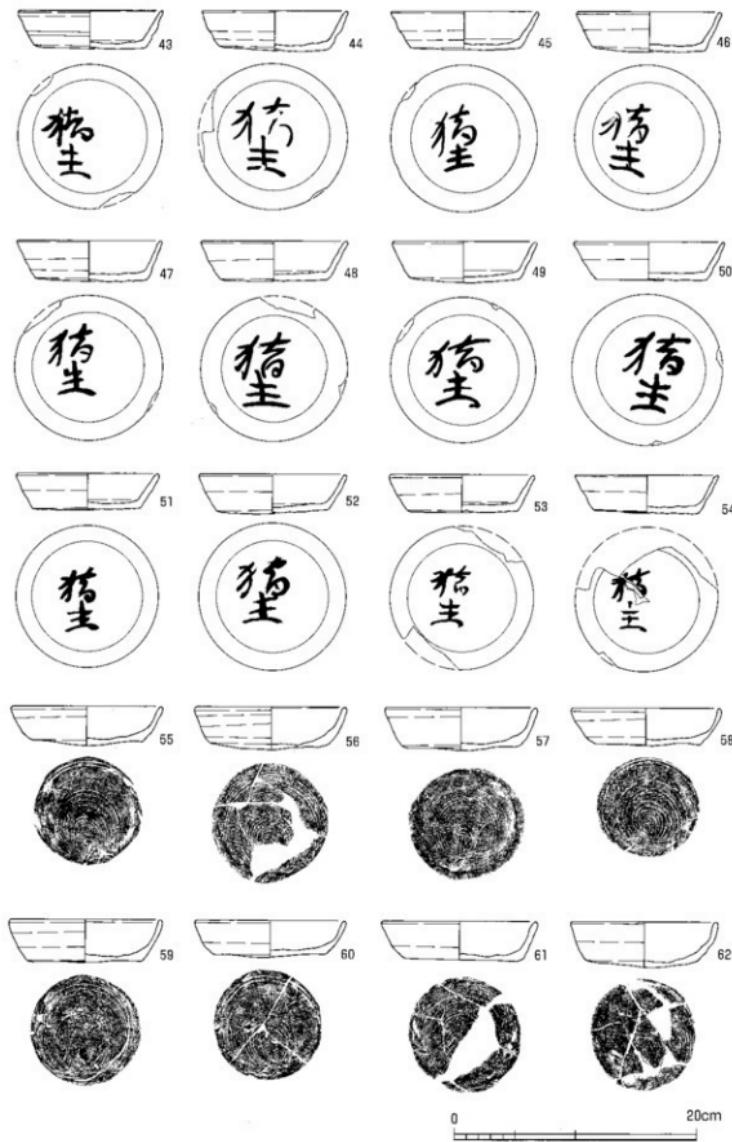


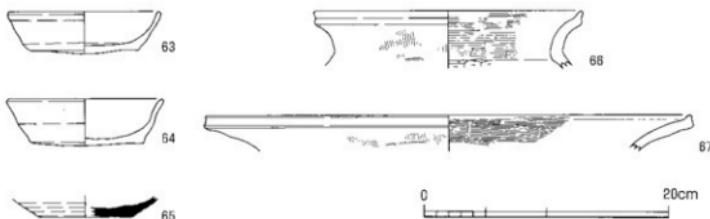
図28 土坑 出土遺物(1) (SK01)

②土坑出土遺物

祭祀的性格の強い土坑が2基あり、特徴的な出土状況を示している。SK01は出土状況や出土遺物の内容が特徴的である。出土遺物は掘方埋土から、須恵器碗底部と土師器甕が2点混じっているが、土師器甕に限られているという特徴を有する。2点(63・64)が逆離して出土しているが、それ以外は集中して埋納時の状況で出土している。口径11.5~12.5cm、器高8.6~9.6cmの通有の杯で、すべて赤色顔料を塗刷している。僅かな個体差はあるが、大きな変化はない。底部が平坦なのとやや丸味を持っていることの差や、器肉の厚さの差がある程度である。ただ、底部の切り離し方法だけは大きく異なっている。ヘラ切りと糸切りの両者があり、概してヘラ切りの方が丁寧な作りである。ヘラ切りの12個の杯(43~54)にはすべて底部に墨書が記されている。「猪主」と記され、字体や字の大きさに変化はあるが、同一の個人名と思われる文字が施されている。

SK03出土の綠釉陶器(68)は合子という数少ない資料である。釉薬の色調は淡い。

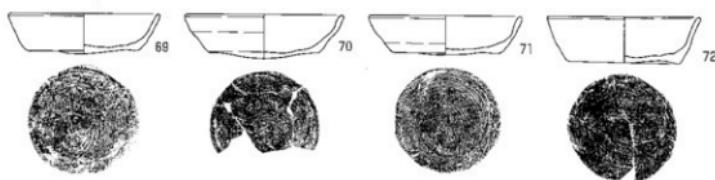
SK01



SK03



SK04



SK05



図29 土坑 出土遺物(2)

S K04の土師器杯は4点(69~72)が重ね合わせて出土したもので、S K01出土資料よりは僅かに大型である。すべて糸切りで底部の切り離しを行っている。

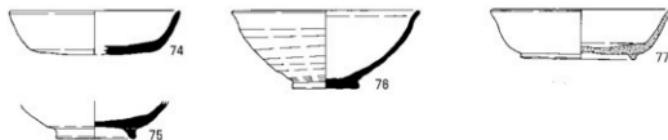
S K05の土師器杯(73)も赤色顔料を塗布した丁寧な作りの土器である。底部の切り離しはハラ切りでナデ仕上げを行っている。杯内に円礫が充満していた。

③井戸出土遺物

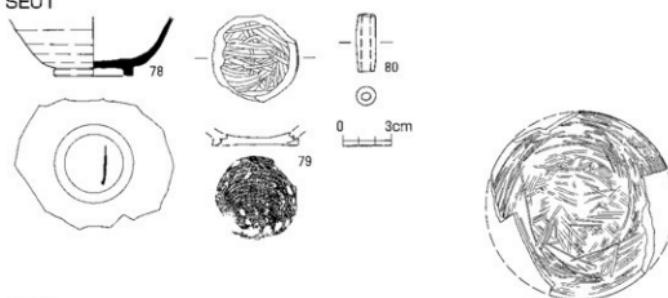
井戸出土遺物の量は多くはない。縦板のしっかりした木組の井戸である割には遺物は質量ともに少ない。S E03・04は木組の抜かれた井戸と考えられ、時期もS E01・02より1時期古いものと思われる。出土遺物からは掘立柱建物跡の古い時期に併行する井戸はないようである。S E04からは須恵器を4点図化している。碗(76)も含まれている。ベタ高台の土器で、底部は糸切りで口縁部は外反している。

S E01出土資料は図化したもの3点である。(78)は須恵器杯で底部に墨書きが見られる。(79)は黒色

SE04



SE01



SE02

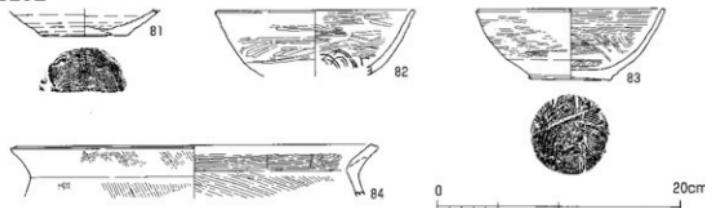


図30 井戸 出土遺物 実測図

土器腕の底部だけの破片である。底部は糸切りで内面は暗文状の細かいヘラミガキが施されている。管状土錐も1点出土している。中央が膨らまない。

S E 02からは土師器と黒色土器が出土している。(83)は黒色土器腕のほぼ完形品で底部に墨痕があるが、判読できない。底部糸切りで、内面ヘラミガキである。(82)の腕も黒色土器で底部を欠く。暗文状のヘラミガキが施されている。

④その他の遺構出土遺物

2点を除いてピット出土遺物である。それ以外の2点は、調査区南東隅に近いところで検出したカマドである。S B02の北東部に位置し、南東に溝(S D07)が存在する。周辺に焼土が散布しており、礫も強く火を受けている。そこに土師器甕(95)の破片がやまとまって出土している。復原できなかつたが1個体の土器と考えられる。裾部の破片は僅かである。鋸部が大きな破片で残っている。上部はほぼ完存している。長さ29cmで器肉の厚い鋸を貼り付けている。甕部に沈殿があるのが特徴である。他に図化した土器は須恵器杯(86)がある。輪高台の一般的な杯Bである。焼成は良好で、胎土も精良である。

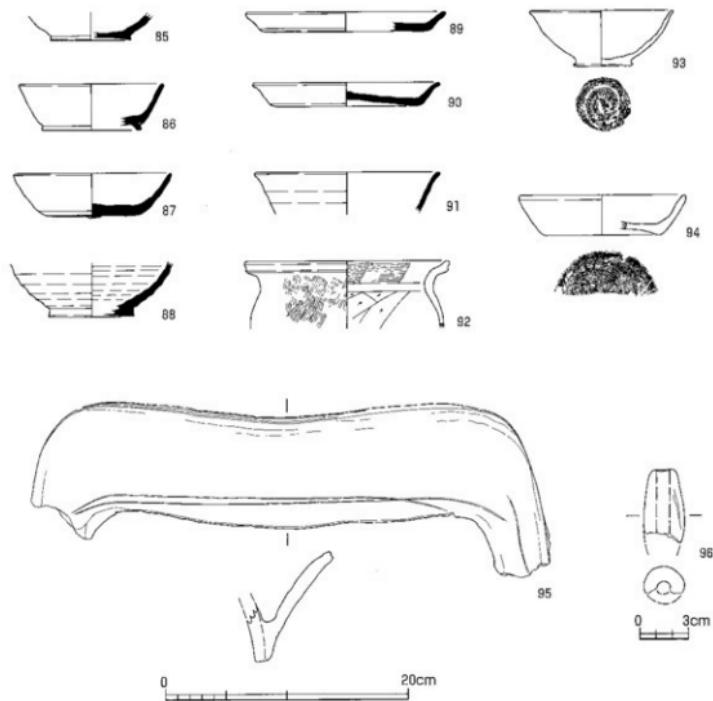


図31 遺構 出土遺物 実測図

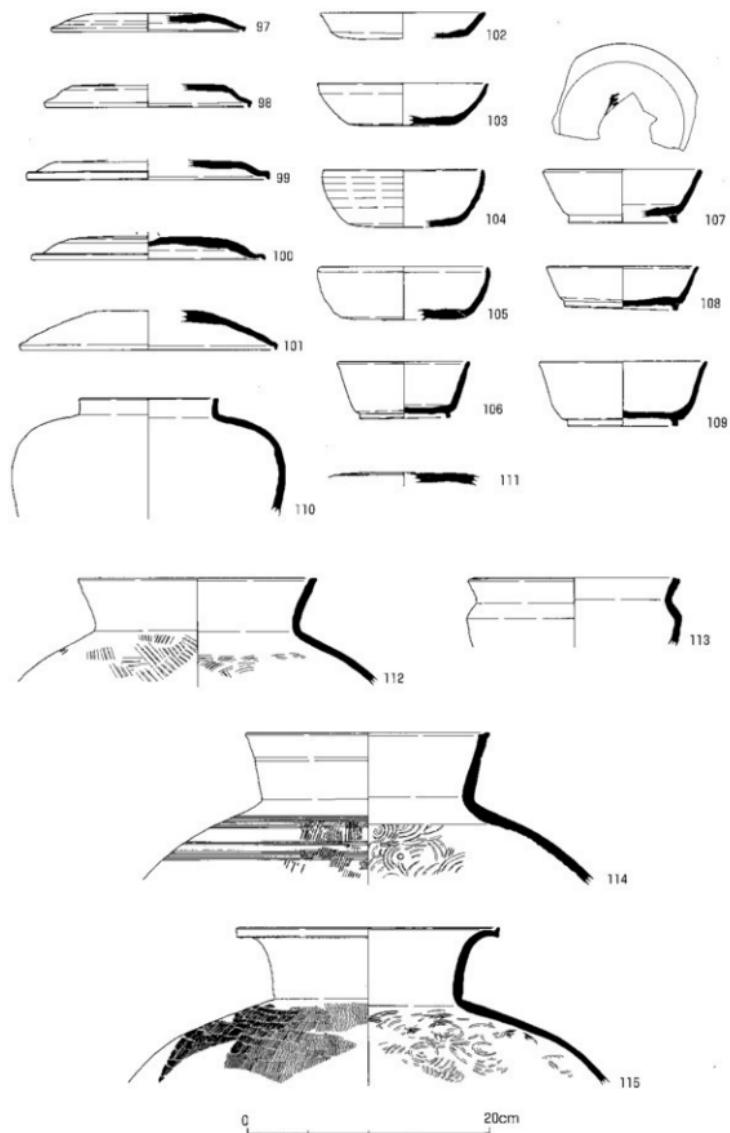


図32 整地層 出土遺物 実測図(1)

その他はすべてピットから出土している。当然、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。墨書き器・縁釉陶器など特殊な遺物は出土していない。土錐も1点出土している。

2. 整地層出土遺物

整地層は調査区東側にのみ広がっている。この層からの出土遺物である。前項でSK06として報告した遺物も同一層からの遺物である。SK06出土遺物が明確な地鎮遺構と考えられたことから、別扱いとしたが、時期は同じである。須恵器・土師器がある。墨書き器も含まれている。須恵器は、杯蓋・杯身・鉢・甕・鏡があり、杯蓋には転用鏡も含まれている。残っている限りでは、杯蓋につまみはみられない。鏡は円面鏡で陸部のみの破片で脚部は全く残っていない。

土師器は杯・甕・甕とミニチュア鉢がある。甕は裾部の破片である。ミニチュア鉢は精製の良品である。甕は媒が付着しており実用品である。(119)の杯には底面に「連」の墨書きがある。稜線を面取りした丁寧な作りである。(116)は口縁端部に芯状の媒が付着しており、灯明皿として使用したものと思われる。

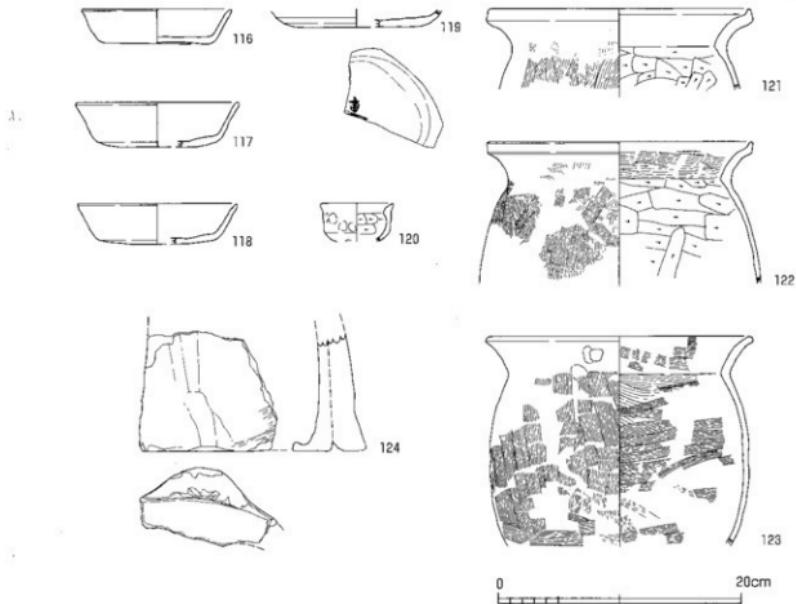


図33 整地層 出土遺物 実測図(2)

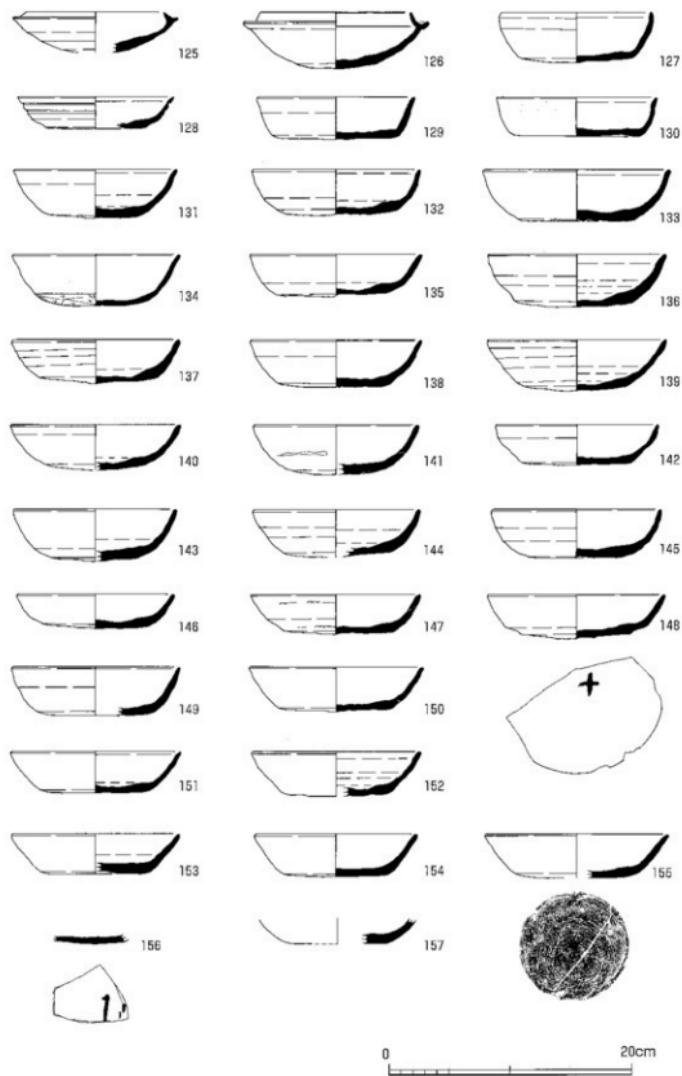


図34 包含層 出土遺物 実測図(1)

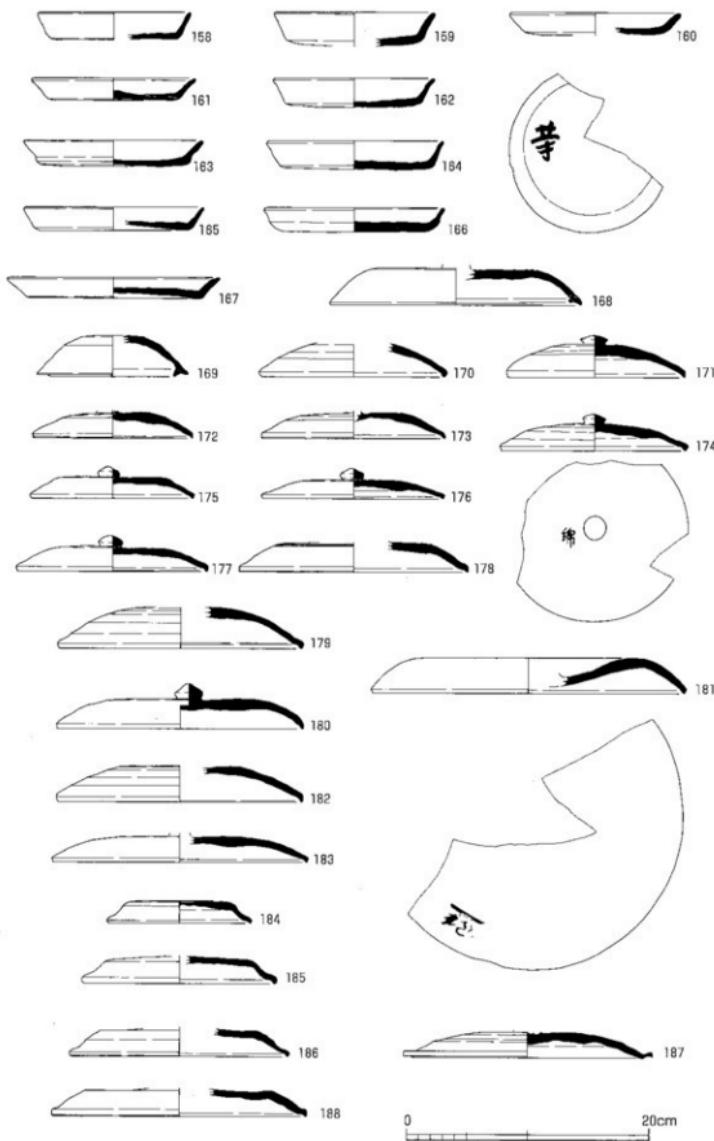


図35 包含層 出土遺物 実測図(2)

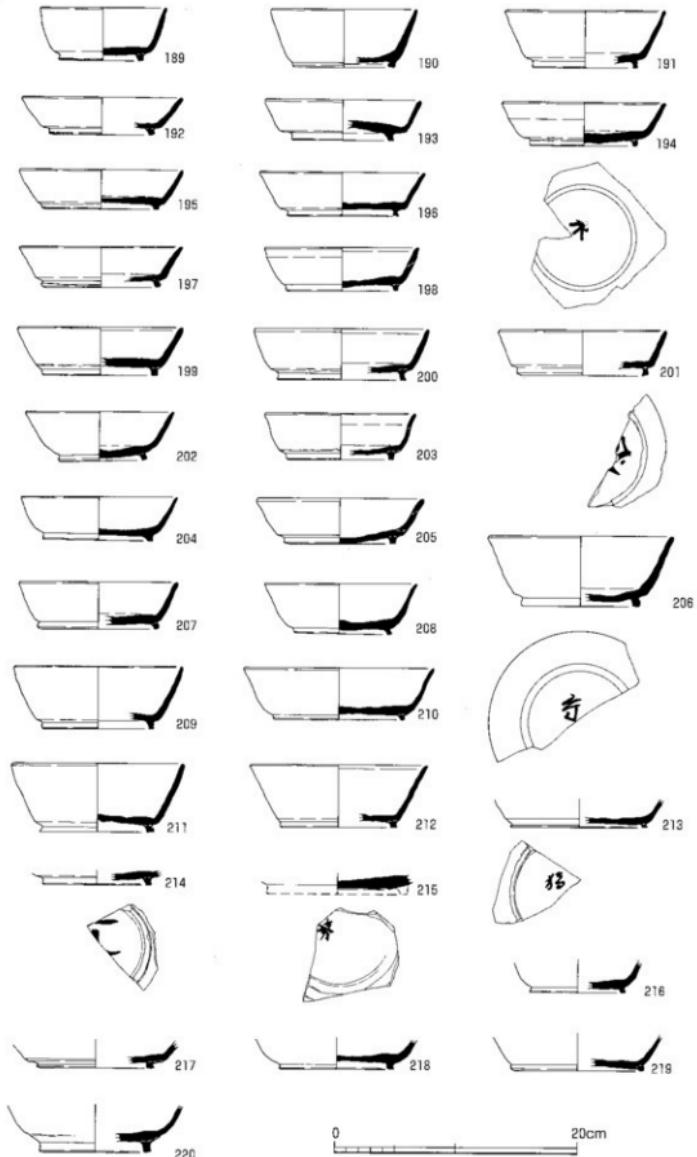


図36 包含層 出土遺物 実測図(3)

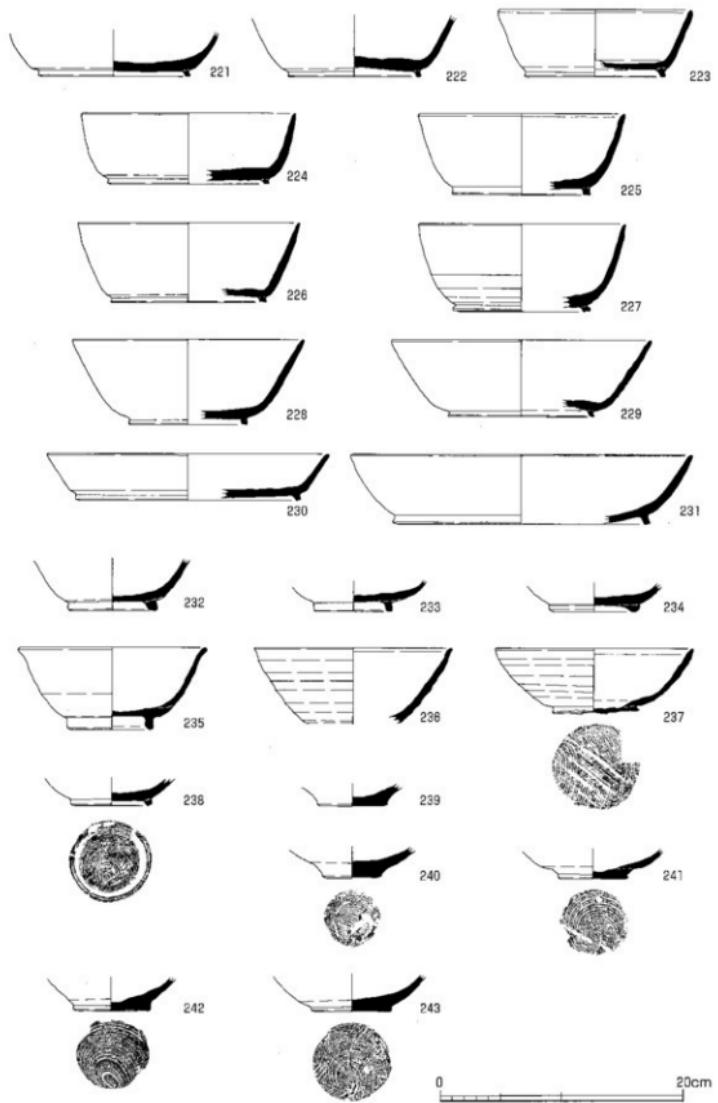


図37 包含層 出土遺物 実測図(4)

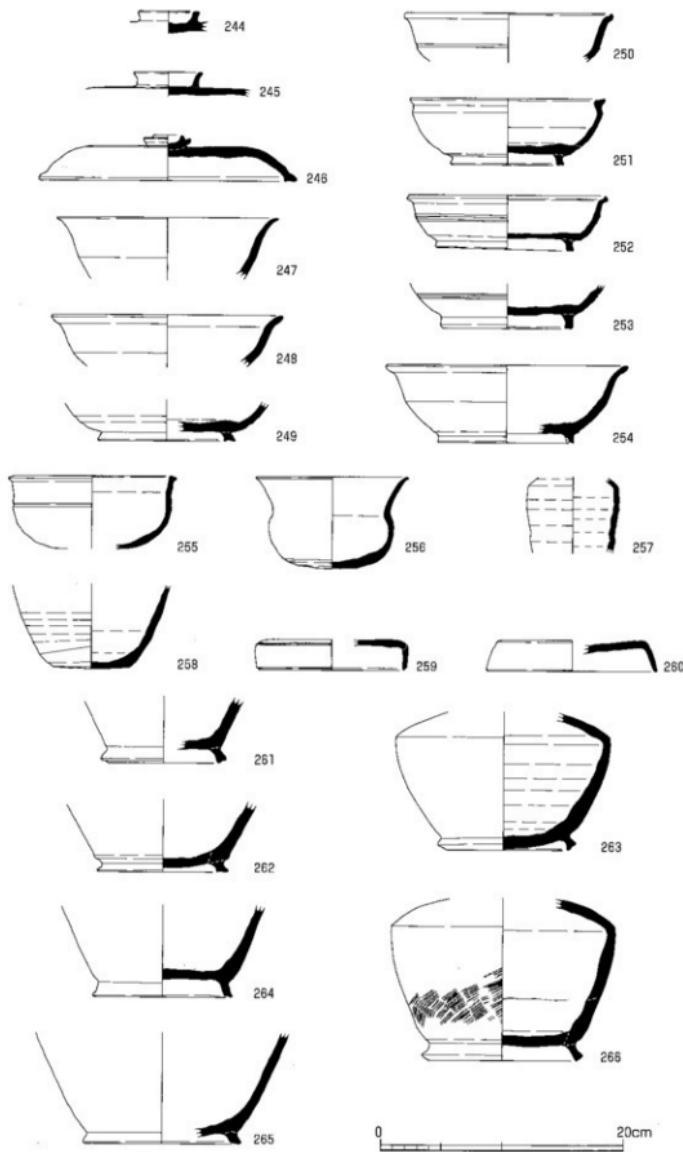


図38 包含層 出土遺物 実測図(5)

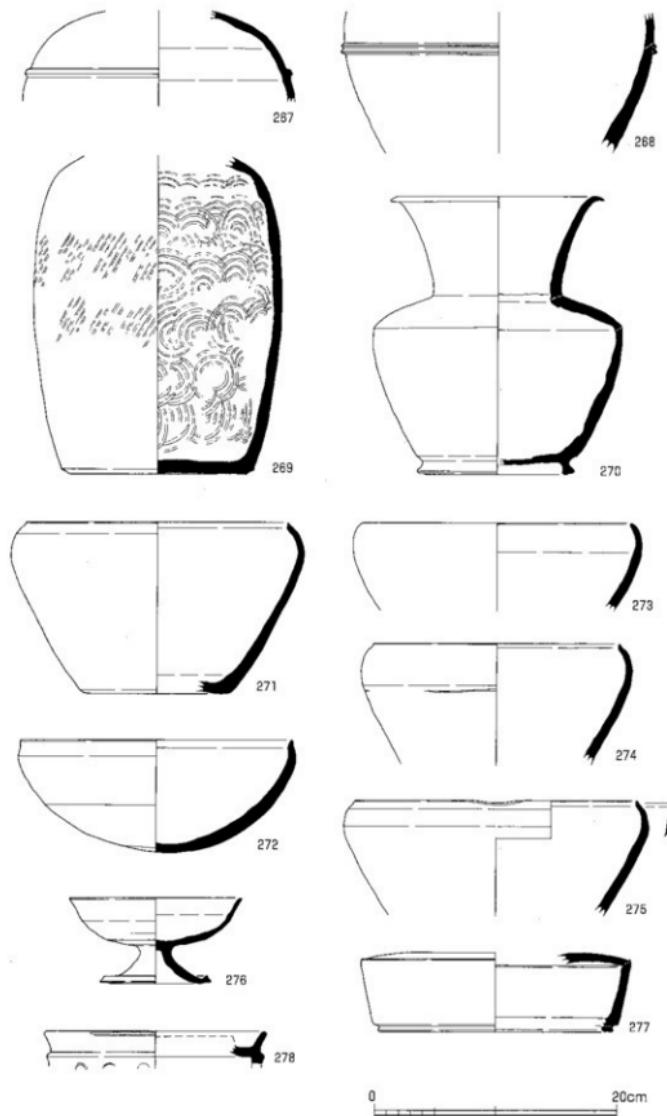


図39 包含層 出土遺物 実測図(6)

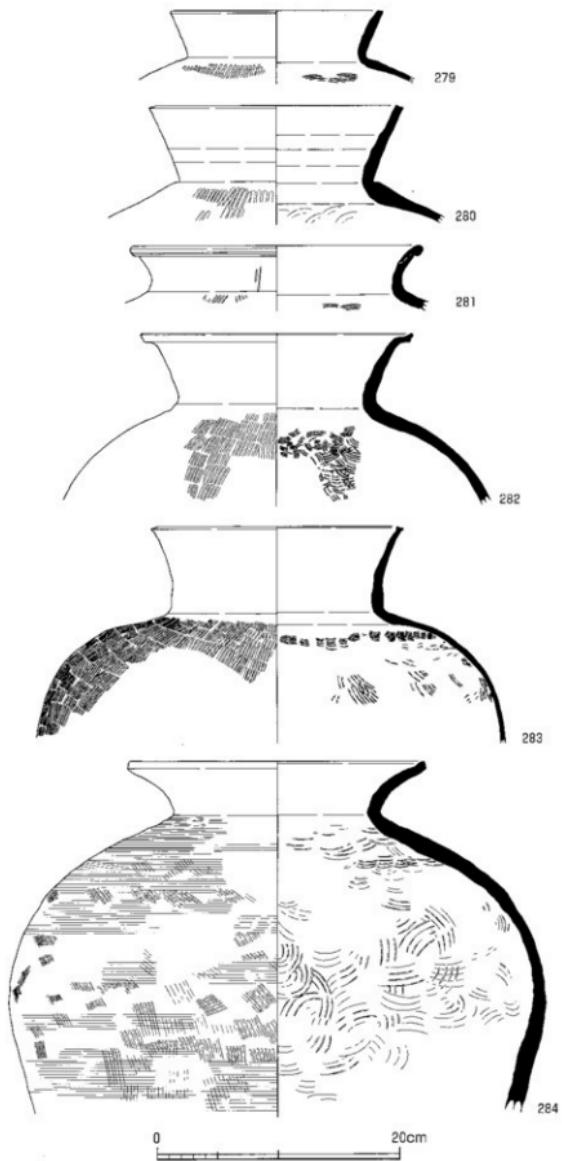


図40 包含層 出土遺物 実測図(7)

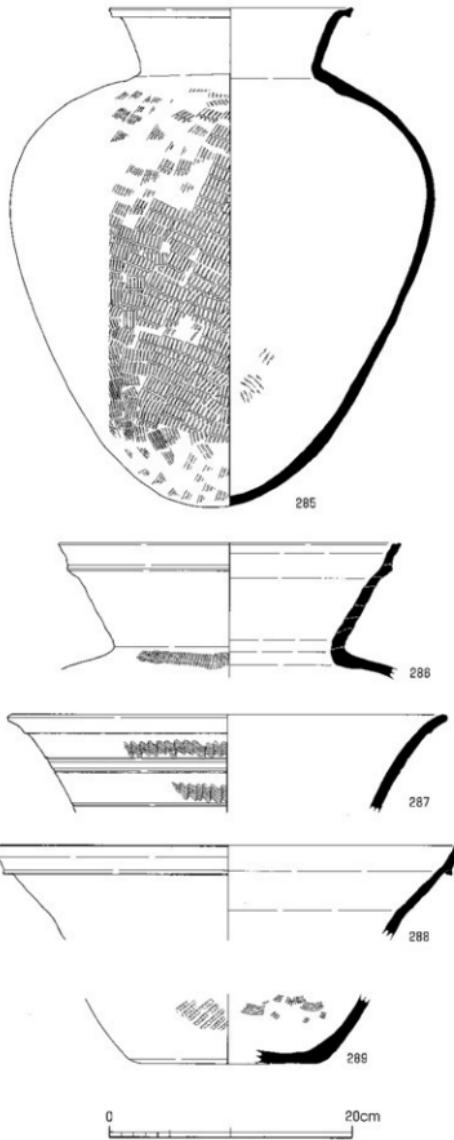


図41 包含層 出土遺物 実測図(8)

3. 包含層出土遺物

大半の遺物が包含層から出土している。種別も多く器種も多様である。

①須恵器

杯・皿・碗・縹楕・壺・鉢・平瓶・壺・円面鏡がある。日用品である杯・皿・壺のほか、若干であるが縹楕・鉢が含まれる。表面調整や胎土からみて、精良なものとやや作りの粗いものとに分かれる。量的には杯類の破片が目立つ。

杯には古墳時代のもの（125・126）が2点含まれているほかは、高台を持たないものと持つものがあり、高台を持たないものの方が多い。底部調整はヘラ切りと糸切りの両者があるが、ヘラ切りが多くを占める。墨書きは底部外面に施されている例がほとんどで、剥脱・固化したもの以外にも墨痕を残すものがある。見込み部が摩耗し、転用鏡としての用途が考えられる個体も多い。体部はやや外反するもの、直線的に立ち上がるるもの、内湾して立ち上がるものがあり、口縁端部の形状にも丸く収めるもの、内側に面を持つもの、外反するものが認められる。

皿にも杯と同様に高台の付かないものと付くものが認められる。高台の付かないものは口径に中・小があり、中型のものが多くを占める。体部には直線的に立ち上がるものとやや外反して立ち上がるものがあり、口縁端部の形状は丸く収めるものがほとんどを占める。高台が付く皿は口径の大きさ、身の浅いものと深いものが認められる。

灰・皿に伴うと考えられる壺は天井部の形態の丸いものと平たいものに大別できる。つまみが失われている個体が多いが、現存している個体ではその形態が宝珠状を呈するものがほとんどを占める。端部には内側に反りが残るもの、下方に残るもの、一度屈曲してから下方に垂下するものがあり、法量的には大・中・小の3種類存在している。

碗は輪高台と平高台を持つものがあり、輪高台のものも含めて糸切り底である。

金属器を模したと考えられる縹楕類にも、口縁端部が屈曲し段を持つもの、端部が外反して納まるもの、外面に面を持つものと複数の形態が認められる。また、これらに伴うと考えられる蓋は、つまみが輪状を呈している。

壺（256）は土師器を模したような形態を呈する丸底壺である。この他にも、細長い体部を持つ形態の壺も1点出土しており、体部に突帶を巡らせるものや平底で筒状の体部を持つものもある。口縁部を欠く例が多いが、肩が張る体部を持つ長頸壺と思われる個体が多く占める。壺に伴うと考えられる平たい天井部から直角に垂下する口縁部を持つ壺も出土している。

鉄鉢型土器には平底で口縁が大きく内彂するもの、丸底で口縁部の屈曲が小さいものとその中间的形態を持つと考えられるものがある。口縁を曲げて注口を作るものがある。

平瓶は口縁部を欠くが、体部直径20cmのものが1点出土している。

高杯は丸みを帯びた杯部に短いが大きく開く脚部が付くものが出土している。

壺は口径が約20cm・約30cm・約40cmの3グループあり、外反する口縁を持つものと、直線的に広がる口縁を持つものがある。口縁端部の形態もそれぞれ異なっている。体部の調整はタタキを用い、内面には円形の当て具の痕跡を残す。肩が張り丸みを帯びた器形のものが多く、底部の形態は丸底と平底のものが混在している。

円面視は海の部分の細片が出土しているが、形態の詳細は不明である。(鐵)

②土師器

杯・皿・椀・甕・鉢・ミニチュア土器がある。杯・皿の精製品と甕(瓶)・甕の日用品と小型の祭祀具に分かれる。個体数は精製品と日用品は余り変化がないと思われるが、量的には甕などの破片が目立つ。

杯には糸切りとヘラ切りの両者があり、率的にはほぼ同率である。遺構出土土器と同じくヘラ切りの杯の方に墨書きが記されている。墨書きは体部にもあるが、底部の方が圧倒的に多い。圓化した以外にも墨痕が残っている破片もある。杯の縁部の形狀は丸いものや肥厚しているものや尖りぎみのものなど種類があるが、大半の土器は赤色顔料が塗布されている。化粧土として塗られたもので、ハケの痕跡が明瞭なものも多い。僅かにヘラミガキを施している土器もあるが少量である。2次焼成を受けている土器もある。高台の付くものも出土している。

(341) は精製の短頸甕である。化粧土を塗布しており丁寧な作りである。墨の痕跡が認められるが、判読はできない。

皿には口径の大小があるが、中型のものが多くを占める。底部はヘラ切りである。中型の皿は基本的にすべて化粧土が塗布されている。底面に墨書きが記されている土器も2点ある。体部の形狀は外反するものやS字状になるもの、直線的に延びるものがある。

甕の個体数は多い。口縁部はくの字で端部の形狀に変化がある。角張るもの、丸いもの、肥厚するものに分けられる。端部内側につまみ上げている土器が多い。外面はハケ整形のものが主体で、内面はヘ

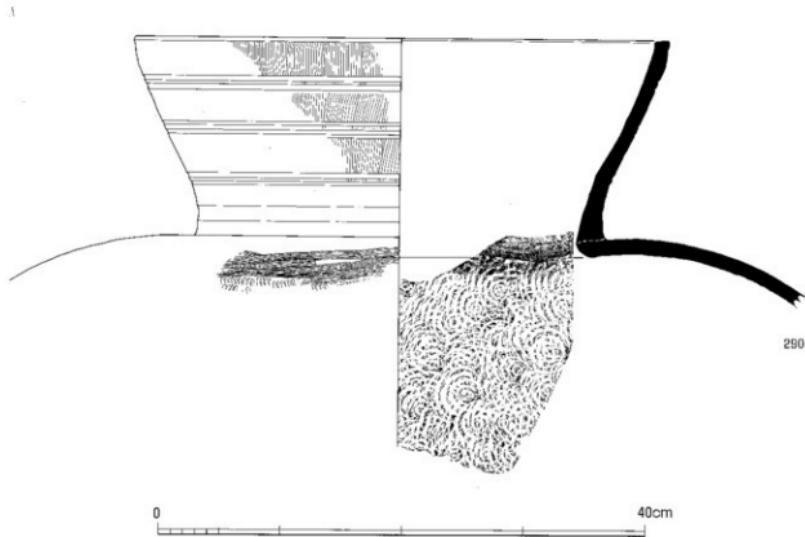


図42 包含層 出土遺物 実測図(9)

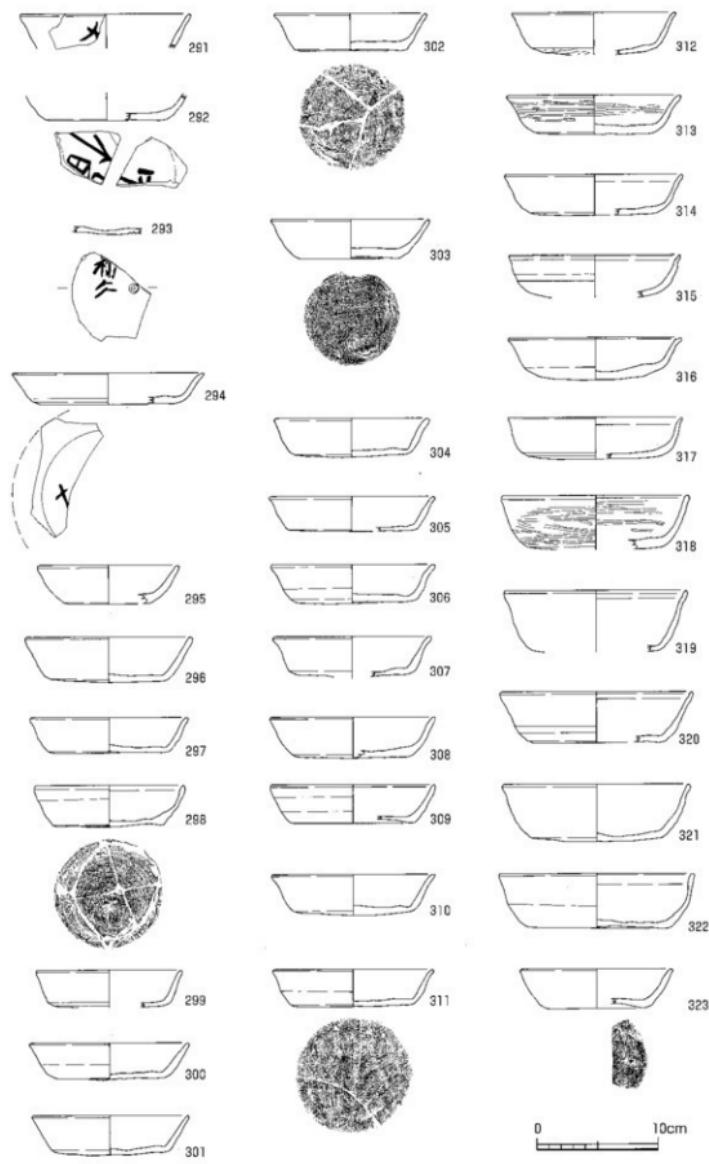


図43 包含層 出土遺物 実測図10

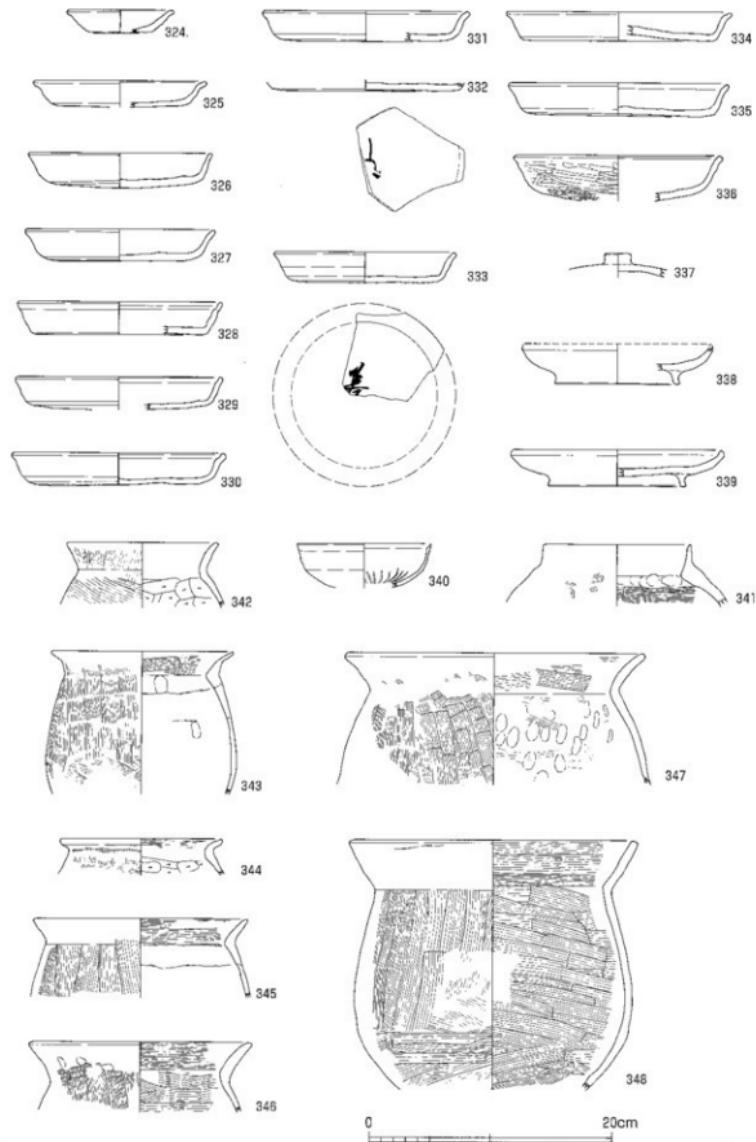


図44 包含層 出土遺物 実測図(1)

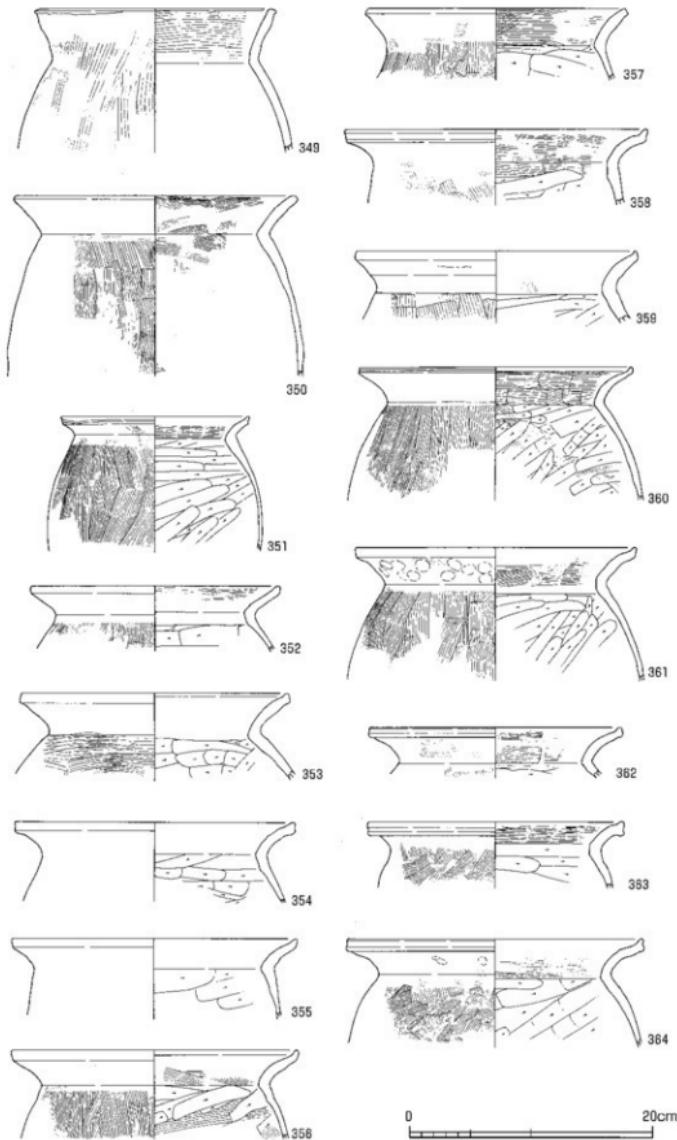


図45 包含層 出土遺物 實測図(12)

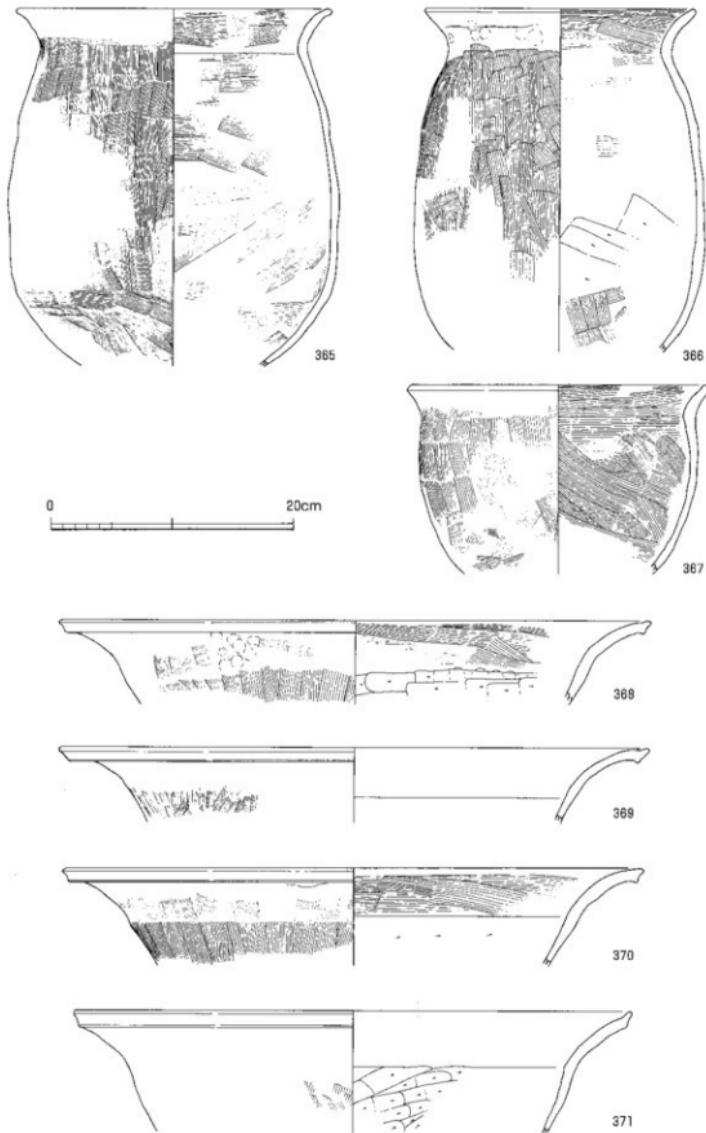


図46 包含層 出土遺物 実測図(13)

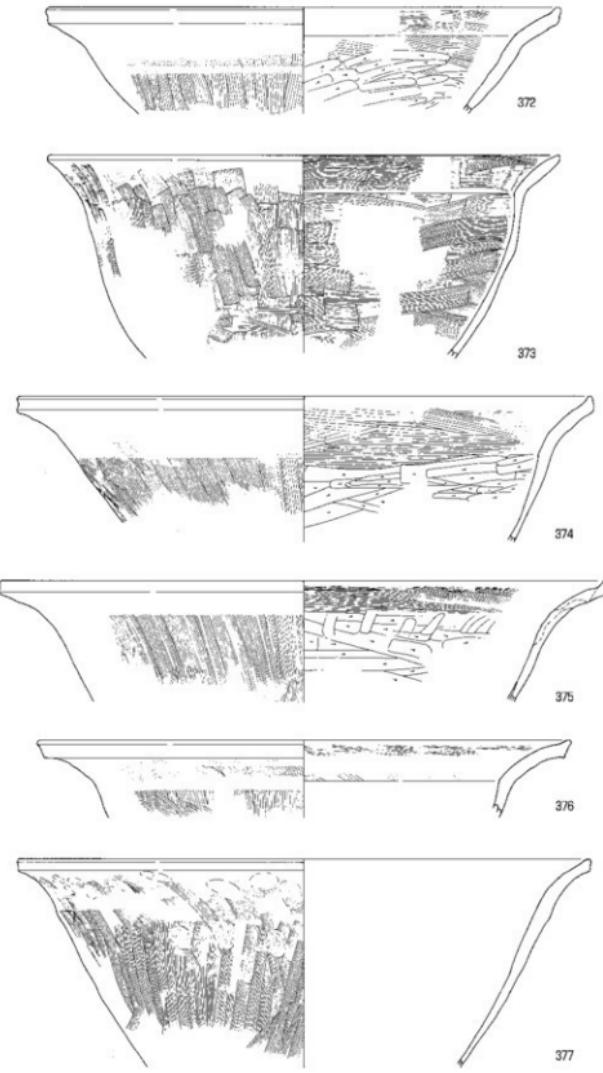
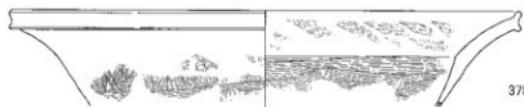
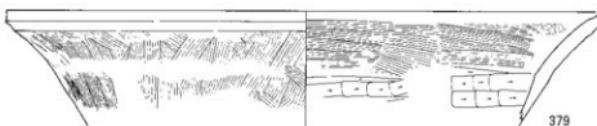


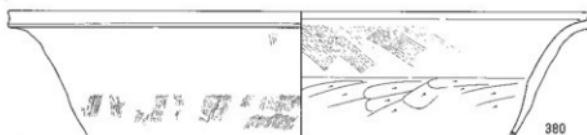
図47 包含層 出土遺物 実測図(14)



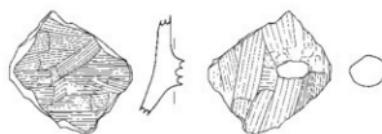
378



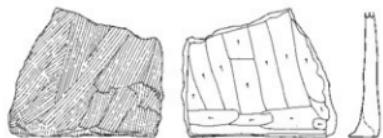
379



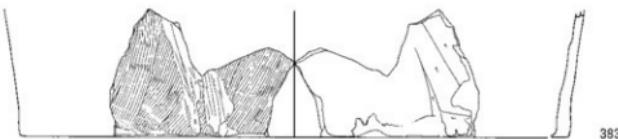
380



381



382



383

図48 包含層 出土遺物 實測図(1)

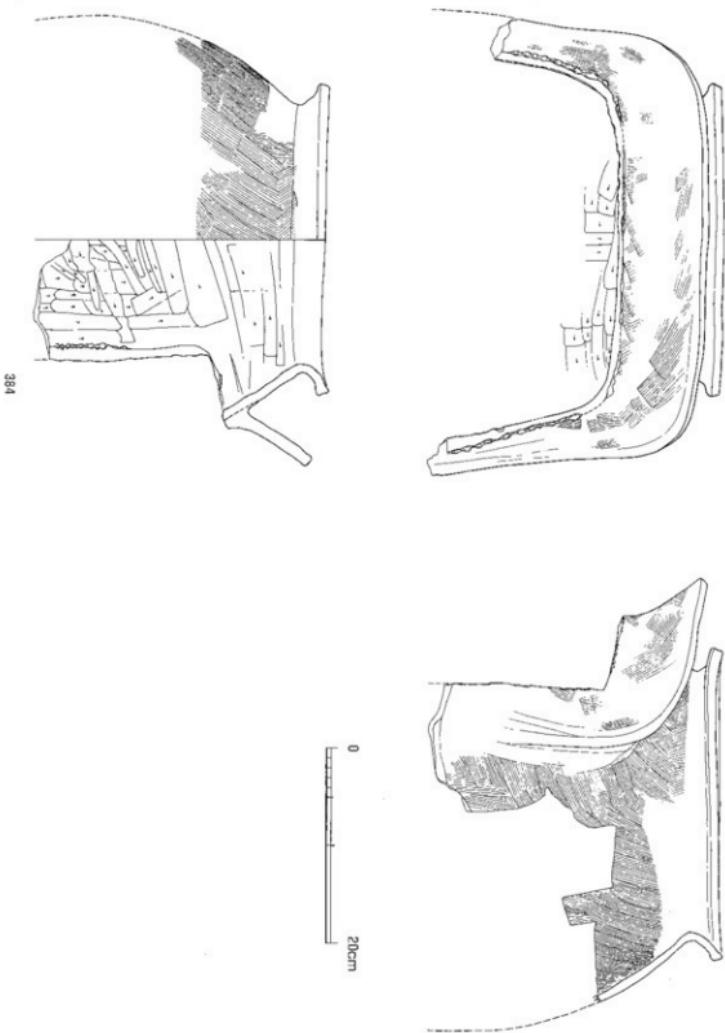


図49 包含層 出土遺物 実測図(16)

384

ラケズリとハケの両者がある。概して罐部内側につまみ上げている土器は、ヘラケズリのものが多い。胴の長い甕（平底の甕B）も相当量出土している。

口径の大きいものも相当量出土している。一応甕としているが、鉢とすべきものである。口縁部が最大径となるもので、整形技法は甕と同じである。ハケ整形を主体としている。

甕も多く出土しているが、なかなか接合できなかった。個体数は10個体を上回っていると思われる。内面はユビ成形の粗いものが多く、外面はハケ整形が多い。把手は丸い棒状と平たい幅のあるものがあり、把手の付くものがすべてでないようと思われる。

ミニチュア土器も数点出土している。手捏ねとそうでもないものがある。手捏ねにもヨコナデを加えたものもある。器種も鉢と皿の両方の土器が認められる。製塙土器と思われる脚台も1点出土している。磨滅しているものの脚台式のものであろう。

③黒色土器・陶磁器

図化したものは黒色土器2点、綠釉陶器2点、白磁1点である。黒色土器は内面のみ黒色のものと外側黒色のものがある。丁寧なミガキを施している。綠釉陶器は緑色が濃いものと淡いものがある。高台の形状もそれに即して変化している。产地の差と思われる。図化したのは2点であるが、体部の破片は他にも出土している。白磁は底部が1点出土している。

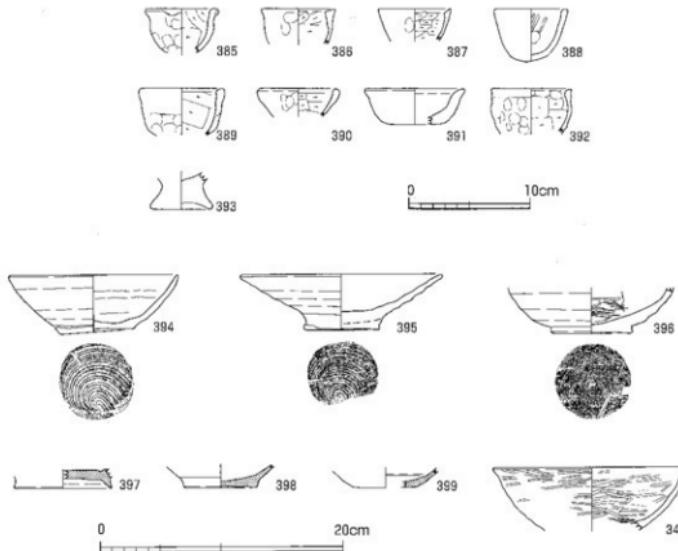


図50 包含層 出土遺物 実測図(1)

④土製品（図51）

土錘と土玉・羽口が出土している。

土錘はすべて円孔土錘で他のタイプは認められない。大きさから3種に分けられる。大型の土錘は長さ5cmを超えるもので、最長の土錘は(421)で6.5cmを測る。幅は最大で3.45cmである。大型の土錘は棗玉状のものと管玉状の両者がある。中形の土錘は5cm未満で幅が1.4cmを超えるものである。小形の土錘は4cm未満で幅が1.4cm未満の土錘である。

土玉状の製品は(427)円孔がないが玉と思われるものである。手捏ねで仕上げており最大長2.6cmを測る。

羽口は団化したものは1点(428)であるが、破片は他に1点出土している。(渡辺)

⑤鉄製品（図51・52）

(429)は全体に気泡の痕跡が認められる椀形鉄滓である。包含層から出土している。

(430)は刃部の一部が残存するだけであるが、鎌であると思われる。丸みを帯びた背部を持ち、直刃である。整地層より出土した。

(431)は船と考えられる。両端を欠くが、断面は扁平な直方体で、両端を折り曲げた痕跡がある。

(432)～(435)は釘である。頭部を尖っているが、4点とも断面がやや亞んだ方形となる角釘である。いずれも包含層から出土している。

(436)は整と考えられる。直線的な軸部に広がった刃部が付くと考えられる。P43から出土した。

⑥石器・石製品（図53）

敲石

(437)は棒状の礫を利用し、端部に敲打痕が残る。重さは207.7gを測り、包含層から出土した。(438)は扁平な渦円礫を利用している。端部に敲打痕がある。重さは214.1gを測る。包含層から出土した。(439)は欠損しているが、長い渦円礫を利用した敲石である。端部に明瞭な敲打痕が残る。重さは627.8gを測る。包含層から出土した。

磨製石斧

(440)は短冊形を呈する。各面ともかなり丁寧な成形を行っている。刃部が作り出されていないが、磨製石斧の未製品と考えられる。

砥石

(441)は整った方柱状を呈する。各面に擦痕がある。重さは43.7gを測り、包含層から出土した。(442)はやや歪な直方体を呈し、側面は4面とも擦痕が認められる。重さは155.6gを測る。包含層から出土した。(443)は残存状況は悪いが、擦痕の認められる面が1面ある。重さは99.0gを測る。包含層から出土した。(444)も残存状況は悪いが、擦痕の認められる面が1面ある。重さは218.3gを測り、整地層から出土した。(鐵)

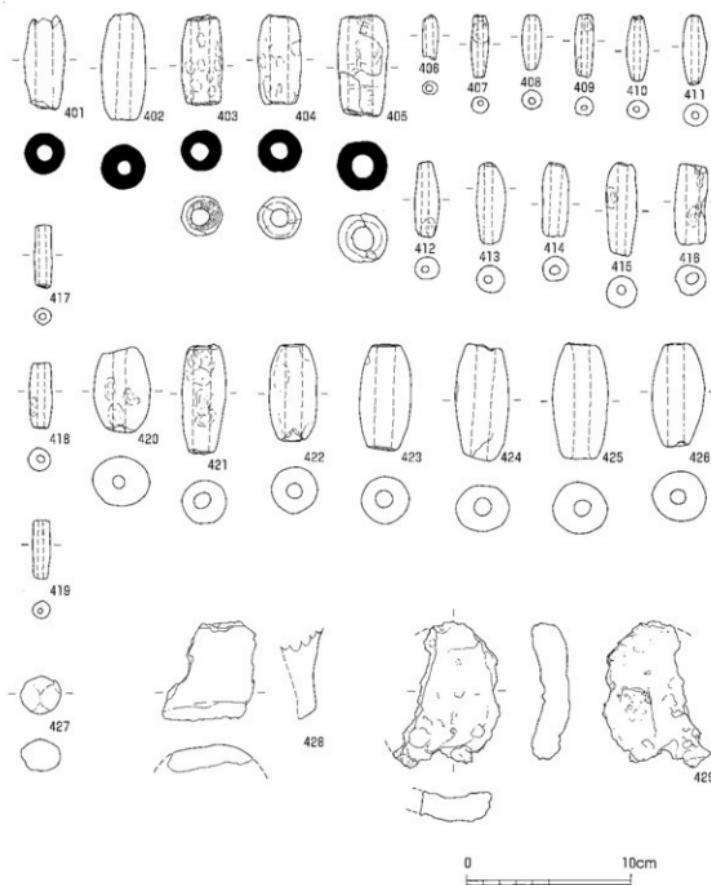


図51 包含層 出土遺物 実測図(18)

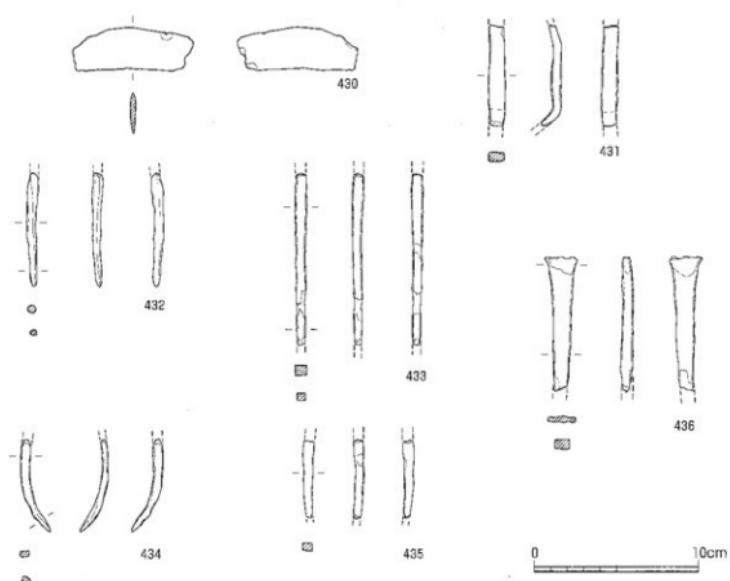


図52 包含層 出土遺物 実測図(19)

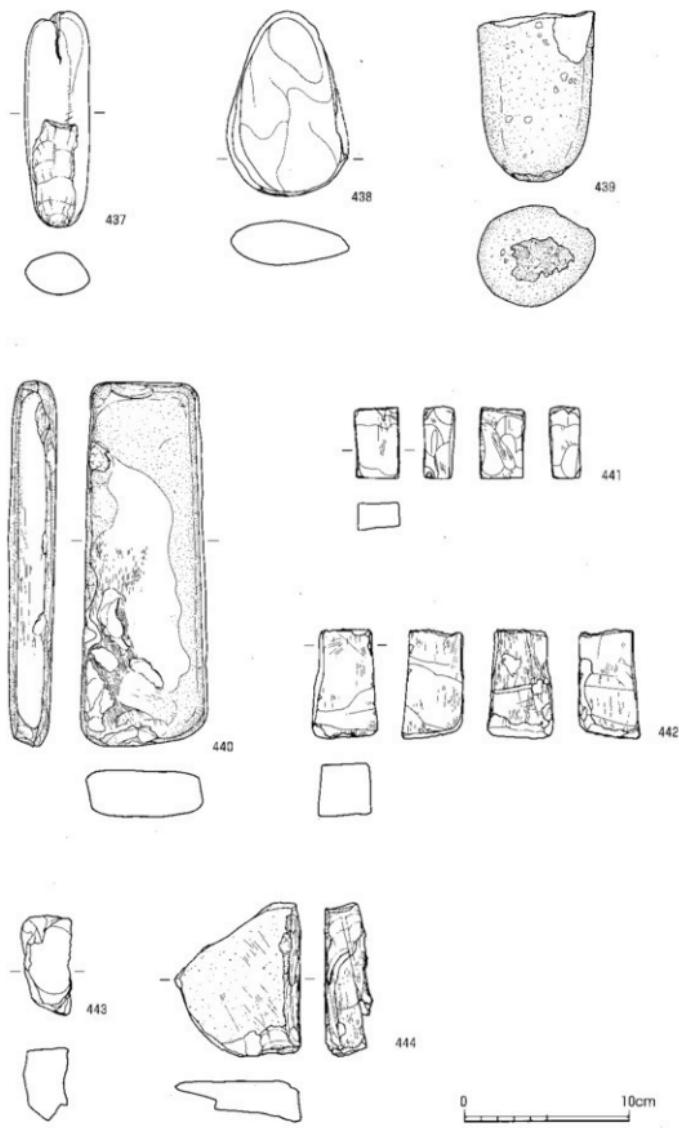


図53 石器 実測図

V. 上石遺跡出土の漆付着土器について

京都工芸繊維大学大学院 遠藤 利恵
㈱吉田生物研究所 本吉恵理子

1 はじめに

平安時代に比定される本遺跡は、但馬国府推定地の近くに所在する。本遺跡からは、数点の漆付着土器が出土した。筆者らは、これらの土器の用途と使用状況を明らかにする目的で、土器に付着した漆膜の分析・観察を行ったので、その結果を報告する。

2 資料と調査方法

2-1. 資料

資料は、以下の表1に記す4点の須恵器である。いずれの土器にも、破断面に漆は付着しておらず、使用後に破損したと考えられる。それぞれの資料について、漆の表面観察の結果を述べる。

〈資料1〉

黒色の漆が、すでに剝離した部分もあるが、土器内面の体部から底部にかけて付着している。

〈資料2〉

黒褐色で、表面に光沢がなく粉っぽい漆が、土器内面全面に付着している。表面には亀裂が走り、部分的に白っぽく見える。漆は少々の方で細かく碎ける。

〈資料3〉

黒色の漆が土器内面の底部にわずかに付着している。漆は膜状を呈し、わずかに光沢を残している。

〈資料4〉

黒茶褐色の漆が、土器内面全面に層状に厚く付着している。漆の表面には茶褐色の部分があり、黒茶褐色の部分との境界は不明瞭である。漆膜は土器底部が最も厚く、口縁部にかけて徐々に薄くなる。漆膜はゴムのような質感であった。

表1 上石遺跡出土漆付着土器一覧

試料No.	報告No.	器種	時代	図No.
1	226	杯	奈良時代	1
2	217	杯	平安時代	2
3	157	杯	平安時代	3
4	236	鉢	平安時代	4

2-2. 調査方法

それぞれの資料から数ミリ角の漆膜サンプルを採取し、エポキシ樹脂に包埋して硬化させた。その後、スライドグラスに貼りつけ研磨して漆膜断面の薄片プレパラートを作製し、透過光下の光学顕微鏡で観察した。

3 断面の観察結果

〈試料1〉(図5)

茶褐色の漆層が1層見られる。顔料を混ぜていない透明漆で、層厚は約 $30\mu m$ である。表面から約 $3\mu m$ の幅で劣化により漆が変色している。

〈試料2〉(図6)

全体が黒褐色の漆層が1層見られる。無色鉱物が多数混じり、漆分が少ないため、空隙が多い。漆に土を混和した地粉漆であろう。無色鉱物の最大粒径は約 $100\mu m$ を測り、層厚は約 $300\mu m$ である。

〈試料3〉(図7)

層中に黒色の微粒子を混和する茶褐色の漆が、1層見られる。層厚は約 $300\mu m$ である。漆の表面には、劣化により層向と垂直方向に亀裂が見られ、表面から約 $15\mu m$ の幅で変色している。

〈試料4〉(図8)

気泡や微粒子を不均一に含み、茶褐色を呈する未精製の生漆様のものが、不規則に何層も重なっている。漆層の上面は平滑でなく、部分的に盛り上がっている。1層は約 $25\mu m$ である。全体の層厚は、薄い部分で約 $200\mu m$ 、厚く盛り上がっている部分では約 $600\mu m$ にも達する。

4. 考察

試料1は、精製済みの透明漆であり、試料2は漆に土を混和したいわゆる地粉漆であった。試料3は、黒色の微粒子を混和した黒色漆で、試料4は、未精製の生漆様であった。

以上のように、今回調査した土器に付着した漆には、精製度の低い漆、漆器の下地に用いられる地粉漆、漆器の上塗りに用いられる透明漆、顔料入りの黒色漆など、さまざまな種類があることが判明した。試料4には、未精製の生漆様のものが何層も重なることから、数回使用された可能性があるが、用途は特定できない。試料1～3の土器は、1層のみの漆の残存状況から、漆工具のパレットとして使われたと推定される。



図1 資料1 須恵器杯内面



図2 資料2 須恵器杯内面



図3 資料3 須恵器杯内面

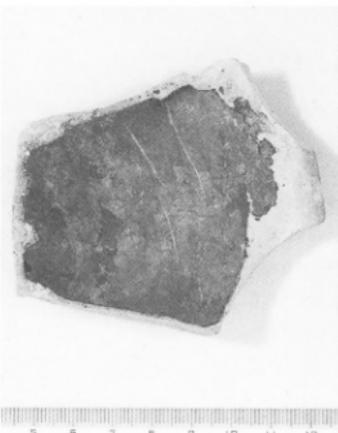


図4 資料4 須恵器杯内面

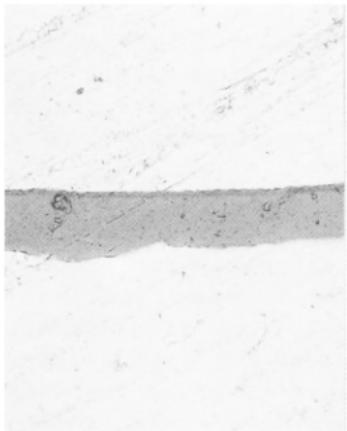


図 5 試料 1 漆断面 ($\times 400$)

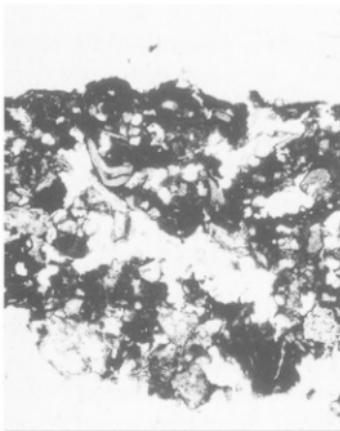


図 6 試料 2 漆断面 ($\times 200$)

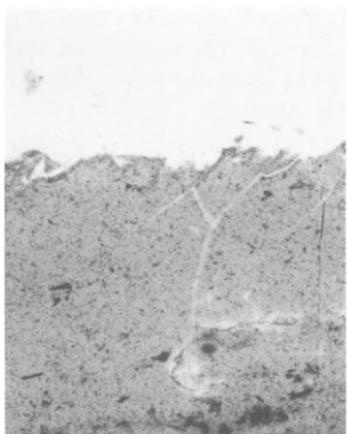


図 7 試料 3 漆断面 ($\times 200$)

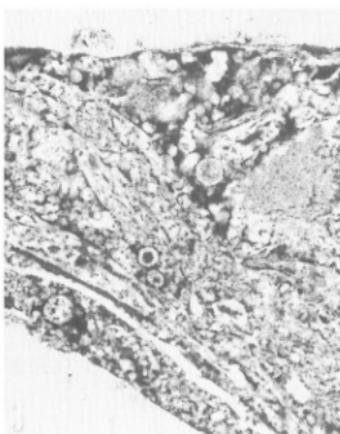


図 8 試料 4 漆断面 ($\times 200$)

VI. おわりに

上石遺跡は、阪神淡路大震災の直後の確認調査によって知られることになった遺跡である。上石遺跡周辺は（第2次）但馬国府推定地の候補地の1つであり、隣接してJR国府駅が存在するように、但馬国府関連遺構（遺跡）として注目されるものであった。積雪の日に確認調査が実施され、翌年度に全面調査が実施されることになった遺跡である。当初予想した以上に官衙的な性格を有することが判明した。但馬国府周辺の関連遺構と思われる。

第1期の調査対象は、但馬と離れてはいるが1995年1月15日に発生した阪神淡路大震災の復興住宅の1つとして位置付けられていた。そのことから、震災復興事業として調査が行われたため、調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班が担当することとなった。他府県などへの支援依頼の1つとして挙げられていた遺跡である。被災地から遠く離れていることが考慮され、また他府県からの支援職員を含めて復興調査班すべての調査員の調査現場が予定されていなかったことから、兵庫県職員2名で調査を実施することとなった。しかし、調査段階で支援職員の方々やデスク担当である兵庫県職員の方々の協力を得た。他の行政担当者と現場を行うことなど考えてもみなかったもので、特殊な印象深い調査となった。近未来の新しい行政調査の好例になるかもしれないケースであった。お互いの緊張感も高く、貴重な経験ができたと思っている。

遺構は、掘立柱建物跡14棟、井戸3基と溝・土坑などを検出している。それ以外に近世以降の水田面や溝などの新しい時期の遺構がある。また、南半を中心にはほぼ全域で地震痕跡を確認している。大半の掘立柱建物跡・溝などと同じ方位を持つ噴砂が検出されている。上面では噴砂が認められないことから、平安時代の地震痕跡と考えられる。記録には明記されていないが、南海地震か貞觀の越中大地震(863年)か、山崎断層による播磨の地震(868年)の可能性が考えられる。但馬では出石町砂入遺跡で井戸枠がずれている例が確認されており、同時期の地震痕跡ではないかと思われる。

掘立柱建物跡は切り合い関係があることから、複数時期あることは確実である。ただ、全体的にはシンプルで切り合い関係はない。切り合い関係があるのは、北側のSB08・09・10の3棟と南側のSB05・06の2棟である。SB09とSB10は、ほぼ同位置での建て替えかと思われる例である。南北とも2期に分けられる。次に主軸方向からみてみると、方位が異なる建物があり、3時期に分けることが可能である。南北に近い主軸を持つSB12と45°振ったSB02・07・14、そしてその中間の多くの掘立柱建物跡に分けられる。建物の主軸方位から大きく3時期に分けられ、さらに中間は3小期に分けることができ

上石遺跡の遺構変遷

時 期	掘立柱建物跡	土 坑	溝	そ の 他
I	SB12	SK04・05・07		整地層
II	1 SB01・06・13	SK01・03	SD05	
	2 SB08・11	SK02		SE03・04
	3 SB03・04・05・09・10		SD03・04・05・07	SE01・02
III	SB02・07・14			

る。出土遺物を勘案すると、II-2期から黒色土器が、II-3期から施釉陶器・磁器が出土するようになり、同一方向の建物ながら変化が生じるようである。SB02は方位と新しい遺物を含むことから、III期の遺構であることは問題ないが、古い時期の遺物を多く保有している。古い段階の復原できなかつた掘立柱建物跡があつた可能性が高い。時期は、I期は8世紀後半で、II期は9世紀代から10世紀前半にかけての時期、III期は11世紀から12世紀にかけての時期と考えられる。II期は掘立柱建物跡が多数残かれていることからも明らかなように長期間に渡っている。上石遺跡の盛期であり継続して集落を営んでいたと思われる。II期とIII期の間には断絶があり、継続していない。III期の幅を広く取つてあるが、時期を確定することが困難なだけで継続期間は短いと考えている。主軸方向を大きく変えていることからも断続期間は長かったのではないかと思われる。

掘立柱建物跡以外の遺構では溝は方位から建物の主軸の時期と同じと考えられる。土坑は祭祀的な土坑と生産関係の土坑があり、層位からも古い遺構が多い。整地層は当然古い時期であり、それに覆われた地鎮遺構であるSK04・05は古い遺構である。SK01はSB01に伴うか前後した時期の遺構で興味深い資料である。儀式を行つた好例にならうかと思われる。SK03はSB13の柱通りにあり、縁釉陶器の合子を保有している点が注目される。SK02は小鍛冶遺構で、遺構の性格から建物の存続しない時期を想定した。

掘立柱建物跡は通常の遺構で、建物規模も普通である。新しい時期のSB02以外はすべて柱建物である。2×3間を主体とした掘立柱建物跡であることは官衙の要素である。半数以上の建物が2×3間である。柱列を並べるなど計画的に整然と建てているように思われる。特にII-3期では整然としている。主屋であろうSB03（南北3間、東西3間以上）の南辺の東側延長線上にSB04の南辺がある。SB04東辺の南側延長線上にSB05がある。SB03・SB04は東西棟でSB05は南北棟である。SB03は溝を伴つてゐる。溝で囲まれた主屋の東側に東西棟と南北棟が規則的に配置されている。この時期には灰釉陶器・縁釉陶器を併用するようになる。

上石遺跡の遺構で特徴的な遺構は土坑である。祭祀遺構と考えられるSK04・05・01である。SK04・05は整地前に祭祀を行つた遺構で土器を重ねたり（SK04）、碟を詰めたり（SK05）している。整地を行い、層（遺構面）上に遺構を築く前の祭祀を行つたもので、ある種の作法に則り祭式を行つた跡と思われる。土器を重ねる例は各地で多々見られる例である。地鎮に関する遺構とするのが一般的であろう。碟を土器に詰めることも同質な例かとも思われるが、碟で封じる行為はSK01の遺構の意識に通ずる気がする。一体の祭式として地を鎮め、穢れを祓う意図があったのではないかと思われる。SK01は土器群を碟が覆つた遺構である。土器は土師器杯に限られており、杯はすべて赤色顔料を塗布したもので精製品である。24個の杯で2個1セットとして使用されていた可能性が高い。1セットは2種の土師器を組み合わせているようである。1種はハラ切りで底部に墨書のあるもの、もう1種は糸切りで墨書のないものである。墨書はすべて同じで人名と思われる「猪主」とある。使い方は底向土を重ねた場合と口を合わせる場合があるよである。当然、五穀や酒・水などを入れていたものと想像されるが、痕跡は全く残っていない。多くは下の方が糸切り底で墨書のない杯である。合わせ口にした場合も下が糸切りの杯である。すなわち上の蓋側に墨書が見えるように置かれている。土坑底には碟は敷かず、土器を底に重ね、並べたのち碟で覆つてゐる。文字は個人名かと思われ、祭式の責任か個人の穢れを祓うためのものであろうかと考えられる。

次に遺物から見てみると、出土遺物の量はやや多い方であろう。当然、包含層出土遺物が多いものの、層位的に分けられており、興味ある遺物も遺構からまとまって出土している。特にSK01の一括遺物は注目されるものである。須恵器・土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・土製品・土鍾・鉄器・石器が出土している。量的には土師器が多く、須恵器が次いでいる。黒色土器はやや量があるが、それ以外は少量である。

(渡辺)

今回の調査で検出された須恵器は杯・皿類を中心とした食膳具が多くを占める。遺物の項でも述べたが、船上・焼成等の特徴から二つの群に分かれるようである。主として杯・皿類と言った食膳具に含まれている精良な土器は黒色の粒子を含む場合が多く、時には調整の際に潰れて炭をぼかしたような状況を示すこともある。これは平城京で報告されているII群須恵器に当たるもので搬入品であると思われる。一方、やや表面の仕上げや粗い一群は地元但馬で焼かれたものと考えられる。

包含層から出土していることもあり、所属時期には幅が認められる。一番古いものは7世紀代に属すると考えられる杯がわずかに含まれている。大多数の須恵器は主として8世紀中葉を中心とする時に納まると考えられるが、その中でも鉄鉢型土器に新旧の形式が含まれている点や杯のバリエーションからみて新・旧2段階は認められる。また、碗類には糸切りの平高台を持つ一群があり、突帯を持つ壺や細い筒型の体部を持つ長頸壺と考えられるものがあることから、9世紀代に下る資料も少量ではあるが存在している。

(鐵)

土師器は、器種として杯・皿・碗・甕・壺・鉢・甕・ミニチュア土器がある。小型品には精製と粗製のものがある。精製品はあるものの、高杯・盤などの製品は含まれていない。墨書き土器がある割には精製品が少ないのが特徴的である。硯の少なさなどとも関連するのであろうか。甕・壺・鉢など日用品としての土器が多数を占めることも共通した要素かもしれない。土師器皿・杯は赤色顔料を塗布しているものが多く見られる。僅かにミガキを施した土器が数点見られる程度であり、これは搬入品の可能性が残されている。それ以外は地元産であろうと思われる。同様に黒色土器もベタ高台で底部の切り離しは糸切りである。土師器の技法に近いもので両面黒色のタイプである。地元産と考えてもよいかもしれない。土師器皿の底部の技法はヘラ切りと糸切りの2種あり同率の割合で、時期差ではない。しかし、墨書きはヘラ切りの方に限られており特徴的である。皿でも同様な傾向にある。土器そのものでは明確な精製粗製の差はないものの使い分けがなされているようである。

出土遺物から見ると、墨書き土器や赤色塗布の土師器・棱縁・硯など官衙関連の遺物が多数出土している。その反面土師器高杯・盤などの官衙関連遺構構造の遺物を出土していないという点も指摘できる。古代銭貨や?帶・銅印・木簡・律令期祭祀遺物など特殊な官衙遺物を保有していないまでも、セット関係として物足りなさを感じるのが実感である。が、硯も円面硯以外に杯の転用硯が数点あることや鉄鉢型や唾壺があることは、明らかに官衙関連の遺跡として捉えられる遺跡である。また、両地域とも木製祭祀具が多量に出土している地域である。その地域で祭祀具が伴わるのは官衙中心施設である。上石遺跡では井戸が検出されているが木製遺物は出土していない。但馬の律令期の遺跡として明確でない位置付けを感じる。遺跡の時期は8世紀後半に築かれた10世紀中頃まで継続している(III期とした中世にも集落は再開される)。この時期、律令期の遺跡は現在の日高町と出石町周辺の2地域に集中している。但馬国府推定地もこの両地域で想定されている。但馬国府は移転をした国府で10世紀初頭の延暦13(906)年に気多郡高田郷に遷したと『日本後紀』に記されている。第2次国府は日高町深田・カナゲタ遺跡周辺が比定されており、出土遺物の内容などからも異論のないところである。深田遺跡は上石遺跡からは

南西1km一帯の距離に位置している。上石遺跡のⅡ期が第2次国府となってからの時期で、国府周辺の関連遺跡と考えるのが妥当かと思われる。国府の中心施設ではないものの、そのいずれかの施設の関連遺構とするのが今の状況では想定しやすいものと思われる。第2次国府域から出石を通じて丹後方面へ向かう道沿いに所在する遺跡であること、遺跡の性格を考える上に重要な点かもしれない。それはⅠ期の時期に遺跡が構築された理由になるかもしれない。Ⅲ期は律令期ではなく、性格の異なった遺跡であろう。

上石遺跡の調査は、阪神淡路大震災後の最初の調査ということで非常に緊張した気分で従事した記憶がある。復興調査という埋蔵文化財行政調査上はじめての調査形態で、全国から支援職員の方々に兵庫県に来て戴いた調査であった。その中で県営住宅建設ということと、震災後最初の調査ということで唯一被災地以外の復興調査となった。調査は被災地と離れた但馬の地で今までと変わらない調査が行えた。調査担当者の心の片隅に復興調査であるという意識がなければ、前年度と全く変化のない調査であったと思う。担当者としては復興調査の意識が離れることなく実施した。また、通常兵庫県の職員2名で担当するところを10名前後の方々の参加・協力戴いたことでなおさら印象深い遺跡となった。予想していなかったところで、このような遺跡が確認されることは思ってもみなかったことで、今後の但馬の律令期を考える際に利用されることを望むものである。

(渡辺)

表2 遺物観察表

法量の()は復原径・残存高

遺物名 層位名	種別	器種	法 量(cm)			形態の特徴	技 法	備 考
			口徑	腹徑	底径			
平成2年 夏 漢灰	1	頌惠器	こねび(26.5)			(4.0)	内側に直立ぎみに肥厚する。	内外面ともロクロナデ。
	2	頌惠器	こねび(29.6)			(5.2)	内外面に肥厚する。	内外面ともロクロナデ。
	3	頌惠器	こねび(29.6)			(3.5)	内側に肥厚し、縫合丸い。	内外面ともロクロナデ。
	4	青磁	瓶			(2.6)	外側無し、内面墨書き	蓬草文
	5	鐵器	不明	2.4		(5.6)		
SB02	6	頌惠器	杯蓋	(13.0)		(1.0)	口縁部は尖りぎみで丸く削める。	内外面ともロクロナデ整形。重ね焼きの痕跡あり。
	7	頌惠器	杯	(17.4)	(12.4)	6.7	体部は内湾ぎみで、器肉やや厚く端部は丸い。底部との接縫は不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底部はヘラ切りのちナガ仕上げ。
	8	頌惠器	杯	(13.85)	(9.0)	3.8	体部は内湾ぎみに延び縫合は尖る。底部との接縫不明瞭。	盆付着し、灯明皿切りのちナガ調整。軸柱見られる。
	9	頌惠器	琵琶壺	(9.7)	(13.9)	6.62	体部はやや扁平で、口縁部は直しし端部は丸くおさめる。底部との境不明瞭。	内面に灰付着。
	10	頌惠器	杯	(13.15)	(9.8)	3.6	体部は僅かに内湾ぎみで縫合は尖りおさめる。底部との接縫不明瞭。底部厚い。	内外面ともロクロナデ整形。底部はヘラ切り。高台はやや外側。
	11	頌惠器	壺	(19.1)		(7.1)	口縁部は直線的に延び縫合近くで外反し縫合は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ整形。
	12	土師器	瓶	II.95	8.55	3.15	体部は僅かに内湾ぎみで端部は丸くおさめる。底部との接縫明瞭。器肉の厚さ亞。	内面に自然釉付着。
	13	土師器	小皿	(7.8)	(3.8)	1.55	器内厚く上げた。縫合部は角張りぎみ。	内外面ともヨコヨコ整形。底部は赤切り。
	14	灰陶陶器	碗	(10.6)		(3.9)	体部は内湾ぎみに延び縫合部は外側に水平に引け張り、端部は丸い。	ロクロナデ整形後施焰。
	15	土師器	甕	(20.5)	(8.4)	長脚の臺で、瓶部の内側は斜い。(II脚部が中央に突出して続いている)。	内外面ともにハケ整形。口縁部内面はヨコ方向のナガ仕上げ(縫合部はヨコナデ)。	
	16	土師器	杯	(15.0)		3.9	底部との接縫不明瞭で、内側する体部から(接縫)と並んで焼成している。縫合部は丸い。	2種のハケ使用。
SB03	17	黑色土器	碗	(15.6)	(4.3)	体部が中央に盛り直し直進に延びる。(口縁部は丸くおさめる)。	内外面ともロクロナデ整形後ヘラミガキを施す。	
	18	白陶	皿	(10.3)		(2.05)	体部が内側へおり、口縁部は外へ水平に張り反手返し突きぎみに仕上げる。	
	19	白陶	皿			6.1	体部は僅かに内湾ぎみ。両台は合形で内側は縫合や。	高台部盛焰。割り出し高台。底部は赤切り。
	20	頌惠器	瓶蓋面	(9.8)		(4.3)	体部は偏平で、口縁部は直ぐる。端部は角張りぎみ。	内外面ともロクロナデ。
	21	頌惠器	杯	(12.9)	(8.8)	4.5	体部は直立ぎみに延び縫合部は外側に尖っている。高台は丸みのあるM字形。	内外面ともにロクロナデ。底部はヘラ切りのちナガ方向のナガ仕上げ。
SB05	22	土師器	甕	(25.1)		(7.6)	くの字臺で、全体的に器肉厚く特に裏部は高い。縫合は尖っている。	内面はヨコ成形のちハケ整形。外面もハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。
	23	頌惠器	碗	(13.75)		(3.8)	体部は内湾ぎみに延び縫合部はやや角張りぎみに仕上げる。	内外面ともにロクロナデ。
	24	頌惠器	杯	(13.85)	(9.95)	3.55	底部との接縫不明瞭で体部は直線的に延び縫合部はやや外反し突っている。高台はやや小ささい。	内外面ともにロクロナデ。底部はヘラ切りのちナガ仕上げ。内面にもナガ仕上げ。
	25	土師器	杯	(11.4)	(11.1)	3.35	底部は平滑で体部は内湾ぎみで口縁部は丸くおさめる。内面に縫合あり志状の痕跡あり。	体部は内外面ともロクロナデで底部はナゲ調整。
	26	土師器	杯	11.7	5.6	3.15	直線的に延びる体部は縫合部は角張りぎみ。底部は平たん。	内外面ともロクロナデ。外側は沈殿が多少見られる。底部は赤切り。
SB08	27	黑色土器	碗	(16.5)	(8.1)	6.3	ペタ高台點付け。体部は内湾しており縫合部は外側にやや反る。	内面はヨコヨコ整形。底部は赤切り。
	28	土師器	甕	(21.1)		(4.45)	くの字臺の口縁部の横裂片で、縫合部は上方へまみ上げるように肥厚している。	内面はハケギザ。口縁部はヨコヨコ成形のちヨコナデ仕上げ。

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 置位名	種別	基準	法量 (cm)			形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径			
S B10	須恵器	杯	(13.8)			(4.4)	体部は直線ぎみに延び端部は外方へ反り尖っている。	内外面ともにロクロナデ。
	須恵器	杯			(2.5)	(13.2)	底部は比較的平たん。体部は直線的に延びている。高台は台形で僅かに肥厚している。	内外面ともにロクロナデ。底部はへラ切りのちナデ仕上げ。
	黒色土器	碗	(19.7)			(4.0)	内湾きで縁やかな曲線で口縁部へ続いている。端部は尖り至り高くおさめる。	内外面ともにヘミガキで仕上げてある。
	土師器	鍋	16.65			(35.95)	やや偏平な半球状の体部にくの字の口縁部がつく。端部は角張っている。	内外面ともにハケ整形。端部付近のみヨコナデ。2種類のハケ。
S B10	須恵器	杯	(13.8)		(9.35)	3.0	体部は内湾きみに延び端部は尖っている。	内外面ともにロクロナデ。底部はヘラ切り。
	須恵器	碗			(3.35)	(17.1)	体部は内湾きしており、口縁部はやや外反するようになり、端部は丸くおさめる。	口縁部自然釉付着。
	黒色土器	碗	(15.85)	7.0	6.1		体部は内湾ぎみに延び口縁部は更厚して端部は丸くおさめる。	内外面ともにロクロナデのちへらみがき(乾刃)。底部は貼り付けたのち辛切り。
S B12	須恵器	皿	(12.6)			(3.2)	体部は緩やかなS字状で端部は外反しつづくおさめる。	内外面ともにロクロナデ。洗削は一部だけ行っており、へラ切りのちナデ調整。
	須恵器	碗	(18.8)			(4.7)	体部はやや内湾しており、端部は丸くおさめる。	内外面ともにロクロナデ。
	須恵器	楕	(11.0)			(16.9)	偏平な半球体に外開きの直線的な口縁部が付く。端部はやや内側に厚膜している。	外側はタタキのちナデ。内面はナデ。口経部はロクロナデ。粘土経の健び目有。
	須恵器	杯	(11.9)		(8.35)	5.2	体部は内湾きみに延び端部は丸くおさめる。	内外面ともにロクロナデ。底部はヘラ切り。内面は仕上げナデ。
S B14	土師器	鉢	7.8			6.55	底部が薄く口縁部にくいくくなっている。口縁部は外側に尖りぎみである。	内面はヘラケズリ、外側はタタキ成形のものとビュ調節。口縁部はヨコナデ。
	須恵器	杯	(12.8)		(8.2)	3.6	体部と底部との接縫なく、体部は先みを持つ。端部は尖りきみで丸くなっている。	内外面ともにロクロナデ。底部はへラ切りのち小定方向のナデ調整。
	土師質	土鍋	(11.1)			4.6	圓溝が多い状態。孔径は0.7cm	芯に巻くようにしてビュ成形か?
	土師器	杯	11.8	9.2	3.2		体部は直線ぎみに延び端部は尖る。底部との接縫不明瞭。底面は平滑。体部には四縫の凹み。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのちナデ調整。赤色顔料塗布墨書きあり
S K01	土師器	杯	11.75	9.0	3.2		体部は直線ぎみに延び端部は尖りぎみに丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのちナデ調整。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.8	9.0	3.1		体部は直線的で端部は尖りぎみに丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。粘土の跡書き有。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切り。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.7	9.25	3.2		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのものと不定方向のナデ仕上げ。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.65	9.15	3.4		体部は直線的で端部は尖りぎみに丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切り。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.75	8.8	3.25		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切り。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.55	9.0	3.35		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底部との接縫不明瞭。内面や底面に墨書き有。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのものと不定方向のナデ仕上げ。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	12.05	8.9	3.05		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底部との接縫やや不明瞭で体部との接縫ぎみが明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのものと不定方向のナデ仕上げ。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.5	8.8	3.0		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底面の接縫やや不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのものと不定方向のナデ仕上げ。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.85	9.15	3.25		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底面の接縫やや不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切りのものと不定方向のナデ仕上げ。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.75	9.0	3.15		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底面の接縫やや不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切り。赤色顔料塗布墨書きあり
	土師器	杯	11.55	8.6	3.3		体部は直線的で端部は丸くおさめる。底面の接縫やや不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形。底面はへラ切り。赤色顔料塗布墨書きあり

法量の()は後原径・残存高

調査名 部位名	種別	器種	法量(cm)			形態の特徴	技 法	備 考	
			口径	側径	底径				
SK01	55	土師器	杯	12.0	9.05	3.3	体部は内湾ざみで、口縁端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭、やや厚く、底面平。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	56	土師器	杯	12.2	9.45	3.6	体部は内湾ざみで、器肉厚くがとっとしている。底部の接線不明瞭。底面平。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	57	土師器	杯	12.2	9.8	3.6	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭。器肉厚い。	内外面ともロクロナデ整形で内面はタテ方向のナデ調整。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	58	土師器	杯	11.95	8.55	3.15	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭。器肉厚い。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布 クサリ擦合む
	59	土師器	杯	12.3	9.4	3.55	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭。内面は波状文で走る。	内外面ともロクロナデ整形で内面は不定方向のナデ調整。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	60	土師器	杯	12.15	9.15	3.35	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭。器肉厚い。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	61	土師器	杯	12.45	9.3	3.3	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線明瞭。器肉厚い。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	62	土師器	杯	11.8	9.15	3.8	体部は内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線不明瞭。器肉厚い。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	63	土師器	杯	12.2	9.6	3.45	体部は僅かに内湾ざみで端部は丸くおさめる。底部との接線不明瞭。	内外面ともロクロナデ整形で内面は不定方向のナデ調整。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	64	土師器	杯	12.95	9.75	3.85	体部はS字状に屈曲し、端部は角張りき。底部の接線や不明瞭で厚く歪。内面は波状文。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
SK02	65	須恵器	碗	(8.0)	(1.7)		底部は半球で斜め上方へ直線的に体部は延びる。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	
	66	土師器	甕	(21.7)	(4.8)		口縁部は斜め上方へ延び屈曲して外湾ざみで端部は続く。端部は上方へつまみ出している。	内面はヘラケズリ。口縁部は横方向、外面は縱方向のハケメ。	
SK03	67	土師器	甕	12.55	9.25	3.85	体部はS字状に屈曲し、端部は角張りき。底部の接線や不明瞭で厚く歪。内面は波状文。	内外面ともロクロナデ整形。底部は余切り。	赤色顔料塗布
	68	縫合器	合子		(2.65)		縫やかに内湾ざみで縫合部を持つて天井部に限る。	内外面ともに縫合部がかけられている。色調は淡い。	
SK04	69	土師器	杯	(12.05)	(9.15)	3.35	此部は平滑でなく歪。内湾ざみで体部は延び、端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ。底部は余切り。口縁部に黒斑が見られる。内面磨成。	赤色の化粧土塗布 4個重ね
	70	土師器	杯	(12.7)	(9.1)	3.65	底面は平滑でなく歪。内湾ざみで体部は延び、端部は丸くおさめる。全体にやぶんでいる。	内外面ともロクロナデ。底部は余切り。	赤色の化粧土塗布
	71	土師器	杯	12.3	8.75	3.2	内湾ざみで引き体部中央で厚くなり、肥厚ざみで縫合部に限る。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。内面は仕上げのナデを施す。底部は余切り。	赤色の化粧土塗布 完形
	72	土師器	杯	12.4	8.7	3.85	直線的に延びる体部から丸くおさめる端部に限る。	内外面ともロクロナデ。内面は仕上げのナデを施す。底部は余切り。	赤色の化粧土塗布 完形
SK05	73	土師器	杯	12.4	8.65	3.5	直線的に延び端部はややりがみで丸くおさめる。底部は平たい。	内外面ともロクロナデ。内面はユビ調整の曲线。底部はヘラ切りのナデ仕上げ。	中に凹溝充溝
SE04	74	須恵器	杯	(13.7)	(10.4)	3.55	底面はややりがみを持つ。不明瞭な縫合から内湾ざみの体部に限る。端部は尖りがみに丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのナデ仕上げ。	
	75	須恵器	碗		6.2	(3.1)	内湾ざみの体部で口縁部下で縫やかに屈曲し端部は外反し丸くおさめる。やや歪んでいる。	内外面ともロクロナデ。内面はナデ仕上げ。底部はヘラ切りのナデ仕上げ。	
	76	須恵器	碗	15.5	5.2	6.4	内湾ざみの体部で口縁部下で縫やかに屈曲し端部は外反し丸くおさめる。やや歪んでいる。	内外面ともロクロナデ。底部は余切り。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺構名 層位名	種別	基極	法量(cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径	高さ			
S E04	77	須恵器	杯	34.5	9.45	4.1	直線的に延びる体部から僅かに外反ぎみに続く。高台は丸みのある台形。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのち不定方向のナデ仕上げ。 高台延付の痕跡。	
S E01	78	須恵器	碗		6.1	(4.8)	内湾する体部は重心が低く下方から直線的に口縁部に続く。高台は端面を持つ断面方形。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切りのち高台付ける。	底面に墨書き
	79	黒色土器	碗		6.2	(3.1)	底面平坦なベタ高台。	底部は糸切り。内面は細かいヘラミガキを施す。縮文状に行う。	底部だけ残存し土型円盤状を呈す
	80	土師器	土罐	13.0		9.55	中央がやや膨らんだ呑状。	両端面は切り取ったように平坦面になる。	孔径0.6cm
S E02	81	土師器	碗		(7.4)	(3.2)	直線的に体部は延びる。底部は平坦。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切り。	内面に有機質付着。
	82	黒色土器	碗	(16.0)		(5.4)	内湾する体部で口縁部近くでやや屈曲する。端部は丸く仕上げる。	内外面ともロクロナデのちヘラミガキを施す。内面下半は縮文状を呈する。	
	83	黒色土器	碗	15.2	6.2	5.3	内湾する体部で端部は丸く仕上げる。底部はやや上かる。	内外面ともロクロナデのちヘラミガキを施す。底部は糸切り。	底面に墨書き
	84	土師器	甕	(29.0)		(4.3)	円錐的な縁部を持たない字の口縁部。端面に沈縫がある。	内外面ともにハケ整形。2種類のハケメガキがある。口縁端部付近はヨコナデ。	
既往報告書 及び ピット 出土遺物	85	須恵器	碗		(8.65)	(2.2)	内湾する体部でやや上がりぎみの底部に続く。底部はやや外へ突出する。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切り。	P 273
	86	須恵器	杯	(11.7)	(8.6)	(3.85)	直線的な体部で端部は丸くおさめる。底部は丸く仕上げる。高台は外観き。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切り。	
	87	須恵器	杯	(12.8)	(7.6)	3.65	緩やかな底基から器部は直線的に続く。端部はやや入りぎみ。器内深い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	P 33
88	須恵器	碗		(7.1)	(4.3)	内湾する体部。底部は平坦なベタ高台。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切り。	P 188	
	89	須恵器	皿	(16.15)	(13.6)	1.6	やや外反ぎみに口縁部に続き、端部は丸い。底部との接縫は不明瞭。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	P 15
90	須恵器	皿	(15.1)	(12.4)	2.0		端部は大きく外反し丸くおさめる。端部との境界は明瞭な接縫を持たず上部に延びる。底部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	P 115
91	須恵器	碗	(15.0)		(3.4)		直線的な体部からやや外反して端部へと繋ぐ。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。	P 208
92	土師器	甕	16.4		(5.3)		内湾する体部から端部に続き、縁部を持たずに縦口縁部になる。端部は厚膜している。	内面はヘラケズリ。外面と口縁部内面はハケ整形。端部はヨコナデ仕上げ。	P 9
93	土師器	碗	11.6		4.55		内湾する体部で口縁部近くでやや外反する。端部は丸く僅かに外側へ肥厚する。底は突出する。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	P 280
94	土師器	杯	(13.4)	(9.1)	3.35		直線的な体部で端部は丸く仕上げる。底部はやや上がり、器内は厚い。	内外面ともロクロナデ。底部は糸切り。	P 284
95	土師器	甕	(29.0)		(4.3)		円錐的な縁部を持たない字の口縁部。端面に沈縫がある。	内外面ともにハケ整形。2種類のハケメガキがある。口縁端部付近はヨコナデ。	
96	土師器	土罐	13.0		(4.3)		中央が膨らんだ呑状。	芯に垂いで作った状況で粘土絆の継ぎ目と成形痕が認められる。	P 15 孔径0.7cm
電気 蓄土遺物	97	須恵器	盞	(15.8)		(1.5)	内湾する体部で端部は屈曲して直立ぎみに尖っている。器内は厚い。	内外面ともロクロナデ。天井部はヘラ切りのちナデ仕上げ。	内面擦痕 転用痕？つまみ欠損
	98	須恵器	盞	(15.5)		(1.9)	尖端部は比較的平坦で縁部を持つ緩やかに屈曲する体部からやや内側を持つ端部に続く。	内外面ともロクロナデ。天井部はヘラ切りのちナデ仕上げ。	
	99	須恵器	盞	(19.8)		(1.6)	天井部から緩やかに屈曲してやや器内が厚めの口縁部に続く。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。天井部はヘラケズリ。	
	100	須恵器	盞	(19.0)		(1.95)	内湾する天井部から体部に後縫を持たず接する。口縁部は激しく屈曲し、端部は尖る。	内外面ともロクロナデ。天井部はヘラ切りのちナデ仕上げ。	

法量の()は復原径・残存高

遺構名 層位名	種別	器種	法量(cm)				形態的特徴	技 法	備 考	
			口径	腹径	高径	器高				
裏毛層 出土遺物	101	須恵器	壺	(30.8)			(3.35)	直線的な体部で口縁部手前で僅かに瘤状に膨らむ。瘤部は折り御先は尖る。	内外面ともロクロナデ。上面はナデ仕上げ。	並み者しい。
	102	須恵器	皿	13.4	10.1	2.1		直線的な体部で瘤部はやや尖りぎみに丸くおさまる。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ調整。	
	103	須恵器	杯	(13.3)	(8.6)	3.5		内側する体部から口縁に接く。端部は尖りぎみ。底部はやや不安定。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	
	104	須恵器	杯	(13.0)	(9.0)	4.7		内側する体部から尖りぎみの口縁部が最も膨らむ。底は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部横幅付近を2カ所ヘラで押さえ内面盛り上がる。	復元するところか所か?
	105	須恵器	杯	(13.7)	(10.2)	4.3		内側する体部から丸くおさまる瘤部に接く。底部は大きめで脚跡厚い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ調整。	
	106	須恵器	杯	10.55	7.5	4.7		直線的な体部でそのまま端部へ続く。瘤部はやや肥厚して丸くなる。高径はやや小さめ。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	107	須恵器	杯	(12.6)	(9.0)	4.35		直線的に延びた体部が丸い瘤部へと接く。高径はやや膨らんで丸く膨らむ。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	108	須恵器	杯	(12.2)	8.85	3.6		直線的な体部で口縁部はやや反りぎみ。瘤部は丸い。底部は中央がやや膨らむ。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	109	須恵器	杯	(11.45)	(8.8)	5.3		内側し体部の中央でわざかに外方へ膨き外方膨ぎみで瘤部へ続く。瘤部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	110	須恵器	壺	(11.05)			(9.7)	瘤部な形状から直立する口縁部に接く。瘤部は円形で両面を有す。	内外面ともロクロナデ。	外面自然輪付着
裏毛層 内面窓	111	須恵器	内面窓		(1.1)			やや弧状になるが平担な底部のみ残している。端に沈痕状のものあり。	内外面ともロクロナデ。	
	112	須恵器	壺	(17.3)			(8.4)	やや内湾きみに直線的に話びる瘤部が瘤部で屈曲し、直線的に延びる。瘤部は外方へ肥厚。	内面は同心円文。外面はタキ目で、口縁部は内外面ともロクロナデ。	
	113	須恵器	壺	(16.4)			(5.65)	直線的に下反から延び肩部で緩やかに屈曲。S字状になり瘤部へ接く。瘤部は角張る。	内外面ともロクロナデ。	
	114	須恵器	壺	(13.0)	(9.0)	4.7		内側する体部から尖りぎみの口縁部が最も膨らむ。底は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部横幅付近を2カ所ヘラで押さえ内面盛り上がる。	復元するところか所か?
	115	須恵器	壺	(13.7)	(10.2)	4.3		内側する体部から尖りぎみに丸くおさまる瘤部に接く。底部は大きめで脚跡厚い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ調整。	
	116	土師器	杯	12.2	8.3	2.9		直線的な体部で瘤部は尖りぎみに丸い。底部はやや上がるが平底。	内外面ともロクロナデ。底部は条切りのちナデ。	口縁部保付着(灯明)完形
	117	土師器	杯	(13.2)	(9.8)	3.7		直線的に延び口縁部は肥厚し丸くおさまる。底部は丸くなっている。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	118	土師器	杯	(12.95)	(9.4)	3.35		直線的な体部で(瘤部はやや外へ反りぎみで尖っている。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	
	119	土師器	杯	(10.2)			(1.45)	瘤部部分を面取りして、体部に嵌らん底部。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りのちナデ。	墨書(?)あり
	120	土師器 ミニチュア	体	(5.6)			(2.95)	内面底部の棱線明顯。	手捏ね内面はヘラケズリ。外はユビ成形のち簾單に調整。	
包含層	121	土師器	壺	(21.2)			(6.6)	瘤部は直線的で瘤部から外反し瘤部は大きく上方へつまみ上げている。内面棱線明顯。	内面ヘラケズリ。外はハケ整形。口縁部はヨコナデ。内面には僅かにハケ整形残る。	
	122	土師器	壺	(21.4)			(11.6)	やや内湾きみに瘤部に延び外反して口縁部に接く。器肉薄い。瘤部は上方へつまみ上げる。	内面ヘラケズリ。外はハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
	123	土師器	壺	(21.2)			(17.2)	ゆるやかな弧状の瘤部で凹凸がある。瘤部から外反し、瘤部はやや角張りぎみ。	内面は細かいハケ成形したのち細かいハケ整形。外と口縁部内面もハケ整形。	
	124	土師器	壺				(9.7)	本体と鶴の接合部分、直線的に延びる。底は粘土を厚く帽を広げ安定を図る。	内面は段方向のハケケズリ。外は2種類のナデが施される。鶴の接合箇所跡。	放置に黒蓋あり。
	125	須恵器	杯口身	(11.2)			(3.2)	口縁部の立ち上がりは複い。	体部は回転ナデ成形、底部外面はヘラケズリ。	
	126	須恵器	杯口身	12.3			(4.65)	立ち上がりは短く、外反する。	体部は回転ナデ成形、底部外面はヘラケズリ。	

法量の()は復原径・残存高

造機名 部位名	種別	器種	法量(cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口徑	壁厚	底径	高さ			
127 頸動器	杯A	12.2 ¹	8.65	4.15	体部は直線的に立ち上がり、口縫端部は直立する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
128 頸動器	杯A	(12.65)	(8.2)	2.65	体部は斜めに立ち上がり、二条の沈縫を施す。口縫端部は外反気味。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
129 頸動器	杯A	(12.7)	(10.4)	3.35	体部は直線的に立ち上がり、口縫端部は軽く外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
130 頸動器	杯A	13.0	10.35	3.3	体部は直線的に立ち上がり、口縫端部はわずかに外反して内側に面を持つ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
131 頸動器	杯A	13.2	6.65	4.0	体部は斜めに立ち上がり、口縫端部はわずかに外反して内側に面を持つ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
132 頸動器	杯A	(13.7)	9.95	3.75	体部は内縫気味に立ち上がり、口縫端部はわずかに外反して内側に面を持つ。底部は丸みを帯びる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
133 頸動器	杯A	15.1	9.65	4.2	体部は内縫気味に立ち上がり、口縫端部はわずかに外反して内側に面を持つ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
134 頸動器	杯A	(13.6)	(10.1)	4.2	体部は内縫気味に立ち上がり、口縫端部はわずかに外反する。	体部はロクロナデ、底部外面は不定方向のヘラケズリ。			
135 頸動器	杯A	(14.0)	9.0	3.45	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
136 頸動器	杯A	14.4	9.65	4.3	体部は内縫気味に立ち上がり、口縫端部はわずかに外反して内側に面を持つ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
137 頸動器	杯A	13.5	9.8	3.65	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
138 頸動器	杯A	13.9	9.35	3.9	体部は斜めに立ち上がり、口縫端部はわずかに外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
139 頸動器	杯A	14.5	8.4	4.3	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
140 頸動器	杯A	(13.8)	(8.0)	3.75	体部は斜めに立ち上がり、口縫端部はわずかに外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
141 頸動器	杯A	(13.25)	(7.25)	4.1	体部は内縫気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
142 頸動器	杯A	(13.2)	(9.0)	3.3	体部は直線的に立ち上がり、口縫端部は直立する。全体に自然輪がかかる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
143 頸動器	杯A	(13.2)	(7.0)	4.25	体部は内縫気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
144 成熟器	杯A	13.5	8.8	3.9	体部は内縫気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
145 頸動器	杯A	(13.7)	(7.5)	3.9	体部は内縫気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
146 頸動器	杯A	12.65	8.65	2.85	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
147 頸動器	杯A	13.7	9.0	3.3	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
148 頸動器	杯A	(14.4)	(8.75)	3.65	体部は斜めに立ち上がる。底部と体部の境間に段がある。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
149 頸動器	杯A	(13.6)	(9.7)	3.95	体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
150 頸動器	杯A	(14.1)	9.35	3.65	体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。			
151 頸動器	杯A	(13.8)	(9.0)	3.35	体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
152 頸動器	杯A	(13.7)	(7.4)	3.6	体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
153 頸動器	杯A	(13.7)	(9.0)	3.35	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			
154 頸動器	杯A	(13.2)	8.5	3.35	体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。			

法量の()は復原後・残存高

遺物名 部位名	種別	器種	法 量(cm)			形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径	器高		
155 頸窓器 杯A		杯A	(4.9)		(9.9)	3.55	体部は斜めに立ち上がり、口縁端部はかすかに外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。
156 頸窓器 杯A		杯A			(7.4)	(2.1)		ヘラキリの後、ナデ。墨書き?
157 頸窓器 杯A		杯A					体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。	唐付蓋
158 頸窓器 皿A	(12.4)		(10.5)	2.2			体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
159 頸窓器 皿A	(12.9)		(10.9)	2.75			体部は外反気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
160 頸窓器 皿A	(13.7)		(11.5)	1.8			体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
161 頸窓器 皿A	(13.2)		(10.8)	1.8			体部は外反気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
162 頸窓器 皿A	(12.9)		(9.65)	2.4			体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
163 頸窓器 皿A	(14.5)		(12.0)	2.1			体部は斜めに立ち上がり、体部と底部の境界に段を持つ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリ。
164 頸窓器 皿A	14.2		12.7	2.35			体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
165 頸窓器 皿A	(14.7)		(12.0)	1.9			体部は直線的に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
166 頸窓器 皿A	(14.45)		(11.95)				体部は外反気味に立ち上がる。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
167 頸窓器 皿A	(17.2)		14.5	1.75			体部は直線的に立ち上がり、口縁端部内側に段を持つ。底部は内面に向かってたわむ。	体部はロクロナデ、底部外面はヘラキリの後ナデ。
168 頸窓器 蓋	(20.4)			(3.1)			天井部は平底で、体部との境に沈線を施す。カエリはかなり弱い。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。
169 頸窓器 蓋	(20.1)			(3.4)			天井部は丸みを帯び、カエリは内傾し、口縁より突出する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。
170 頸窓器 蓋	(14.9)			(2.8)			天井部は丸みを帯び、口縁端部は内側に肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。
171 頸窓器 蓋	14.5			3.5			天井部は丸みを帯び、平たい宝珠上のつまみを持つ。口縁端部は下方に若干肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。
172 頸窓器 蓋	12.9			(2.2)			天井部は平底で、つまみの痕跡がある。口縁端部は外側に直を持ち、下方に肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。内面に重ね焼きの痕跡がある
173 頸窓器 蓋	14.45			(2.25)			天井部は平底で、つまみの痕跡がある。口縁端部は外側に直を持ち、下方に肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。
174 頸窓器 蓋	14.9			3.0			天井部は丸みを帯び、平たい宝珠上のつまみを持つ。口縁端部は下方に若干肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。墨書き「絹」
175 頸窓器 蓋	(13.2)			3.0			天井部は平底で、平たい宝珠上のつまみを持つ。口縁端部は下方に若干肥厚する。内面に自然焼付着。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。
176 頸窓器 蓋	(14.7)			2.5			天井部は平底で、平たい宝珠上のつまみを持つ。口縁端部は下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。
177 頸窓器 蓋	(15.4)			(2.95)			天井部は平底で、体部との境に沈線を施す。口縁端部は軽く屈曲し、下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。
178 頸窓器 蓋	(18.6)			(2.45)			天井部は平底で、体部との境に沈線を施す。口縁端部は軽く屈曲し、下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。
179 頸窓器 蓋	(19.7)			(3.4)			天井部は丸みを帯び、つまみの痕跡がある。口縁端部は軽く屈曲し、下方に肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他はロクロナデ。

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 層位名	種別	器種	法 量 (cm)			形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹深	底径			
180 頸部器 盖 19.05				3.75		天井部は平坦で、宝珠つまみを持つ口縁部は外側に面を持ち、内側に凹がある。	天井部の内外面はナデを施し、口縁部はロクロナデ。	
181 頸部器 盖 (15.4)				(3.9)		天井部は大きくなつて、つまみの痕跡がある。口縁端部は内側に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。	墨書「？」
182 頸部器 盖 (19.6)				(3.9)		天井部は平坦。口縁端部は外側に面を持ち、下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ。他はロクロナデ。	
183 氣泡器 盖 (20.7)				(3.15)		天井部は平坦でつまみの痕跡がある。口縁端部は内側に面を持ち、下方に肥厚する。天井部に自然な凹がある。	天井部は軸のため不明、体部はロクロナデ。	内底に重ね焼きの痕跡
184 氣泡器 盖 (11.0)				1.8		天井部は平坦。口縁端部は軽く屈曲し、下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ、他はロクロナデ。	
185 頸部器 盖 (15.5)				(2.25)		天井部は平坦。口縁端部は軽く屈曲し、下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。	
186 頸部器 盖 (17.6)				(2.25)		天井部は平坦でつまみの痕跡。口縁部は屈曲し、端部は下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。	
187 頸部器 盖 (17.6)				(2.25)		天井部は平坦でつまみの痕跡。口縁部は屈曲し、端部は下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ後ナデ、他はロクロナデ。	
188 頸部器 盖 (20.8)				(3.3)		天井部は平坦でつまみの痕跡。口縁部は屈曲し、端部は下方に肥厚する。	天井部外面はヘラキリ、他はロクロナデ。	転用現
189 頸部器 体B身 11.5			6.2	4.4		体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
190 頸部器 体B身 (11.8)			(8.1)	4.8		体部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
191 頸部器 体B身 (12.7)			(8.6)	4.7		体部は直線的に立ち上がる。高台はやや外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
192 頸部器 体B身 (12.8)			(7.8)	3.15		体部は直線的に開き、高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ。	転用現？
193 頸部器 体B身 (12.5)			(8.35)	3.4		体部は直線的に開き、高台は内側に付き、外に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	転用現？
194 頸部器 体B身 (13.1)			(8.6)	3.6		体部は直線的に開き、高台は内脣気味に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	墨書「？」
195 頸部器 体B身 13.2			9.2	3.2		体部は直線的に開き、高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
196 頸部器 体B身 (12.4)			9.15	9.55		体部は直線的に開き、高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
197 頸部器 体B身 (13.2)			(9.55)	3.45		体部は直線的に開き、端部は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
198 頸部器 体B身 (13.2)			(9.55)	3.45		体部は直線的に開き、端部はやや外反する。高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
199 頸部器 体B身 (13.25)			(9.3)	4.0		体部は直線的に開き、端部はやや外反する。高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
200 頸部器 体B身 (14.1)			(10.55)	4.25		体部は直線的に開き、端部はやや外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
201 頸部器 体B身 (13.55)			(10.75)	3.75		体部は直線的に開き、高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	墨書「？」転用現か
202 頸部器 体B身 12.0			6.6	4.1		底部と体部の境界は緩慢で、口縁部はわずかに外反する。高台は内脣気味に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
203 頸部器 体B身 (12.1)			(8.7)	3.75		体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部は外反する。高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ。	
204 頸部器 体B身								
205 頸部器 体B身 (12.4)			(9.1)	3.7		体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部は丸みを帯び、高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 部位名	種別	器種	法量(cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径	高さ			
包合器	須恵器	杯B身	(14.9)		(9.0)	5.75	体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は内壁気味に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	墨書「寺」
	須恵器	杯B身	12.7		(9.15)	3.95	体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は内壁気味に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	転用鏡か
	須恵器	杯B身	12.45		7.35	5.15	体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身	(13.95)		(9.1)	5.15	体部は直線的に立ち上がる。高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身	(15.4)		10.75	4.25	体部は内壁気味に立ち上がり、口縁は外反する。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身	(13.9)		9.3	5.6	体部は直線的に立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身	(14.35)		(9.6)	5.1	体部は直線的に開き、高台は直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(11.2)	(2.3)	高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	墨書「猪」
	須恵器	杯B身			(8.9)	(1.2)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	第9書「?」、転用鏡か
	須恵器	杯B身				(1.2)		体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	第9書「?」、転用鏡か
	須恵器	杯B身			(7.7)	(2.45)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	高台内部に墨書き、転用鏡
	須恵器	杯B身			(9.4)	(2.3)	高台は短く、直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	漆付着
	須恵器	杯B身			(9.4)	(2.4)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(10.9)	(3.0)	高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	転用鏡か
	須恵器	杯B身			(9.1)	(3.9)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			12.4	(3.65)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			10.7	(5.0)	高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	転用鏡か
	須恵器	杯B身			(14.35)	(9.6)	体部は直線的に立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(17.4)	(12.4)	体部は直線的に立ち上がり、縁部は薄く終わる。高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(16.8)	(11.1)	体部は直線的に立ち上がり、わずかに外縁に踏ん張る。	体部はロクロナデ。	
	須恵器	杯D身			(18.0)	(12.6)	体部は直線的に立ち上がり、縁部は薄く終わる。高台は短く、直立する。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	内面に漆付着。
	須恵器	杯B身			(16.8)	(10.2)	体部は直線的に立ち上がり、縁部はわずかに外反する。高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(18.8)	(9.55)	体部は直線的に開き、底部との境は不明瞭。高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	杯B身			(21.2)	(12.0)	体部は直線的に開く。高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	皿B			(22.8)	(17.8)	体部は直線的に開く。高台は短く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリ後、ナデ。	
	須恵器	皿B			(27.9)	(20.2)	体部は内壁気味に開き、底部も丸みを帯びる。高台は大きく、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ後、ナデ。	9世紀代
	須恵器	皿B			6.9	(4.35)	体部は内壁気味で、よく長い高台がつく。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ後、ナデ。	9世紀代
	須恵器	皿B			6.35	(2.6)	体部は内壁気味で、太く短い高台がつく。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ後、ナデ。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 層位名	種別	器種	法 量 (cm)			形態の特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径			
234 領巻器	杯舟			7.3	(2.35)	体部は内唇気味で、太く低い高台がつく。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ後、ナデ。	9世紀代
235 領巻器	瓶	(15.1)		7.0	6.75	平坦な底部から体部が内脣して立ち上がり、口縁部は外反する。高台は太く、直立する。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
236 領巻器	瓶							
237 領巻器	瓶	(16.0)	7.05	5.4		薄く平坦な底部から、体部は内唇気味に立ち上がる。平高台である。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
238 領巻器	瓶			5.9	(2.2)	平坦な底部から、体部は内唇気味に立ち上がり、高台は太く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
239 領巻器	瓶			(5.75)	(1.8)	平坦な底部に平高台が付く。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。墨痕	
240 領巻器	瓶			4.8	(2.6)	平坦な底部に平高台が付く。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
241 領巻器	瓶			5.7	(2.5)	平坦な底部に平高台が付く。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
242 領巻器	瓶			5.85	(2.8)	平坦な底部に平高台が付く。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
243 領巻器	瓶			4.75	(3.1)	体部は内唇気味に立ち上がる。平高台である。	体部はロクロナデ、底部はイトキリ。	
244 領巻器	袋輪蓋				(1.85)	平坦な天井部にリング状のつまみが付く。	ロクロナデ。	
245 領巻器	袋輪蓋				(1.9)	平坦な天井部にリング状のつまみが付く。つまみ端部は外反する。	ロクロナデ。	
246 領巻器	袋輪蓋	(20.9)			3.7	平坦な天井部に中空のつまみが付く。体部は丸みを持ち、口縁部は左右に肥厚する。	大井部はハラキリの後ナデ、体部はロクロナデ。	
247 領巻器	袋輪	(18.0)			(5.2)	体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	ロクロナデ。	
248 領巻器	袋輪	(18.8)			(4.25)	体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	ロクロナデ。	
249 領巻器	袋輪			(3.1)	(3.0)	平坦な底盤から体部は内唇気味に立ち上がる。高台は太く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はハラキリ後、ナデ。	
250 領巻器	袋輪			(16.8)	(3.8)	体部は内唇気味に立ち上がる。口縁部は低く外反し、蓋部は上につまみあげる。体部に「糸の沈籠」を施す。	ロクロナデ。	
251 領巻器	袋輪	(15.8)		(9.1)	5.5	平坦な底盤から体部は内唇気味に立ち上がる。口縁は直し、蓋部は左右に肥厚する。高台は太く、外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はハラキリ後、ナデ。	
252 領巻器	袋輪	16.1		11.35	4.55	平坦な底盤から体部は内唇気味に立ち上がる。口縁は屈曲し、蓋部は横幅で肥厚する。高台は太く、外側に踏ん張る。体部中央に「沈籠」を施す。	体部はロクロナデ、底部はハラキリ後、ナデ。	
253 領巻器	袋輪			(10.5)	(3.6)	平坦な底盤から体部は内唇気味に立ち上がる。高台は太く、直立する。	体部はロクロナデ、底部はハラキリ後、ナデ。	
254 領巻器	袋輪	16.1		11.35	4.55	平坦な底盤から体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部は直し、蓋部は外側に面を持つ。体部に沈籠を施す。	体部はロクロナデ。	
255 領巻器	瓶	(12.85)		(5.8)	6.05	平底から内唇気味に立ち上がり、口縁部は直し、蓋部は外側に面を持つ。体部に沈籠を施す。	体部はロクロナデ、体部外側は根ナデ。	金属器写し
256 領巻器	壺	12.3	10.25		7.5	扁半なる球形の体部から口縁部は外反して開く。	底部外側はハラケズリ、体部から口縁部はロクロナデ。	
257 領巻器	壺							
258 領巻器	壺			6.3	(6.9)	平底から体部は斜めに立ち上がる。	体部はロクロナデ、体部下端はハラケズリ、底部外側はハラキリ。	
259 領巻器	壺	蓋 (11.75)			(2.5)	平坦な天井部から口縁部は屈曲して重する。蓋部は外側に段を持つ。天井部と口縁部の境界に沈籠を施す。天井部に自然軸。	ロクロナデ。	
260 領巻器	壺	蓋 (13.8)			(3.5)	平坦な天井部から口縁部は屈曲して重する。つまみの痕跡がある。全体に歪んで、開く。天井部に自然軸。	ロクロナデ。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 器物名	種別	器種	法量(cm)			形態の特徴	技 法	備 考	
			口径	腹径	底径				
包含母	264	傾窓器	壺		9.0	(5.45)	平底から体部は斜めに立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	ロクロナデ。	
	265	傾窓器	壺		10.5	(5.55)	ややたわんだ平底から体部は斜めに立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	ロクロナデ。	
	266	傾窓器	壺	(17.5)	9.35	(11.25)	ややたわんだ平底から体部は斜めに立ち上がり、肩部で锐く屈曲する。高台は外側に踏ん張る。	ロクロナデ。	
	267	傾窓器	壺		10.5	(5.55)	平底から体部は斜めに立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	ロクロナデ。	
	268	傾窓器	壺		12.95	(9.05)	ややたわんだ平底から体部は斜めに立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。	ロクロナデ。	
	269	傾窓器	壺		13.2	(13.2)	ややたわんだ平底から体部は斜めに立ち上がり、肩部で锐く屈曲する。高台は外側に踏ん張る。	体部はロクロナデ、底部はヘラキリの後ナデ。	
	270	傾窓器	壺			(7.4)	丸みを帯びた肩部の下に突帯を巡らせる。	ロクロナデ。	
	271	傾窓器	壺		(25.8)	(10.5)	腹部に2重の突帯を巡らせる。	体部はロクロナデ。	
	272	傾窓器	壺		(18.4)	13.2	(13.2)	平底から直線的に立ち上がる体部を持つ。肩は丸みを持つ。	体部は横方向の平行タキを施し、内面に当て具の痕跡がある。底部外面はナデ。
	273	傾窓器	壺	(16.2)	20.3	12.8	33.1	口縁は斜めに開き、肩部は外側に面を持つ。直線的な底盤には内側に踏ん張る高台が付き、体部は肩で鋭く屈曲して頭部に至る。	外側および底部内面に自然軸。
	274	傾窓器	鉢	(21.3)	(24.2)	(12.0)	14.05	平坦な底盤から体部は斜めに立ち上がる。口縁下に内側に屈曲し、腹部は内側に面を持ち、上方に肥厚する。	全体に横方向のナデ。
	275	傾窓器	鉢	(21.1)	(22.9)	9.25	丸い底部から内側気泡林に体部は立ち上がる。口縁は直立し、肩部は内側に面を持つ。	全体に横方向のナデ、体部下半にはヘラ状T具による仕上げ。	
	276	傾窓器	鉢	(22.0)	(23.8)	(7.2)	体部は斜めに立ち上がり、口縁下で内側に屈曲する。	ロクロナデ。	
	277	傾窓器	鉢	(20.1)	(22.2)	(9.9)	体部は斜めに立ち上がる。口縁下で内側に屈曲し、端部は内に面を持ち、上方に肥厚する。	ロクロナデ。	
	278	傾窓器	鉢	(21.9)	(25.0)	(9.45)	体部は斜めに立ち上がる。口縁下で内側に屈曲し、端部は内に面を持ち、上方に肥厚する。	ロクロナデ。	
	279	傾窓器	高杯	(13.85)	9.1	7.1	浅い碗状の柄部に、大きめ開く脚部が付く。脚部は上部に肥厚する。	杯底部外変はヘラケズリ、他はロクロナデ。	
	280	傾窓器	平瓶	(22.4)	(18.8)	(6.5)	体部は斜めに立ち上がり、肩部で鋭く屈曲する。底部は半球形で、太く短い高台が付く。	ロクロナデ。	
	281	傾窓器	円腹壺	(17.8)		(2.9)	外縁部と脚部の一部が残る。	ロクロナデ。	
	282	傾窓器	壺	(16.7)		(5.95)	頭部で鋭く屈曲し、斜めに開く口縁部を持つ。底部は上方に面を持つ。	体部は平行タキ、口縁部はヨコナデ。	
	283	傾窓器	壺	(21.2)		(9.2)	頭部で鋭く屈曲し、斜めに開く口縁部を持つ。底部は外側して面を持つ。	体部は平行タキ、口縁部はヨコナデ。	
	284	傾窓器	壺	(31.5)		(3.4)	頭部で鋭く屈曲し、外反して開く口縁部を持つ。壺部は帯状に肥厚する。	体部は平行タキ、口縁部はヨコナデ。	
	285	傾窓器	壺	(22.2)		(9.1)	頭部で鋭く屈曲し、上方に肥厚する。	体部は平行タキ、口縁部はヨコナデ。	
	286	傾窓器	壺	(19.8)		(17.6)	頭部で鋭く屈曲し、直立した後外反する。壺部は外側して面を持つ。	体部は平行タキ、口縁部はヨコナデ。	
	287	傾窓器	壺	(23.6)	(44.3)	(38.75)	頭部で鋭く屈曲し、外反して開く口縁部を持つ。壺部は上方に肥厚する。	体部は平行タキの後外面にカキ目、口縁部はヨコナデ。	

法量の()は復原径・残存高

遺物名 部位名	種別	器種	法量(cm)			形態的特徴	技 法	備 考
			口径	腹径	底径			
包含層								
285 頸壺器	甕	(20.8)	35.0		40.8	最大径が上から1/3にくる丸底の体部から、頸部で鋭く屈曲し、斜めに立ち上がるるは傾斜を持つ。端部は大きく外反し、上下に肥厚する。	体部は平行タタキの後ナデ、内面の当て其度をナデ出す。口縁部はヨコナデ。	
286 頸壺器	甕	(27.8)			(11.15)	頭部で鋭く屈曲し、外反して衝く口縁を持つ。口縁下に突唇を持ち、端部は上方に張を持つ。	体部は平行タタキ、口縁部ヨコナデ。	
287 頸壺器	甕	(35.2)			(8.0)	外反して開く口縁を持つ。端部は常に肥厚する。沈底と波状文を施す。	体部は平行タタキ、口縁部はヨコナデ。	
288 頸壺器	甕	(35.2)			(8.0)	外反して開く口縁を持つ。端部は常に肥厚し、垂下する突唇を持つ。	体部は平行タタキ、口縁部はヨコナデ。	
289 頸壺器	甕				(13.0)	平坦な底部と体部の一筋。	体部は平行タタキ、底部はナデ。	
290 頸壺器	甕	(36.2)			(8.0)	大きな肩の盛る体部から、軽く外反しで立ち上がり、内唇外味に伸びる口縁部を持つ。端部は上方に張を持つ。	口縁部外側に沈底と縱方向のカキ目、体部にはタタキの後板ナデを施す。	
291 土師器	杯	(11.8)			(2.9)	直線的に延びる体部では縁端部は丸くおさまる。	内外面ともロクロナデ。内面は斜め方向の調整痕。	化粧土塗布器書「大?」
292 土師器	杯				(9.9)	底盤と体部との接縫は不明瞭。内滑ぎみに延びる。	内外面ともロクロナデ。底盤は切れ込みの外周部のみナデで仕上げる。	化粧土塗布器書「中?」
293 土師器	杯				(0.7)	直線的に延びる。作りは粗い。	底部はヘラ切り。調整無い。外周中央に竹管文があり、他部分になく可能性あり。	器書あり
294 土師器	杯	(15.5)	(10.8)	2.6		直線的に延びた体部が口縁部近くで外反する。端部は丸くぎみに終わる。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り。	器書あり
295 土師器	杯	(11.9)	(7.0)	3.2		内滑する体部と器身厚い。口縁端部は丸く、接觸不良感。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切り。	化粧土塗布
296 土師器	杯	13.35		9.3	3.75	直線的な体部で端部はやや丸くぎみに丸くおさまる。器内はやや厚い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちヘラ調整。	化粧土塗布
297 土師器	杯	(12.65)	(9.95)	2.95		内滑ぎみの体部で口縁部近くで僅かに外反する。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ調整。底面にヘアで条線を描く?	化粧土塗布
298 土師器	杯	11.95		9.1	3.4	内滑する体部で口縁部近くで断面薄くなり、縁部近くで肥厚し丸くおさまる。底面は平滑。	内外面ともにロクロナデ。底盤は角切り。化粧土の馳りハケの痕證明粒。	化粧土塗布
299 土師器	杯	(11.7)	(10.0)	3.1		直線的な体部から丸くぎみに丸くおさまる。端部は丸く、底部との接縫不明瞭。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちヘラ調整。	
300 土師器	杯	11.8		8.7	3.05	直線的に外方へ延びる体部で底盤は丸い。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちナデ。底面崩れ。	
301 土師器	杯	12.65		9.6	3.2	直線的に延びた体部で丸い端部へと続く。端部はやや不定で中央が低く。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちヘラ調査。底面の崩れ目印跡。	
302 土師器	杯	12.25		9.3	3.1	直線的な体部から口縁部は丸くおさまる。底部は平手。	内外面ともロクロナデ。底盤は角切り。内面は仕上げナデを施す。	
303 十字器	杯	12.85		7.9	3.25	内滑ぎみに延びる体部から丸い端部へ続く。	内外面ともロクロナデ。底盤は角切りののちナデ。口縁部に墨斑あり。	化粧土塗布2次虎成
304 土師器	杯	12.35		8.9	3.15	重なる底部から直線的な体部に綻き外反する端部となる。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちヘラ調査。底盤端辺にケズリ。	化粧土塗布
305 土師器	杯	(13.35)	(10.1)	2.9		直線的な体部から口縁部近くで外反する。端部は丸く丸くぎみ。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちナデ調整。	化粧土塗布
306 土師器	杯	13.15		9.9	3.1	体部は腰やかなS字状となる。口縁部は外反ぎみで端部は丸くなる。器内はやや厚い。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちナデ調整。	
307 土師器	杯	(13.7)	(10.25)	3.3		直線的に延びる体部から口縁部近くで外反する。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののち多方向のナデ仕上げ。	化粧土塗布
308 土師器	杯	(13.4)	(9.4)	3.4		内滑ぎみの体部で口縁部は僅かに外反する。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底盤はヘラ切りののちヘラ調整。	
309 土師器	杯	(13.4)	(9.6)	3.1		内滑ぎみに延びる体部で端部は丸い。底部はやや上げ底。	内外面ともロクロナデ。底部は他より細かい角切り。	化粧土塗布

法量の（ ）は復原径・残存高

遺構名 部位名	種別	器種	法 量(cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口徑	腹徑	底徑	器高			
310	土師器	杯	12.2		9.8	3.4	直線的な体部から口縁部付近で外反する。端部は尖りぎみ。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち不定方向のナデ調整。	
311	土師器	杯	12.95		9.95	3.1	内滑ぎみに延びる体部で口縁部は外反し、端部は丸く尖りぎみになる。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちヘラで調整している。	化粧土塗布
312	土師器	杯	(13.2)		(10.15)	(3.5)	内滑ぎみに延びる体部で口縁部は外反し、端部は丸く尖りぎみになる。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち一部ケズリを施す。	化粧土塗布 底部に焼
313	土師器	杯	(13.9)		9.75	3.3	内滑する体部で器肉厚い。口縁端部は丸く僅かに外反する。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちヘラ調整。内外面はヘラミガキ調整。	化粧土塗布
314	土師器	杯	(14.3)		(10.4)	3.3	内滑ぎみに延びる体部で口縁部は外反し、端部は丸く尖りぎみになる。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ調整。	化粧土塗布
315	土師器	杯	(13.9)			(3.95)	内滑ぎみの体部で口縁部近くで内凹する。端部は丸く尖りぎみになる。	内外面ともロクロナデ。部分的に強いナデがある。底部には粗い不定方向のナデあり。	
316	土師器	杯	(11.7)		(11.2)	3.1	底部との境が不明瞭で器肉は厚い。内滑する体部で端部手前で外に開く。内面に沈線。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちヘラ調整。	化粧土塗布
317	土師器	杯	(14.1)		(10.8)	3.35	内滑する体部で端部近くで外方へつまみ出す。端部は尖る。	内外面ともロクロナデ。内面はナデ仕上げ。	
318	土師器	杯	(15.0)		(11.0)	(4.45)	内滑ぎみの体部で端部は丸くやや肥厚している。底部の器肉は厚い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切り？。内面はヘラで丁寧に磨いている。	化粧土塗布
319	土師器	杯	(14.7)		(10.4)	5.1	やや内滑する体部で口縁部付近で僅かにS字状となる。内面に凹線があり、端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。表面磨滅。	内外面に糞付着 2次焼成
320	土師器	杯	(15.9)		(11.2)	4.2	直線的な体部で口縁部にくいくど薄くなり端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ。底部下辺はケズリ。	化粧土塗布 2次焼成復元
321	土師器	杯	(15.0)		(10.6)	4.7	内滑ぎみに延びる体部で、口縁部付近で緩やかに屈曲する。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ。	化粧土塗布
322	土師器	杯	15.75		(11.95)	4.6	平底な底盤から内滑する体部へと続く。口縁部は直し端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ調整。	化粧土塗布
323	土師器	杯	(12.25)		(8.15)	3.3	直線的な体部から口縁部近くで外反する。端部は尖りぎみで丸くなる。端部に沈線。	内外面ともロクロナデ。底部は糞切り。	化粧土塗布
324	土師器	皿	(8.4)		(5.2)	1.9	体部は直線的に延び、端部付近で僅かに外反する。端部は丸く骨附やや厚い。	内外面ともロクロナデ。底部は糞切り。	
325	土師器	皿	(13.8)		(11.4)	2.2	端部やかなS字状に曲がる体部で端部は外反し丸くなる。内面に沈線を残す。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち多方向のナデ仕上げ。	
326	土師器	皿	(13.4)		(9.4)	3.4	直線的な体部で端部は丸くおさめる。端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち上げナデ。底部はヘラ切りののちナデ。	化粧土塗布
327	土師器	皿	(15.3)		(10.7)	2.6	口縁部近くで外反する体部で端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。内面は上げナデ。底部はヘラ切りののちナデ。一部ケズリ。	
328	土師器	皿	(16.7)		(13.7)	3.4	直線的な体部が切妻面に凹入り、端部は屈曲している。端部は丸く、底盤は平坦。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち不定方向のナデ調整。内面もナデ。	化粧土塗布
329	土師器	皿	(16.65)		(14.12)	2.7	直線に延びる体部で端部はやや屈曲して打ち窪し肥厚ぎみに丸くおさまる。端部は不明瞭。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りでのちにヘラで調整している。	化粧土塗布
330	土師器	皿	17.15		13.45	2.75	内滑ぎみに延びる体部で口縁部近くで緩やかなS字状となる。内面は凹線があり端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののち一部ケズリを施し全体はナデ仕上げ。	化粧土塗布
331	土師器	皿	(16.6)		(13.5)	2.5	内滑する体部で口縁部近くで外反する。端部は丸い。底部との接線不明瞭。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちヘラ調整。	化粧土塗布
332	土師器	皿			15.35	(0.7)	比較的平坦な底盤で体部の後邊は不明瞭。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ調整。内面もナデ仕上げ。	化粧土塗布
333	土師器	皿	(14.6)		(11.9)	3.0	内滑ぎみの体部で口縁部近くで外反し端部は丸い。	内外面ともロクロナデ。底部はヘラ切りののちナデ調整。底部に墨書き。	化粧土塗布 底部に墨書き

法量の（ ）は復原径・残存高

遺構名 部位名	種別	器種	法量(cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口徑	腹徑	底径	基高			
包含層	土師器	皿	(18.1)	(15.4)	2.35		底部との境界不明瞭で器肉は厚い。 直線的な体部で縁部手前で屈曲して外に拡ぐ。内に沈線。	内外面ともクロナデ。底部はヘラ切りのものちへラ調整。底部周縁はケズリ。	
	土師器	皿	17.65	15.3	2.5		内湾する体部で縁部近くで外反する。 縁部は尖りぎみに丸い。	内外面ともクロナデ。底部はヘラ切りのものちへラ調整。内面はナデ仕上げ。	
	土師器	皿	(16.5)	(14.1)	3.65		内湾ぎみの体部で縁部近くで僅かに屈曲し縁部はやや反りながら角張る。 底部との接縫不明瞭。	内外面ともクロナデ。底部はヘラ切り?表面はヘラで丁寧に磨いている。	内外面に擦付着。
	土師器	皿			2.0	(2.0)	断面方形のみ部を持つ窓で縦や かに内湾した体部。	内外面ともクロナデ。 表面磨滅。	
	土師器	皿			(10.2)	(3.3)	内湾する体部で縁部近くで内側につ まみ上げている。縁部は欠欠。高台 は外側へ踏み入る。	内外面ともクロナデ。	化粧土塗布 2次焼成 保付着
	土師器	皿	(17.0)	(11.0)	3.0		内湾ぎみに延びる体部で口縁部は上 方につまみ上げ縁部は肥厚してい る。高台も厚壁する。	内外面ともクロナデ。底部はヘラ 切りのものちナデ。体部はヘラミガキ。	化粧土塗布
	土師器	杯	(10.9)			(3.6)	底部は丸みを持ち体部は上方へ直線 的に延び縁部は外側に尖りぎみにつ まみ上げる。	内外面ともクロナデ。底部はナデ 調整。内面は暗文状のミガキ。	化粧土塗布
	土師器	鉢頭型	(11.9)			(5.0)	内湾する胴部からほぼ直立で低い口 縁部が付く。縁部は尖りぎみ。	内外面ともクロナデ。胴部内面はハケ 整形。外面もハケ整形のものちナデ仕上げ。	化粧土塗布 墨書き
	土師器	甕	(12.0)			(5.35)	内湾する胴部から直線的な口縁部に 継ぎ端部付近でやや外反する。	内面はハラケズリ。外面はハケ整形。 口縁部はヨコナデ。	
	土師器	甕	(14.7)			(5.7)	内湾する胴部から明瞭な模様を持つ 頭部から外反する口縁部に統く。端 部は薄く丸い。	内面はハラケズリのものちナデ調整。 外面はハケ整形。口縁部もハケ整形 後ヨコナデ。	
土師器	甕	甕	(13.1)			(3.0)	直線的な頭部から豆型口縁部に統 く。大きめ外へ開き沿部は上方へつ まみ上げる。	内面はハラケズリのものちナデ調整。 外面はハケ整形。口縁部はハケのちヨコナデ。	
	土師器	甕	(17.4)			(5.55)	直線的な胴部から残根を持つ頭部か ら外反する口縁部に統く。縁部は丸 い。	内面はユビ彫形のものちナデで調整。 外面はハケ整形で口縁部もハケ後ヨコナデ。	
	土師器	甕	(17.7)			(5.8)	直線的な体部から腰やかに口縁部へ と統く。器肉は厚く、縁部は丸くな る。	内面はユビ彫形のものハケ整形。外 面も同じ。口縁部は細かいハケ整形 後ヨコナデ。	
	土師器	甕	(34.1)			(11.0)	直線的な胴部から腰やかに口縁部へ と統く。外反ぎみで縁部は角張る。	内面はユビ彫形のものちハケ整形。 外面はハケ整形。口縁部もハケ整形の ものちヨコナデ。	
	土師器	甕	(22.6)			(30.5)	やや下垂れの胴部で腰やかは直線的に延 びる。口縁部は内側に統く。外反ぎみで縁部は 角張る。	内面はユビ彫形のものちハケ整形。 外面はハケ整形。口縁部もハケ整形の ものちヨコナデ。	2次焼成
	土師器	甕	(19.0)			(11.75)	内湾する頭部で縁部は皆く口 縁部は直線に延び縁部は外側に肥厚 し角張る。	内面とともハケ整形後ナデ調整を加え る。口縁部はその後ヨコナデ仕上げ。	表面磨滅
	土師器	甕	(22.6)			(34.9)	やや直線的な頭部で頭部は上方につま み上げ尖りぎみになる。	内面とともハケ整形。口縁部は直線的 なハケでヨコナデ仕上げ。	
	土師器	甕	(15.2)			(11.1)	内湾ぎみの頭部で頭部付近は器肉が 厚くなる。口縁部は外反し縁部は板 状である。	内面はハラケズリ。外面はハケ整形。 口縁部もハケ整形のものちヨコナデ。	
	土師器	甕	(20.1)			(5.3)	直線的な頭部で口縁部は僅かに内湾 ぎみの直線的で縁部は上方につま み上げ尖りぎみになる。	内面はハラケズリ。外面はハケ整形。 口縁部もハケ整形のものちヨコナデ。	
	土師器	甕	(21.45)			(7.1)	直線的な頭部で口縁部は外反し縁部は 側に押す形。角張りぎみで器肉は薄い。	内面はハラケズリ。外面はハケ整形。 口縁部はヨコナデ仕上げ。	
	土師器	甕	(22.6)			(6.95)	直線的な頭部で頭部は白い。 口縁部は外反し端部は両側に肥厚す る。口縁部は厚い。	内面はハラケズリ。外面はハケ整形後ナ デ調整。口縁部はヨコナデ仕上げ。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺構名 層位名	種別	器種	法量(cm)			形態的特徴	技 法	備 考
			口径	腹徑	底徑			
355	土器器	甕	(33.0)		(6.6)	直線的な胴部で弱い棱縫を持つ頸部へ続き、外反する口縁部となる。端部は上方へ尖る。	内面はヘラケズリ。外面は瓶方向のハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	表面磨滅
356	土器器	甕	(33.2)		(7.3)	内湾する胴部から甘い棱縫の頸部となり外反する口縁部となり端部は上方へつまみ上げる。	内面はヘラケズリのちハケ整形。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	口縁部歪。
357	土器器	甕	(31.0)		(5.6)	内湾ぎみに延びる胴部でシャープな胴部から厚い底部へ外反し端部は角張る。	内面はヘラケズリ。外面は瓶方向のハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
358	土器器	甕	(31.5)		(6.1)	直線的な胴部から不明瞭な棱縫の頸部となり外反する口縁部で続く。端部は上につまみ上げ。	内面は強いヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ。	
359	土器器	甕	(31.0)		(5.6)	直線的な胴部から不明瞭な棱縫の頸部ととなり外反する口縁部で続く。端部は上につまみ上げ。	内面は強いヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ。	
360	土器器	甕	(22.05)		(10.9)	内湾する胴部から棱縫を持つ頸部から外反する口縁部となる。端部は上方へつまみ上げる。	内面はヘラケズリのちハケ整形。外面はハケ整形。口縁部もハケ整形後ヨコナデ。	
361	土器器	甕	(19.7)		(10.6)	内湾する胴部から甘い棱縫を持つ頸部から外反する口縁部で続く。端部はつまみ上げ先丸。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はハケ整形後ヨコナデ。	
362	土器器	甕	(20.4)		(4.1)	頸部は短く口縁部は外反し、端部は両側に肥厚する。器身は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はハケのちヨコナデ。	
363	土器器	甕	(20.6)		(5.4)	内湾ぎみの胴部から外反する口縁部となり、端部は両側に肥厚する。器身は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部背面はハケ整形後ヨコナデ。端部に凹溝。	
364	土器器	甕	(24.0)		(9.83)	内湾ぎみの胴部から甘い棱縫の頸部となり大きく外反する口縁部となる。端部はつまみ上げ。	内能は、ヘラケズリで外面は断続的なハケ整形。口縁部は纏かい整形後ヨコナデ。	
365	土器器	甕	(24.1)		(11.0)	内湾する胴部で頸部の棱縫は甘く口縁部は直線で端部は角張る。	内外面ともハケ整形で口縁部はヨコナデ。	
366	土器器	甕	(22.8)		(10.5)	内湾する胴部で端部の棱縫は甘く口縁部は直線に延び端部は角張る。	内面へヘラケズリのちハケ仕上げ。外面はハケ整形。	
367	土器器	甕	(24.0)		(15.3)	内湾する胴部で頸部は甘く口縁部は直線に延び端部は角張る。口縁部が極度になる。	内外面ともハケ整形後ナデ調整を加える。口縁部はその後ヨコナデ仕上げ。	
368	土器器	甕	(22.8)		(14.9)	直線的な頸部で口縁部は外反し端部は両側に肥厚する。角張りさみで器内は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
369	土器器	甕	(15.2)		(11.1)	直線的な胴部で口縁部は外反し端部は両側に肥厚する。角張りさみで器内は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
370	土器器	甕	(20.1)		(5.3)	直線的な胴部で口縁部は僅かに内湾ぎみの直線で端部は上方につまみ上げ尖り込みになる。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部もハケ整形のちヨコナデ。	
371	土器器	甕	(21.65)		(7.1)	直線的な胴部で口縁部は外反し端部は両側に肥厚する。角張りさみで器内は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
372	土器器	甕	(22.6)		(9.55)	直線的な胴部で頸部の棱縫は甘い。口縁部は外反し端部は両側に肥厚する。口縁部は厚い。	内面はヘラケズリ。外面はハケ整形後ナデ調整。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
373	土器器	甕	(23.0)		(6.6)	直線的な胴部で弱い棱縫を持つ頸部へ続き、外反する口縁部となる。端部は上方へ尖る。	内面はヘラケズリ。外面は瓶方向のハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	表面磨滅
374	土器器	甕	(23.2)		(7.3)	内湾する胴部から甘い後縫の頸部となり外反する口縁部となり端部は上方へつまみ上げする。	内面はヘラケズリのちハケ整形。外面はハケ整形。口縁部はハケ整形のちヨコナデ。	口縁部歪。
375	土器器	甕	(21.0)		(5.6)	内湾ぎみに延びる胴部でシャープな頸部から厚い口縁部は外反し端部は角張る。	内面はヘラケズリ。外面は瓶方向のハケ整形。口縁部はヨコナデ仕上げ。	

法量の（ ）は復原径・残存高

遺物名 部位名	種別	器種	法 量 (cm)				形態の特徴	技 法	備 考
			口徑	腹徑	底徑	西高			
包含層									
376	土師器	裏	(24.9)			(6.1)	直線的な肩部から不明瞭な横縫の頸部となり外反する口縁部に続く。腹部は上につまみ上げ。	内面は強いハラケズリ。外面はハケ彫形。口縁部はヨコナデ。	
377	土師器	裏	(21.0)			(5.6)			
378	土師器	裏	(22.05)			(10.9)	内溝する頸部から横縫を持つ頸部から外反する口縁部となる。頸部は上方につまみ上げる。	内面はハラケズリのちハケ彫形。外面はハケ彫形。口縁部もハケ彫形後ヨコナデ。	
379	土師器	裏	(19.7)			(10.8)	内溝する頸部から直線的な横縫を持つ頸部から外反する口縁部に続く。腹部はつまみ上げ丸い。	内面はハラケズリ。外面はハケ彫形。口縁部もハケ彫形後ヨコナデ。	
380	土師器	裏	(20.4)			(4.1)	頸部は短く口縁部は外反し、腹部は両側に肥厚し丸い。	内面はハラケズリ。外面はハケ彫形。口縁部はハケのちヨコナデ。	
381	土師器	瓶				(10.1)	内溝きみで外側へ広がっている	内外面ともハケ彫形。把手はユビ成形で接続。	
382	土師器	甕			(56.0)	(10.3)	直立する頸部で腹部は内側に尖らすようには厚めている。	内面はハラケズリで外面はハケ彫形。	
383	土師器	甕	(34.1)			(11.0)	直立する頸部で腹部は内側に尖らすようには厚めしている。	内面はハラケズリで外面はハケ彫形。	
384	土師器	甕	(22.8)			(20.5)	胸は大きめで外反する。	内面はハラケズリで外面はハケ彫形。	
385	土師器	（ニコナデ）	(5.65)			(3.6)	内溝する頸部で口縁部は折り曲げる。腹部は厚くなり丸くなっている。	手捏ね土器。内面はハラケズリのち板ナデ。外面はユビ成形のまま。	
386	土師器	（ニコナデ）				(3.6)	直線的に延び、口縁部近くで内側する。腹部はなく角張りぎみで断面三角形である。	手捏ね土器。内面はハラケズリ。外面はユビ成形のまま。	
387	土師器	（ニコナデ）	(5.8)			(3.6)	内溝する頸部から内傾する邊面を持つ断面三角形の口縁部へと続く。腹部の方は無い。	ユビ成形のち内面はハラケズリ。外面はユビで調整を粗く加える。	
388	土師器	（ニコナデ）	(5.8)			(4.3)	底座は丸底でやや歪に内溝する頸部が直線的に口縁部となる。腹部は角張る。	ユビ成形のち内面とも僅かにユビで調整を加える。内面に絞り痕。	
389	土師器	（ニコナデ）	(6.8)			(3.8)	底座は残存しないが底盤から開口して直線的な腰部により肥厚する邊部へと続く。	ユビ成形のち内面はハラケズリ。粘土紐の継ぎ目明瞭。口縁部はヨコナデ。	
390	土師器	（ニコナデ）	(6.2)			(2.3)	外力によって延びる頸部からやや内側して直線する腰部へとなる。腰部は丸い。	ユビ成形のち内面はハラケズリ。	
391	土師器	（ニコナデ）	(6.0)		(5.2)	2.9	平底から不明瞭な腰部を持って頸部へ続く。葉やかなS字状で尖った腰部になる。器内厚い。	内外面ともヨコナデ。底部にはハラケ彫形を残る。	精製土器
392	土師器	（ニコナデ）	(6.2)			(3.7)	内溝する頸部から想定する器肉の厚い腰部へと続く。腹部は外広がる方形。	内外面ともユビ成形で、内面はハラケズリ。口縁部はヨコナデ仕上げ。	
393	土師器	脚台			5.1	(3.1)	上げ底で腹部は丸く尖りぎみ。シャープな腰部から厚い口縁部は外反し腰部は内張る。	内外面ともナデで整形し、さらにナデ仕上げ。	
394	土師器	碗	13.8		5.85	4.9	やや上部の平底から内側する体部となり尖りぎみのやや内側する腰部に続く。	内外面ともにロクロナデ。外面上反は強いナデ。底盤は糸切り。	
395	土師器	碗	(16.1)	6.25		4.6	突出平底でタガ高台から直線的な体部となり、丸みを持つ腰部となる。	内外面ともロクロナデ。底盤は糸切り。	
396	黒色土器	碗			6.75	(3.8)	平底の高台から内側する体部へと続く。器肉は厚い。	内外面ともにロクロナデ。内面は丁寧なラミガキ。外面もラミガキ。底部は糸切り。	
397	綠地陶器	碗			(7.9)	(1.6)	平塗な底面に断面三角形の尖りぎみの高台を付ける。	底部は糸切り。底面は施釉せず。淡い緑色。	
398	綠地陶器	碗			(6.0)	(1.7)	わずかに上げ底の平底で周縁近くに窪みを持つ。縫縫を持って外反する体部に続く。	底面はロクロナデ。内外面はロクロナデ。重ね側の痕跡あり。濃い緑色。	
399	白磁	底部			(5.2)	(1.3)	平坦な底面から接縫を持って内側する体部に続く。	底面は施釉。	
400	黑色土器	碗	(35.95)			(5.2)	内溝する体部から口縁部近くで外反し、腹部は丸い。	内外面ともにロクロナデヘラミガキで仕上げた。口縁部に使用軋か凹凸の打痕。	

表3 土製品計測表

法量の()は復原径・残存高

No.	長さ(cm)	幅(径)(cm)		孔径(cm) 重さ(g)	No.	長さ(cm)	幅(径)(cm)		孔径(cm) 重さ(g)
		最大	最小				最大	最小	
401	3.7	1.9	1.7	0.6	415	5.7	1.9	1.85	0.5
402	3.7	1.6	1.2	0.45	416	4.95	1.85	1.85	0.6
403	4.15	1.85	1.85	0.45	417	3.85	2.3	2.2	0.4
404	5.45	2.6	2.5	0.35	418	4.0	1.38	2.05	0.45
405	4.55	2.1	1.9	0.9	419	3.58	1.05	2.45	0.5
406	3.4	1.9	1.9	0.6	420	5.2	3.45	3.05	0.5
407	4.8	2.15	2.1	0.5	421	6.7	2.7	2.0	0.5
408	3.35	1.2	1.15	0.6	422	5.9	3.0	2.8	0.5
409	3.7	1.6	1.2	0.45	423	6.5	2.95	1.85	0.6
410	4.15	1.85	1.85	0.45	424	4.5	2.3	2.2	0.4
411	4.23	1.45	1.4	0.35	425	4.25	2.1	2.05	0.45
412	4.6	1.5	1.45	0.9	426	6.4	3.3	2.45	0.5
413	4.95	1.75	1.68	0.6	427	2.0	2.6	2.2	0.5
414	4.8	2.15	2.1	0.5	428	3.7	1.9	1.7	—
									羽門

表4 鉄器計測表

遺構名 層位名	No	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態の特徴	備考
包含層	429	鍔添	8.6	5.6	1.2	胸型沖	
包含層	430	鍔	7.4	2.5	0.3	薄く、刃は直線的	
包含層	431	鍔	6.2	1.1	0.6	両刃先欠損	
包含層	432	劍	6.9	0.5	0.4	断面丸みをもつ	
包含層	433	劍	10.6	0.7	0.6	断面方形	
包含層	434	劍	7.0	0.5	0.4	曲がっている	
包含層	435	劍	4.8	0.6	0.5	断面方形	
P43	436	鑿?	8.2	1.8	0.6		

写 真 図 版



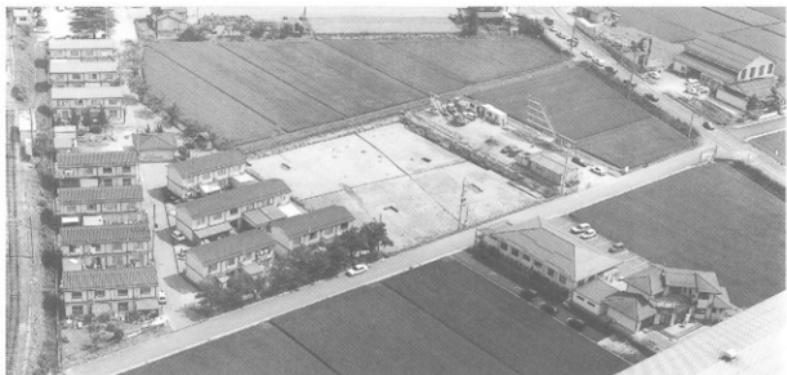
空中写真（国土地理院撮影）



但馬国府上空から見た上石遺跡と円山川方面



円山川上空から見た上石遺跡と但馬国府・但馬国分寺方面



調査区空中写真（南西上空から）



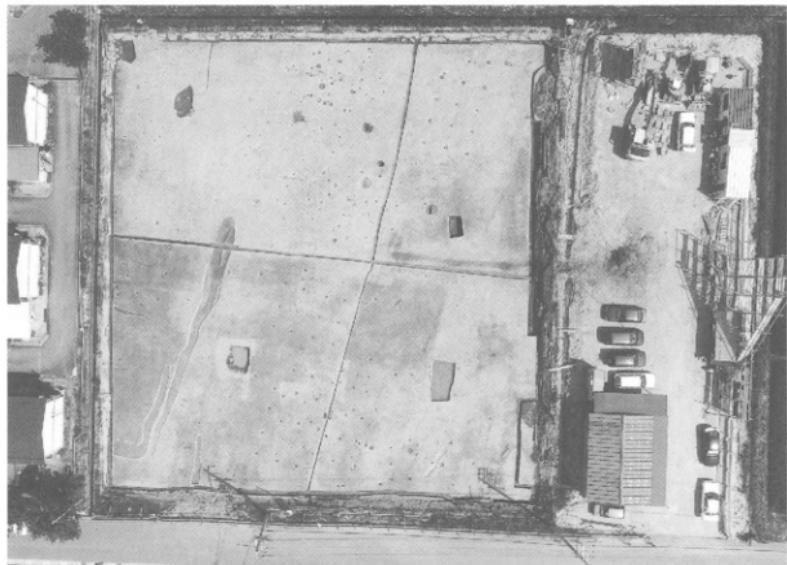
空中写真（北西上空から）



空中写真（南東上空から）



調査区空中写真（北東上空から）



調査地点 空中写真



調査区南半全景（南から）



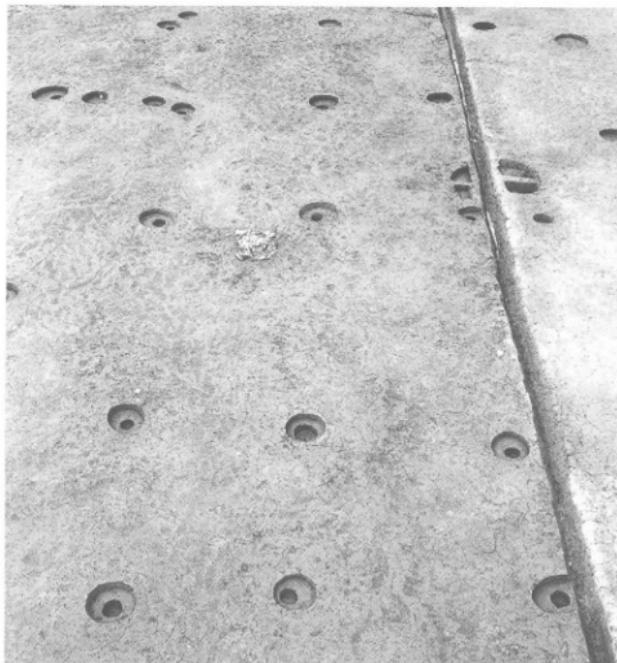
調査区北半全景（東から）



調査区全景（南から）



調査区南半全景（北東から）



S B 01 (北から)



S B 02 (北西から)



S D03～S D05とS B03 (北から)



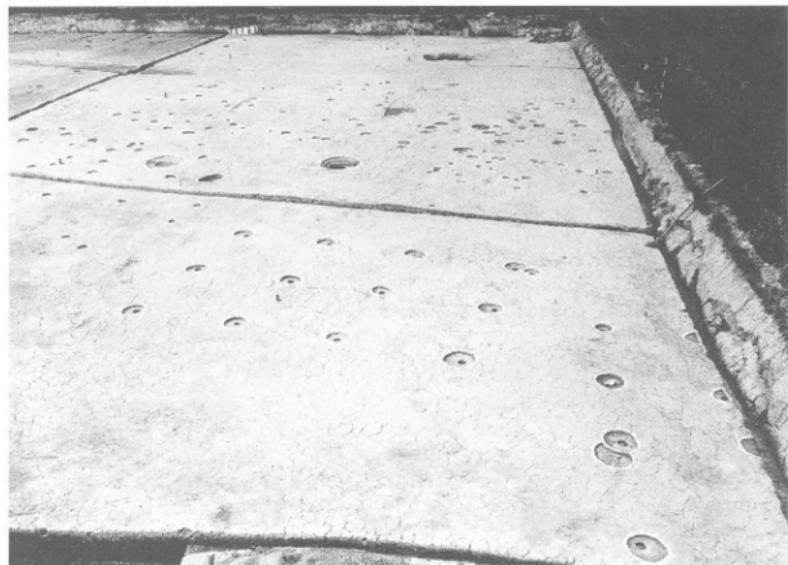
S B03 (北東から)



北東部建物群（S B 04他 南から）



S B 04（東から）



北側建物群（SB07～SB14 東から）



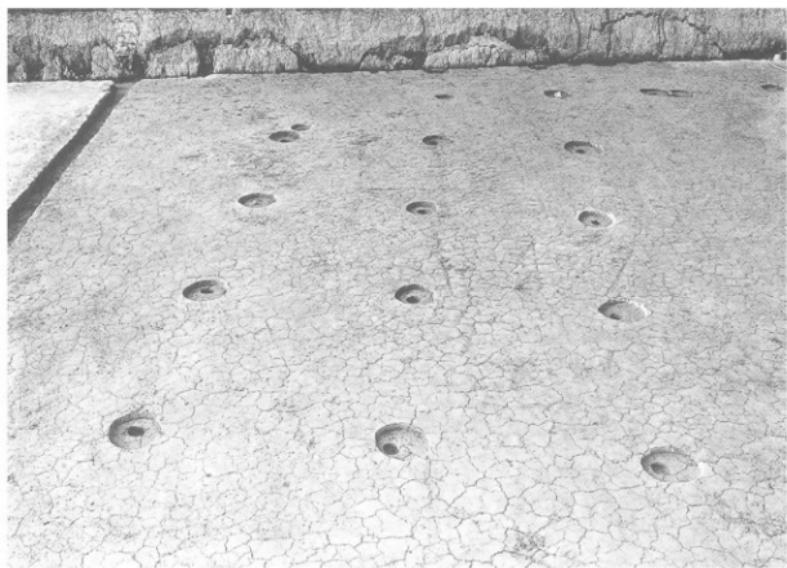
SB07（南東から）



南側建物群 (SB 04~SB 06 南から)



SB 13 (北から)



S B11 (南から)



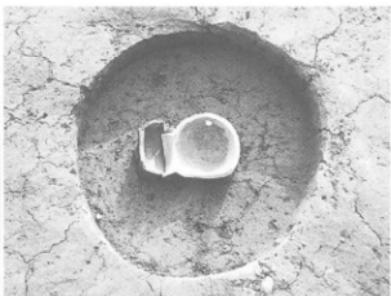
S B11・S B12 (東から)



調査区北半全景（東北東から）



S B11



S B12 P 301



S B11 P 293



S P14



SK01 磁除去後



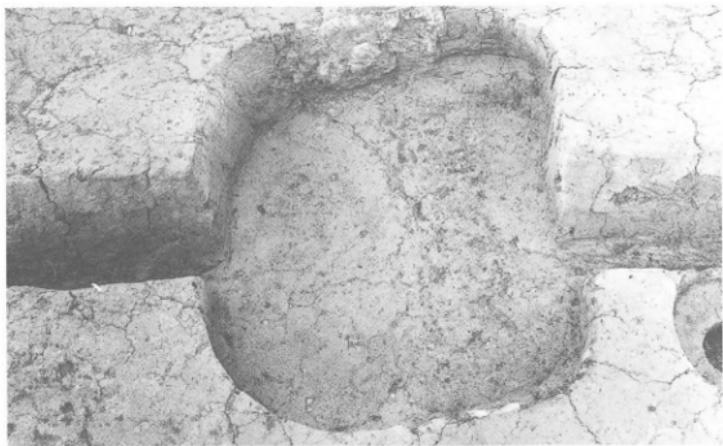
SK01 磁除去後



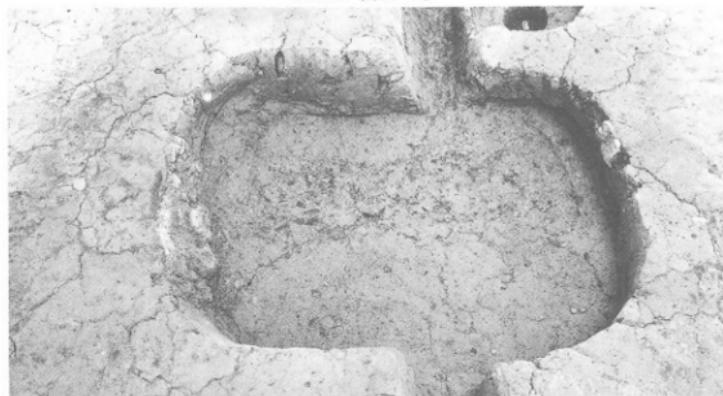
SK01



SK01



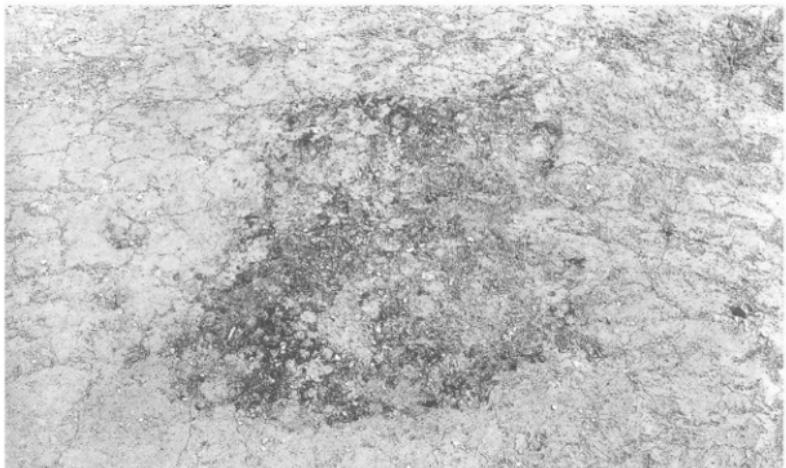
SK 02 (東から)



SK 02 (南から)



SK 02 炉壁 (東から)



S K07 (南から)



S K04



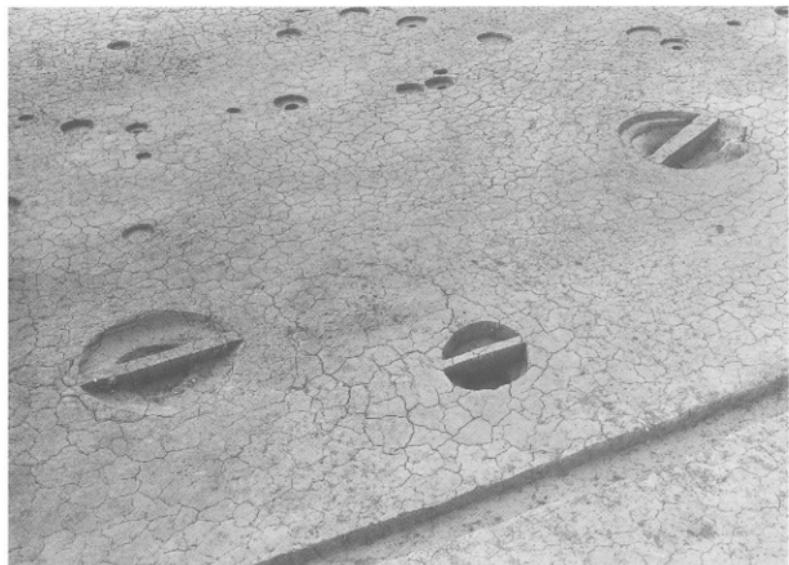
S K05



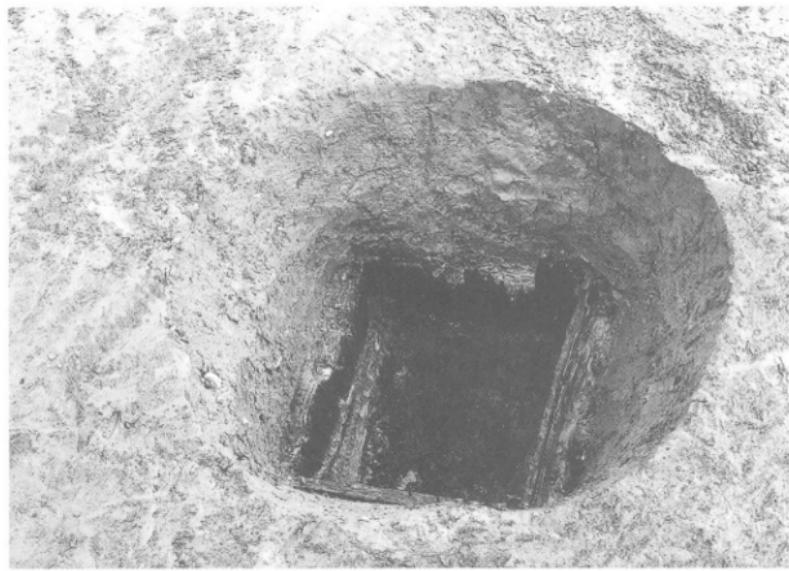
S E 01 (西から)



S E 01 遺物出土状況 (南から)



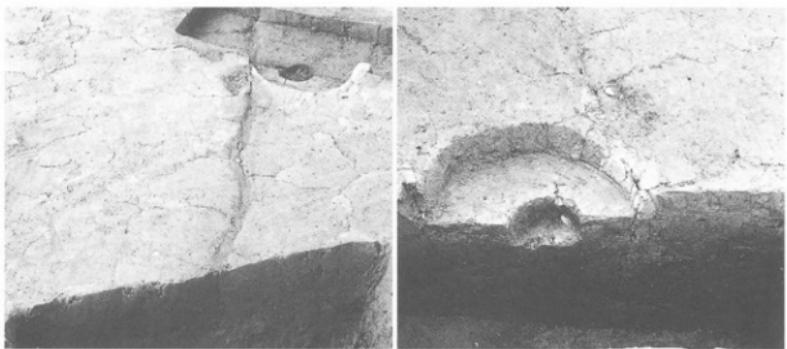
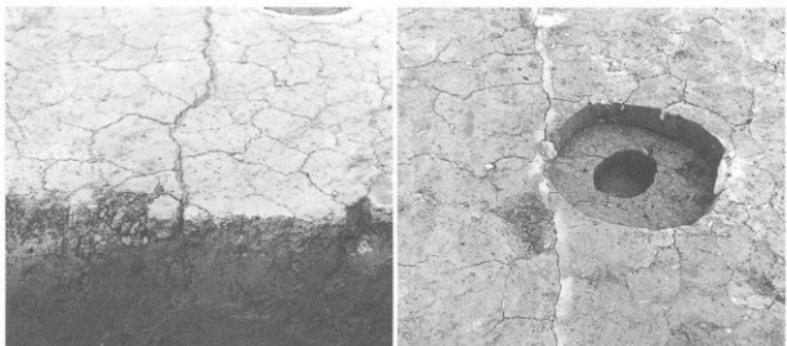
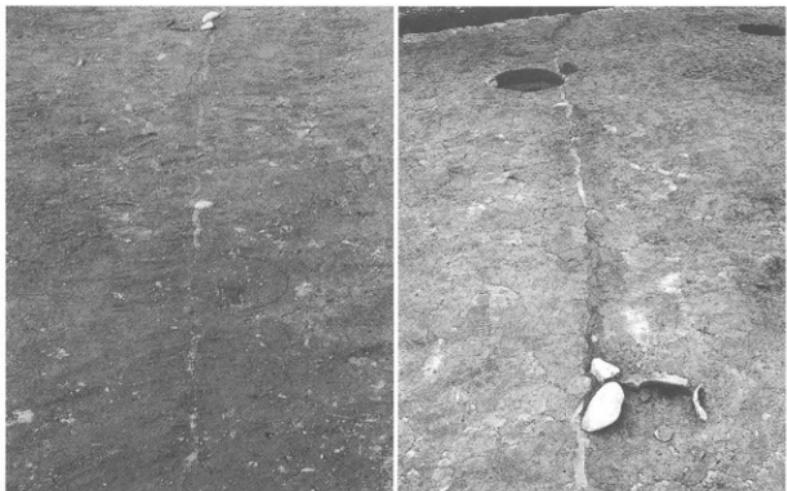
S E02・S E04・SK03 (南東から)



S E03 (北から)



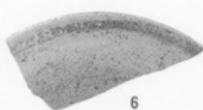
遺物出土状態



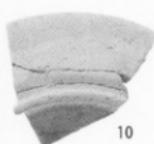
噴 砂



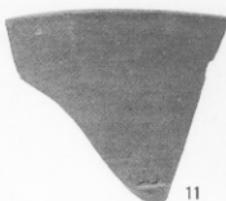
7



6



10



11



12

S B02



9



8



13



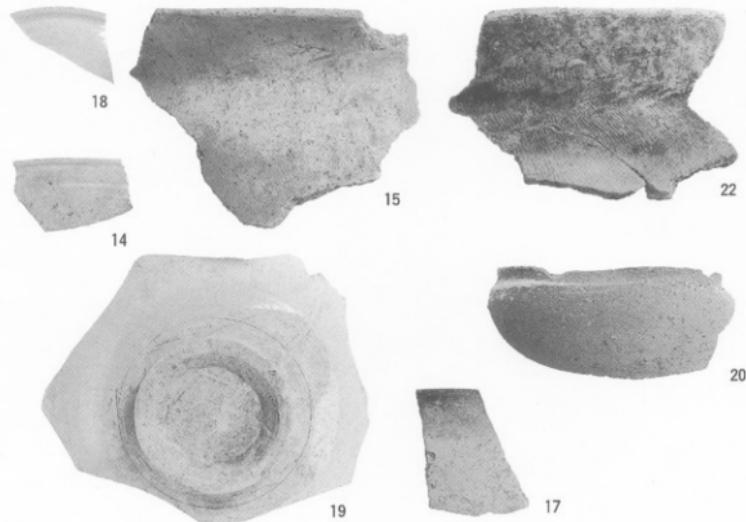
21



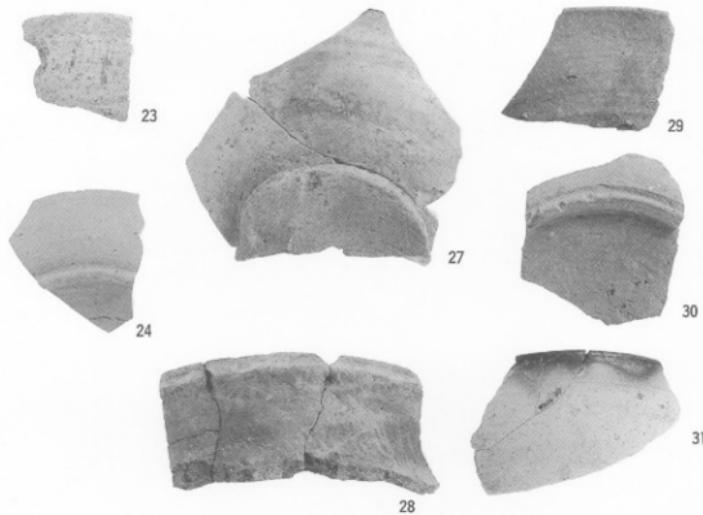
16

S B02 (8・9) S B03 (13・16・21)

掘立柱建物出土遺物 (1)



S B03 (14・15・18・19) S B04 (20・22)



S B08 (23・24・27・28) S B09 (29・30・31)



25

S B08



26



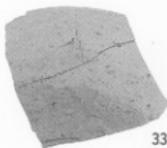
32

S B09



35

S B11



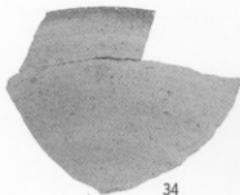
33



36



37



34



41



42

S B10 (33・34) S B12 (36・37) S B14 (41・42)

掘立柱建物出土遺物（3）



39



40



38



38



66



67



68



65



75

S K01 (65・66・67) S K02 (68) S K05 (75)

掘立柱建物出土遺物 (4) ・土坑出土遺物 (1)



43



44



43



44



45



46



45

SK01



46



47



48



47



48



49



50



49

S K01



50



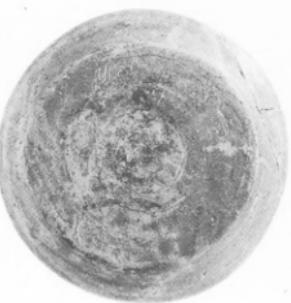
51



52



51



52



53



54



53

SK01



54



55



59



55



59



56



61



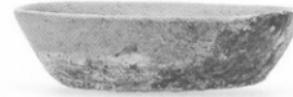
57



62



58



63



60



64

S K01



69



70



71



72



71



72

S K 04



73



74



73

S K 05 (下は出土状況の復元)

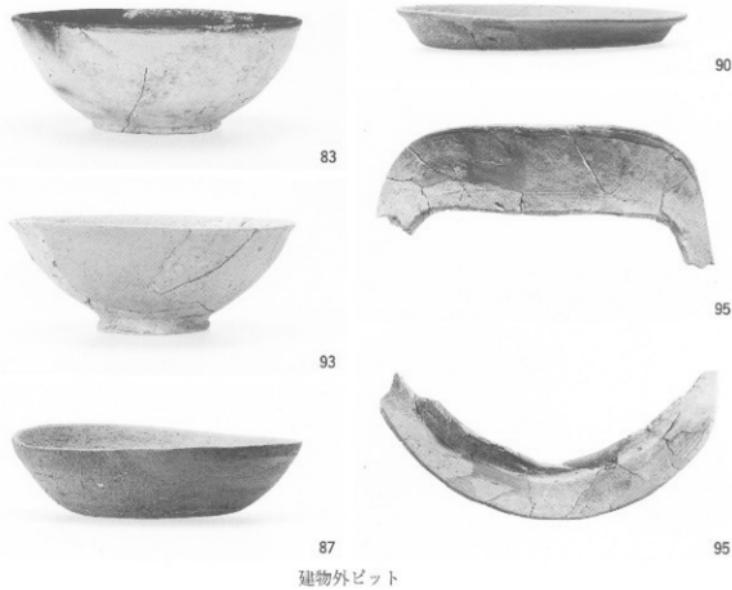
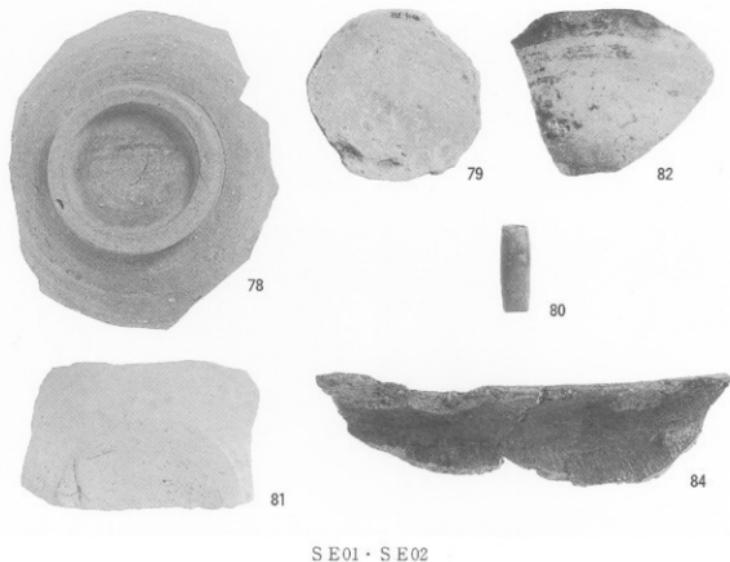


74

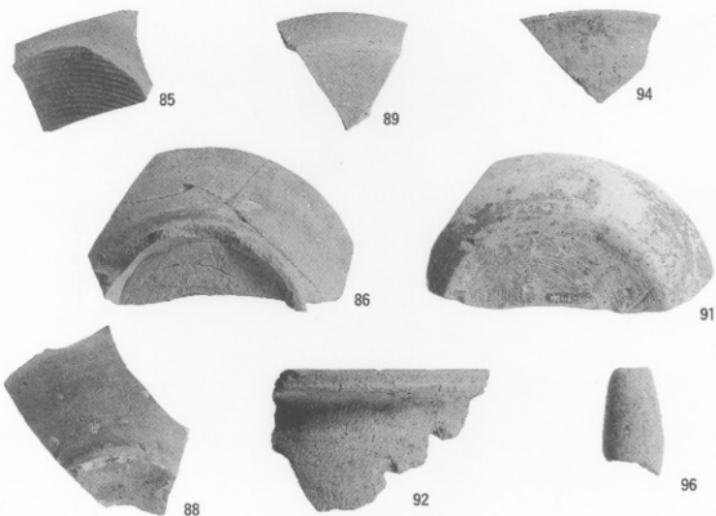


75

S K 06



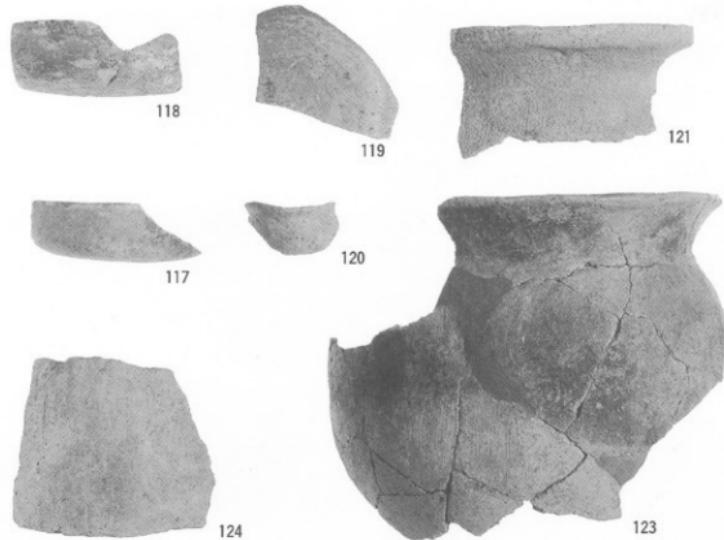
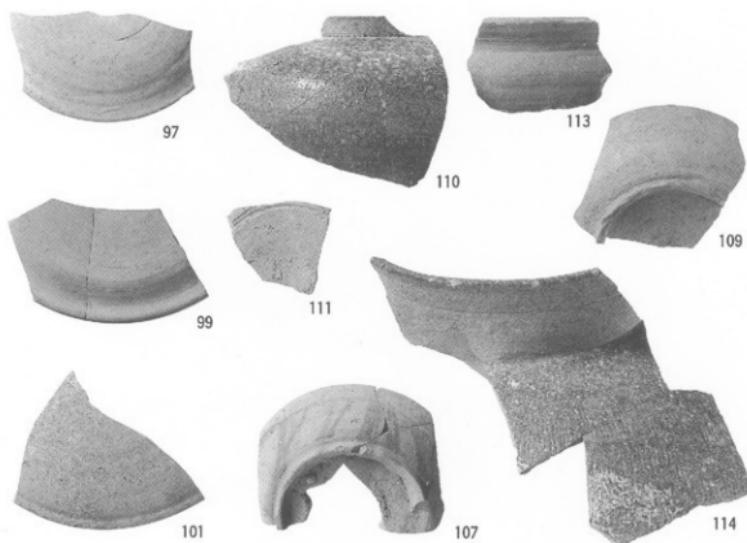
建物外ピット



建物外ピット



整地層



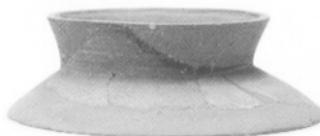
整地層



108



116



112



122



115

整地層



126



132



129



133



130



135



131

包含層



136



137



144



138



146



139



147



140



148



141



149



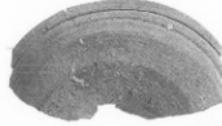
143



155



125



128



134



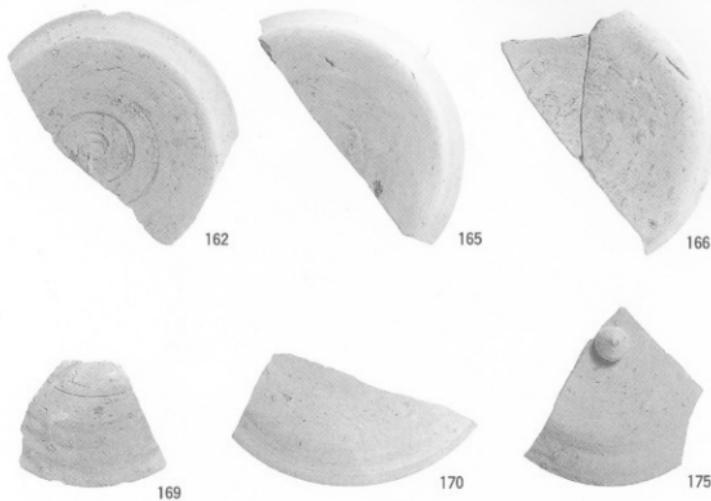
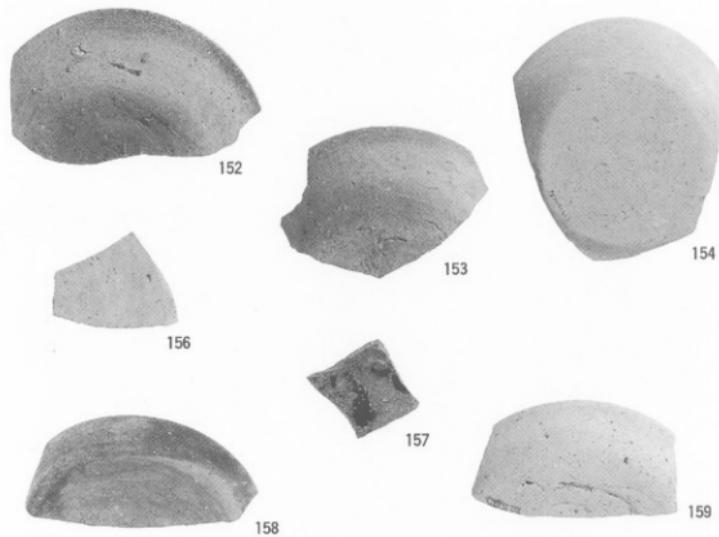
142



145



150



包含層出土遺物（3）



160



172



160



173



174



161



176



163



179



164



180



167



181



168



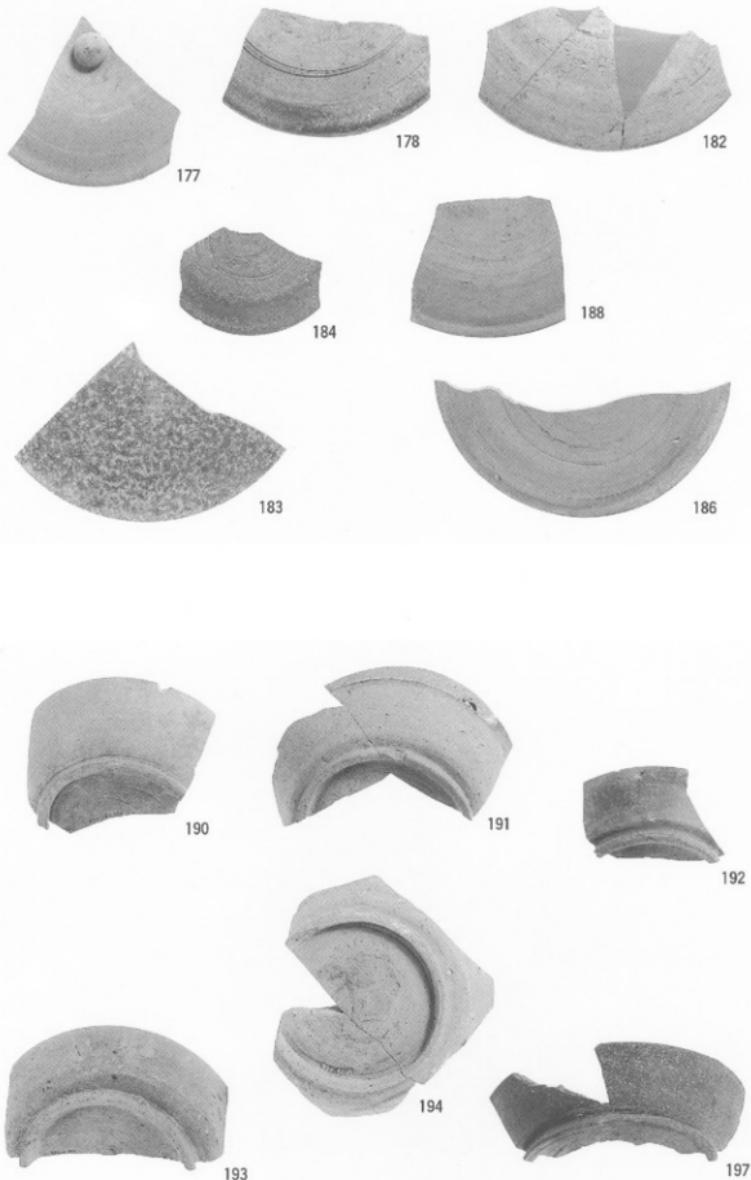
185

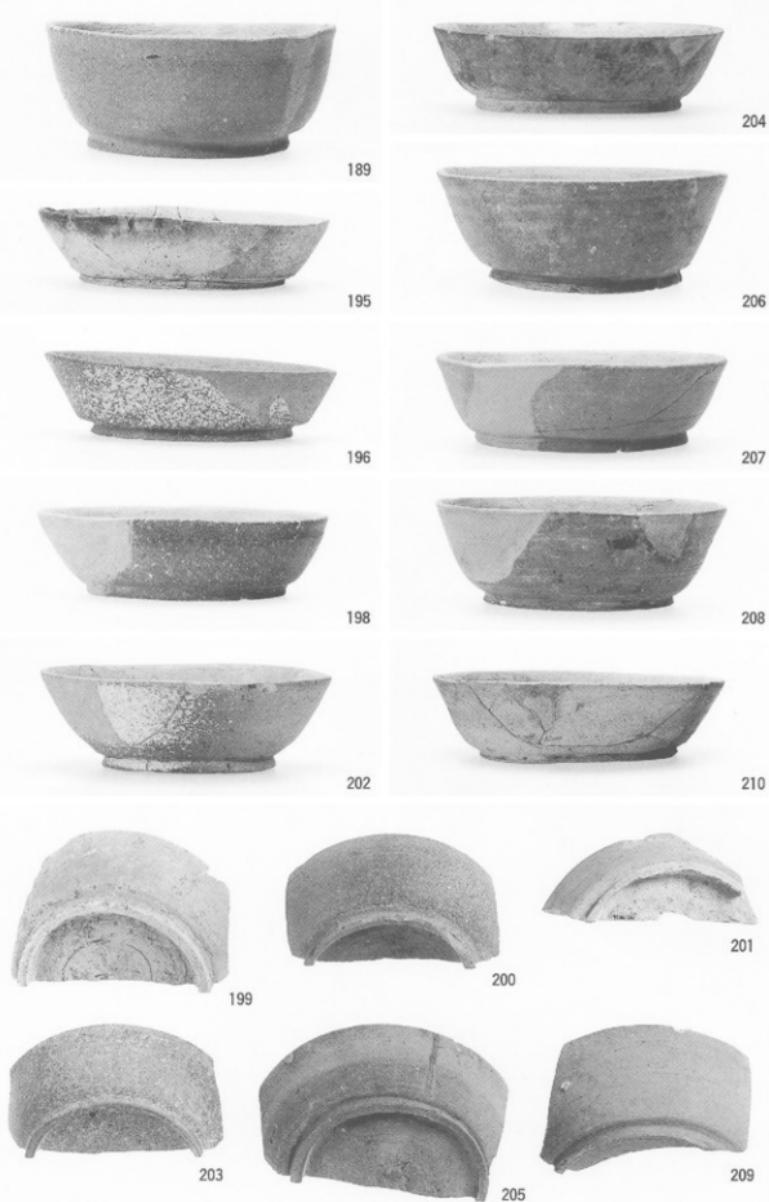


171



187







211



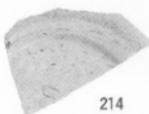
212



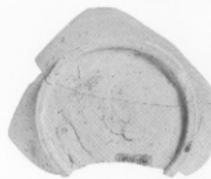
213



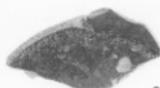
215



214



216



217



218



219



220



221



222



227



251



228



252



230



254



235



255



237



256



246



263



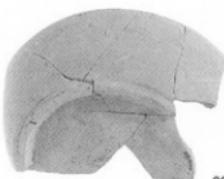
266



259



260



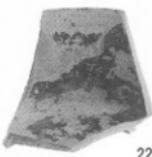
223



224



225



226



229



231



232



233



234



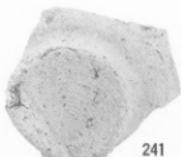
238



239



240



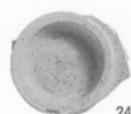
241



242



243



244



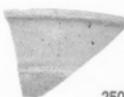
245



248



247



250



249



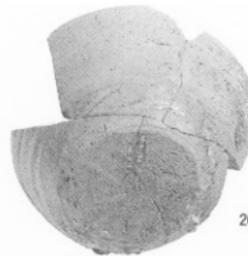
253



257



258



261



262



264



270



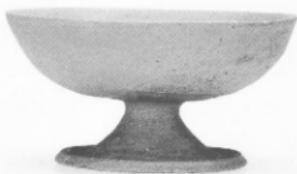
284



272



285



276



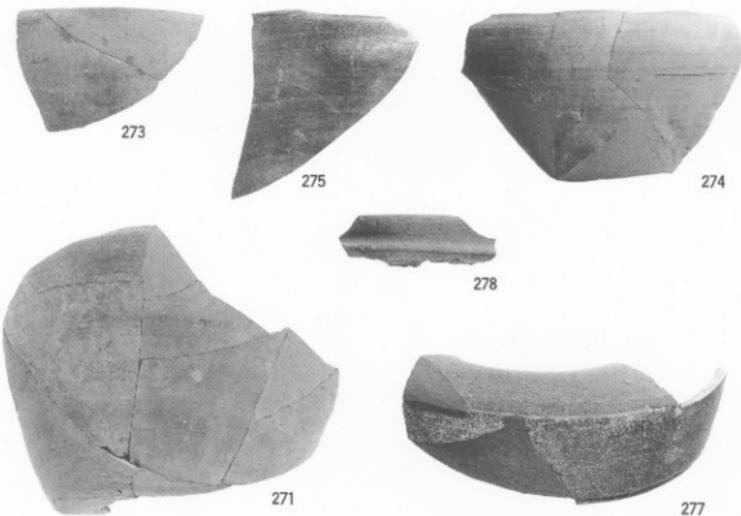
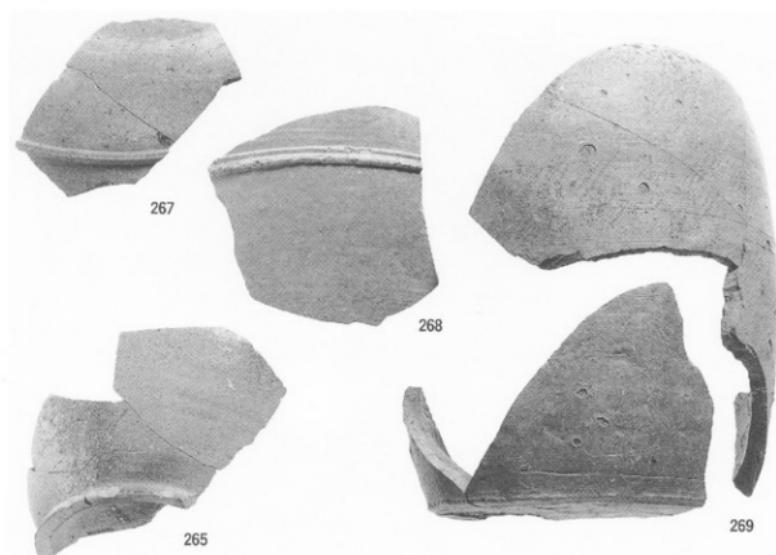
281

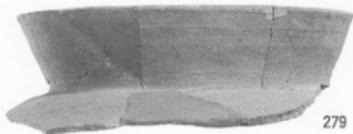


283

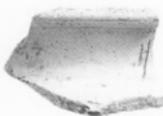


290





279



280



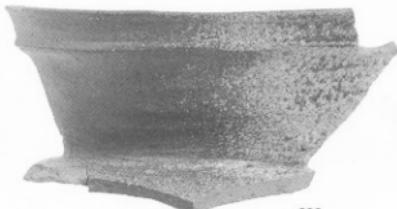
282



287



288



286



289



296



306



297



310



298



311



300



313



301



314



302



316



303



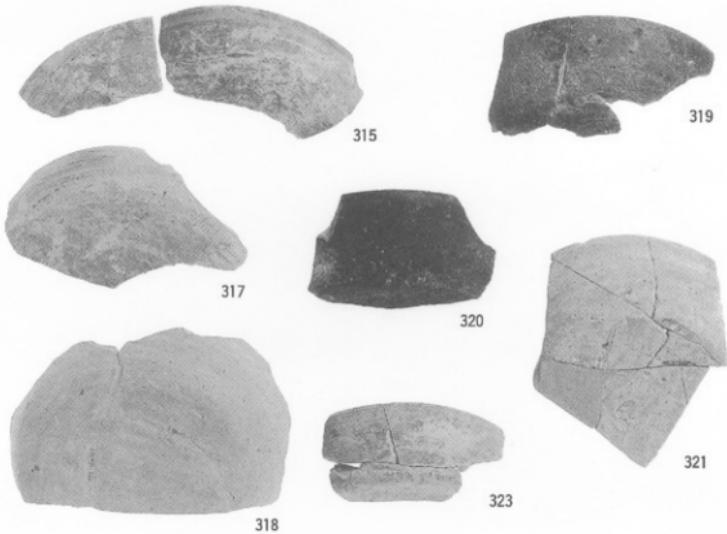
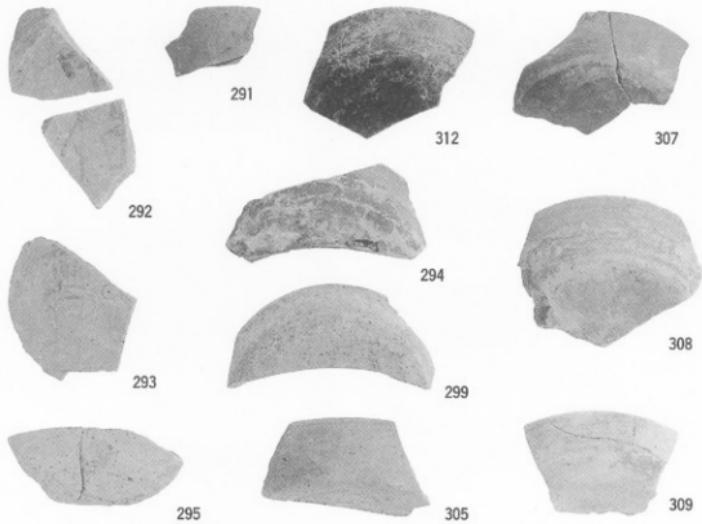
322



304

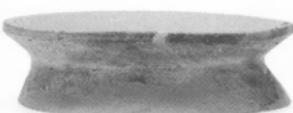


324





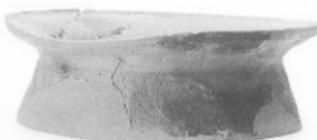
326



352



327



356



328



329



360



331



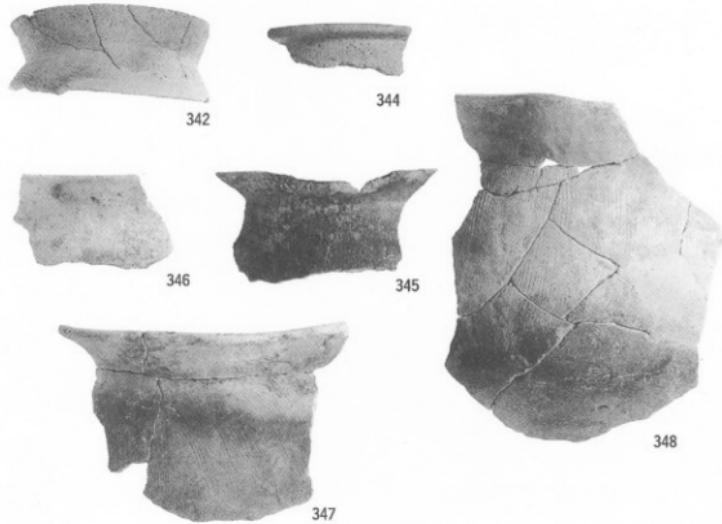
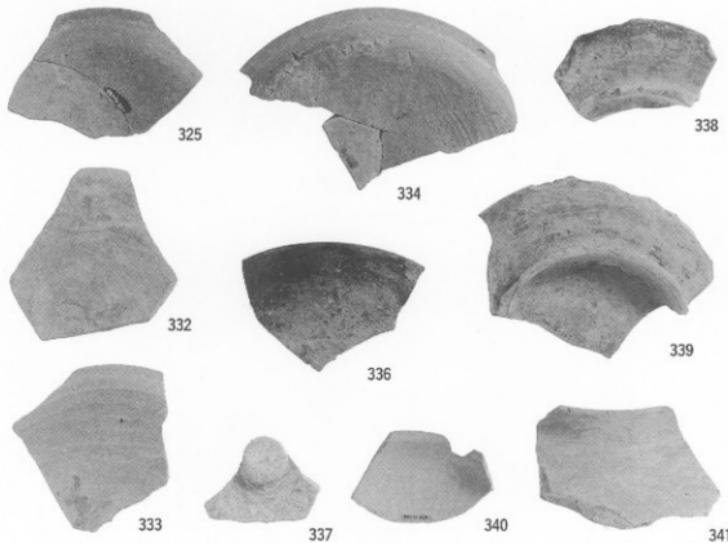
335



365



343

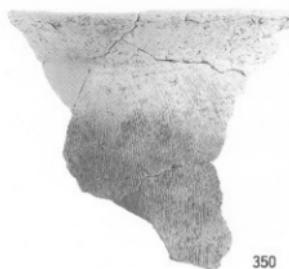




349



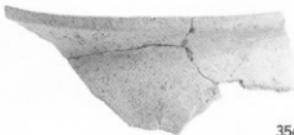
351



350



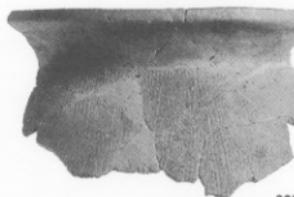
353



354



355



361



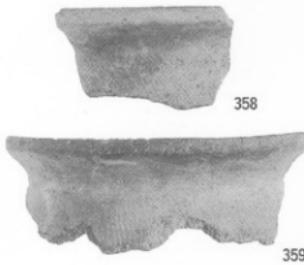
357



362



363



358



364



366



369



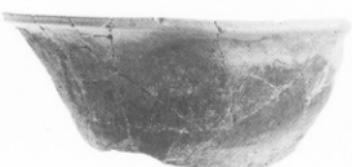
370



374



373



377



367



371



368



372



380



378



379



376

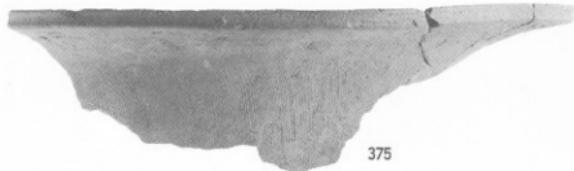
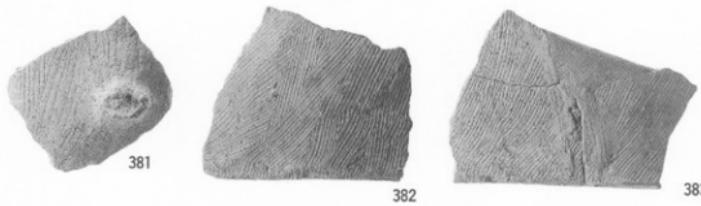


384



384





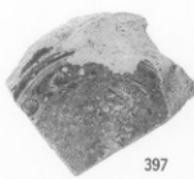
396



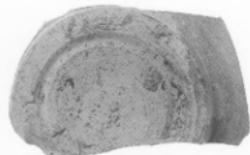
394



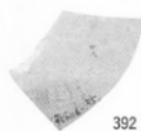
395



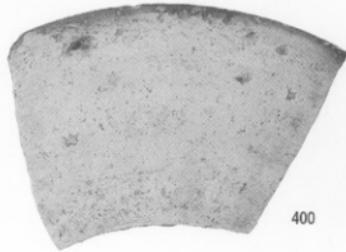
397



398



392

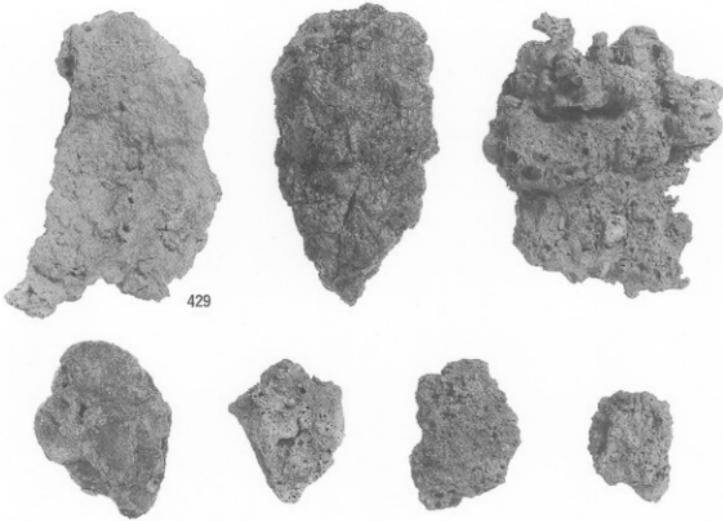
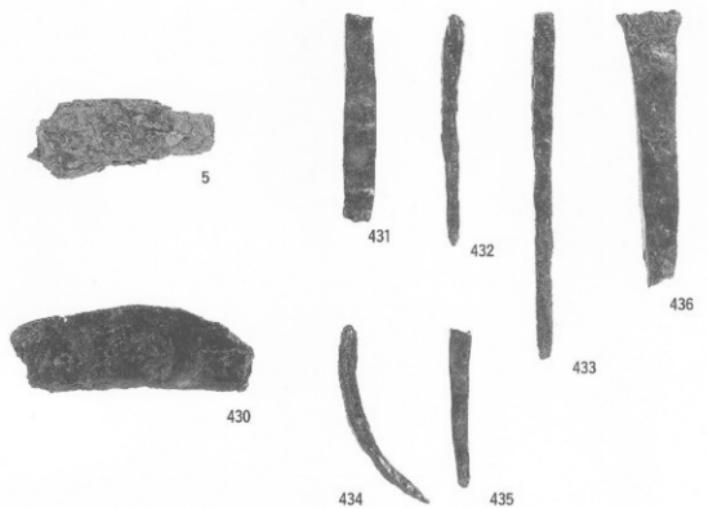


400

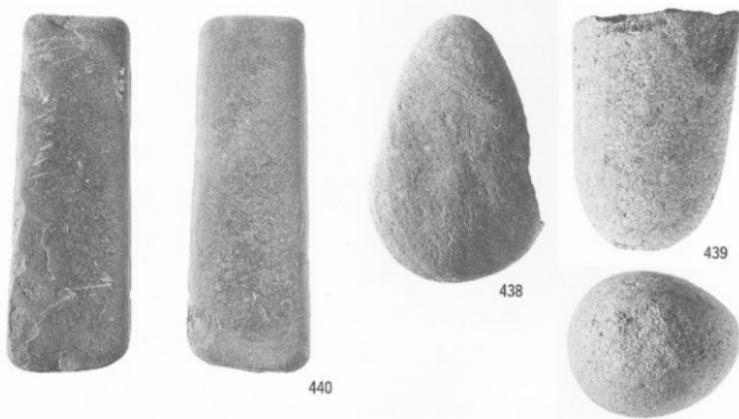
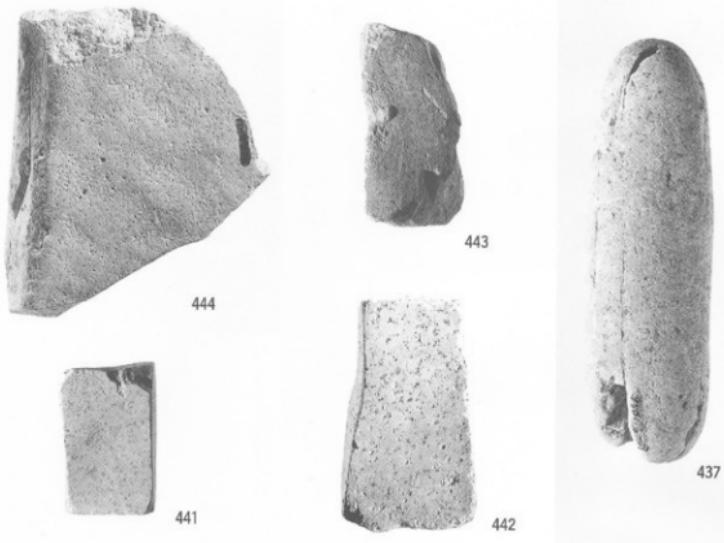


428





包含層出土遺物（鉄器）



包含層出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりあがな	あげし							
書名	上石遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第204冊							
編著者名	鐵英記・篠宮正・西口圭介・遠藤利恵・本吉恵理子・渡辺昇							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2000年(平成12)年3月31日							
所収 遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
上石遺跡	市町村: 濱坂町 上石 手渡り田	28554 940316 950116 970314 970396 970422	35度 33分 20秒	134度 48分 52秒	1995.2.14 1995.6.12 ~8.25 1997.9.18~19 1997.12.10~11 1998.2.26 ~3.10	53m ² 2,624m ² 62m ² 132m ² 414m ²	県営日高国 府住宅建設 事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上石遺跡	集落遺跡 (官衙関連)	奈良~平安時代	掘立柱建物跡、 井戸、土坑	須恵器、土師器、黒 色土器、綠釉陶器、 白磁、土鍤、羽口、 鉄鎌、鉄釘、砥石				

兵庫県文化財調査報告 第204号

日高町

上石遺跡

2000年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
